東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

# 医学部附属病院入院棟 A 地点

報告編《第 6 分冊》

基幹整備共同溝等地区の調査

2016

東京大学埋蔵文化財調査室

巻頭図版 1

HWK-2　3面全景

HWK-2　SX52甕埋設状況

HWK-4　ローム面全景

HWK-3　D面全景

巻頭図版２

九谷染付平碗（Ⅲ−26図7）

SX52（Ⅲ−25図）

# 凡　　例

1．遺構の実測図は原則として 1/50 で掲載している。それ以外は各図版に記した。

2．遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。ただし調査担当者が複数介在しているため、必ずしも遺構番号の大小が、遺構の新旧を表すものではない。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。

SA：塀跡　SB：建物跡　SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SL：便槽　SP：小穴

ST：埋葬施設　SU：地下室　SX：性格不明遺構

3．グリッドは、調査区北西隅を基準点とし（A1）、南へアルファベット、東へ自然数（アラビア数字）を 5m 間隔で付した。よってグリッド名は 5m 四方枡の北西コーナーを交点とする英数字をあてている。A1 の座標値は世界測地系第Ⅸ系 X ＝－ 32013.1397m、Y ＝－ 6113.1242m で、真北より 0 度 23 分 32 秒西偏している。

また、本グリッド網にかからない HWK－1、HWK－2 に関し、HWK－1 では平面直角座標系に準拠し、HWK－2 では調査区北西隅を基準に、南へアルファベット、東へ自然数（アラビア数字）を 5m 間隔で付す独自のグリッドを設定し、基本グリッドと識別するために、冠詞に K2 を付した。K2－A1 の座標値は、世界測地系第Ⅸ系 X ＝－ 32094.1354 m、Y ＝－ 6166.7880 である。なお、上記の世界測地系の値は平成 23（2011）年東北地方太平洋沖地震による変動数値補正後の世界測地系（JGD2011）である。

4．遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目 3 東大赤門前（T.P.:23.4046m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお、「郷（2）」の T.P. は、平成 6 年 7 月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

5．遺物実測図は個別図に指示がない場合、基本的に以下の尺度で掲載している。

1/1：銭貨

1/2：金属製品

1/3：陶磁器、土器、人形・玩具、木製品、石製品、ガラス製品、動物製品、繊維製品

1/4：瓦

6．陶磁器・土器の実測図に付けられる記号及びトーンは以下のことを表している。

・▲は高台、見込みなどの釉際を表しており、磁器と釉際の描写が不可能な陶器に用いている。

・＼――／は、口唇部の口銹を表している。

・＼←→／は、人為的な磨耗痕、敲打痕を表している。

・↓――↓は、擂鉢体部擂目の範囲を表している。

・中心線上下端の破線は、各々推定口径、推定底径を表している。

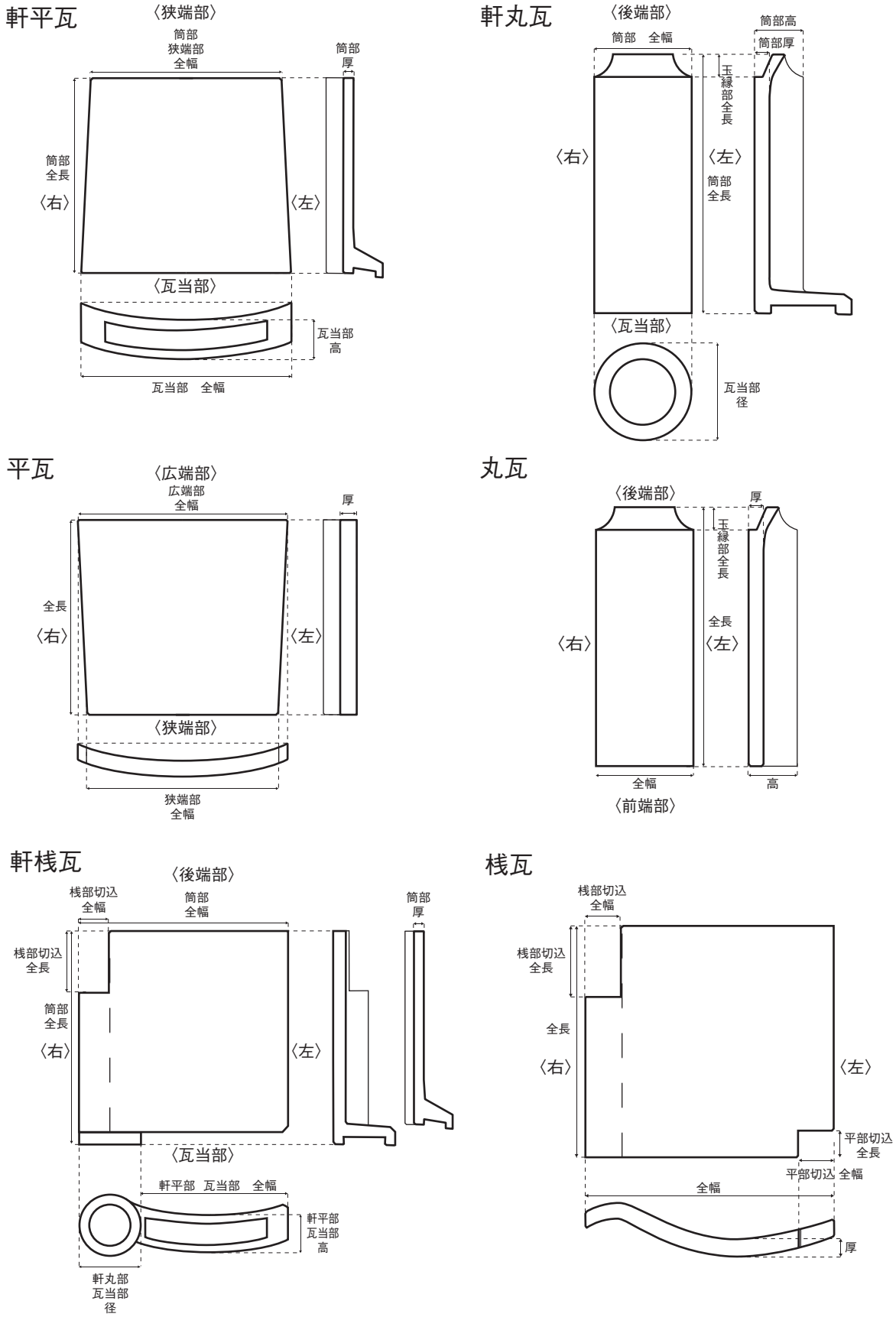
・スクリーントーンは、▒ が青磁の ▒ が施釉土器の施釉範囲を表している。

7．本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報２　別冊東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1)』に一部変更点を加えた新分類に拠った。変更の詳細は、第３分冊に提示した。また人形・玩具の分類は「東京大学構内遺跡出土の人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報7』に拠った。

8．遺物番号は本文、挿図、観察表、DVD－ROM の写真で共通の番号を使用した。

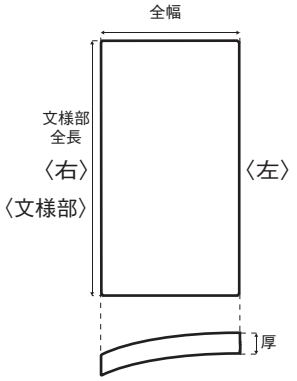
9．遺物観察表は、全て第１分冊添付の DVD－ROM に Excel ファイルにて収録している。

10. 遺物写真は、掲載遺物各個について写真撮影を行い、これを 1280 × 850 ピクセルで jpeg に圧縮し、第１分冊添付の DVD－ROM に収録している。

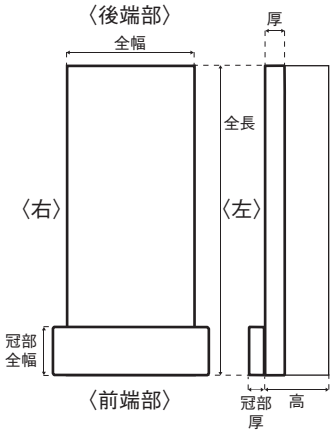



瓦凡例(1)　軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、軒桟瓦、桟瓦

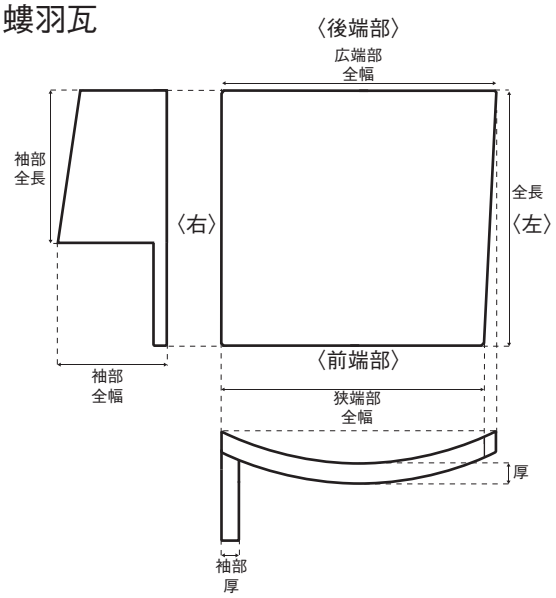
## 熨斗瓦




## 冠瓦




## 螻羽瓦




瓦凡例(2)　熨斗瓦、冠瓦、螻羽(けらば)瓦

## ○胎質

J（磁器）　T（陶器）　D（土器）

## ○生産地

A－輸入陶磁器

A1　景徳鎮窯系
A2　漳州窯系
A3　徳化窯系
A4　龍泉窯系
A5　宜興窯系
A6　朝鮮
A7　ベトナム
A8　ヨーロッパ
A9　福建・広東系
A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－薩摩系
R－三田系
S－飯能系
Z－不明

## ○器種

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1. 碗 | 2. 皿・平鉢 | 3. 大皿・大皿鉢 | 4. 燗徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 燗鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 溲瓶 | 29. 擂鉢 | 30. 餌入れ |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | |
| 63. あんか | 64. 煙硝擂鉢 | 65. 乳棒 | 66. 硯屏 | 67. 釜 |

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類

# 医学部附属病院入院棟Ａ地点
# 報告編《第６分冊》
## 基幹整備共同溝等地区の調査

## 目　　次

口　　絵
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 …… 1

第Ⅱ章　HWK －１地点の調査 …… 3
　第１節　調査の概要 …… 3
　遺構一覧表 …… 5
　第２節　遺構 …… 6
　第３節　遺物 …… 8
　まとめ …… 9

第Ⅲ章　HWK －２地点の調査 …… 12
　第１節　調査の概要 …… 12
　遺構一覧表 …… 17
　第２節　遺構 …… 19
　第３節　遺物 …… 34
　まとめ …… 46

第Ⅳ章　HWK －３地点の調査 …… 49
　第１節　調査の概要 …… 49
　遺構一覧表 …… 55
　第２節　遺構 …… 57
　第３節　遺物 …… 70
　まとめ …… 73

第Ⅴ章　HWK －４地点の調査 …… 74
　第１節　調査の概要 …… 74
　遺構一覧表 …… 74
　第２節　遺構 …… 74
　第３節　遺物 …… 76
　まとめ …… 79

# 第Ⅰ章　調査の経緯と経過

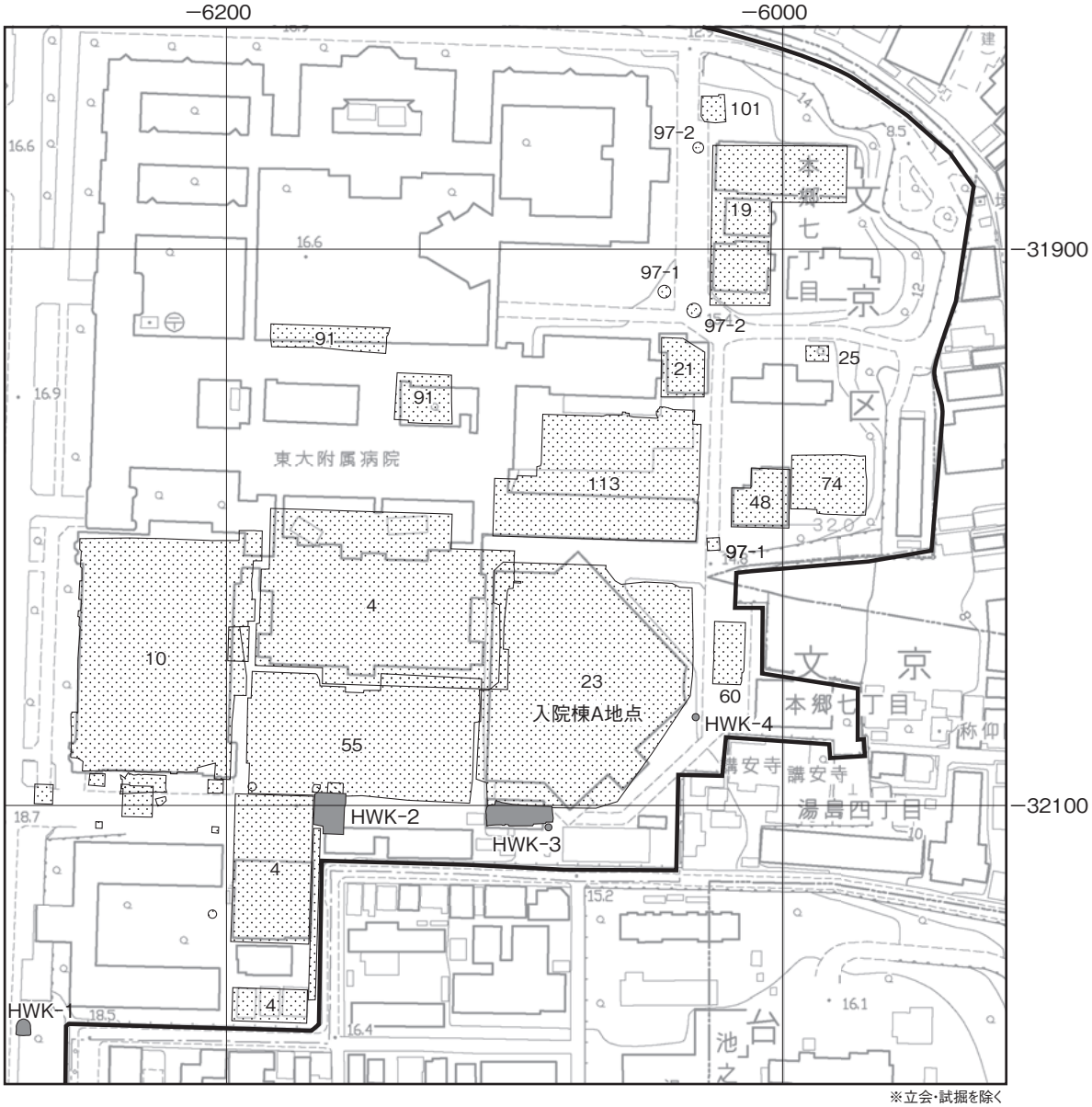
医学部附属病院入院棟Ａ建設に伴い、ライフラインを供給する共同溝を設備管理棟から入院棟Ａまで延長する必要があった。また既設の下水本管は入院棟Ａ建設地内に埋設されていたため、それを切り回す必要があった。いずれの工事も本管自体は自然堆積層中を地下推進工法によって行われるため、基本的には埋蔵文化財には影響がなかったが、シールド用縦坑部と人孔設置部分に関しては、開削による工事が行われることから、その部分に関し、事前調査を行うことになった。また、新営建物敷地内には１本の巨木ケヤキがあり、伐採もしくは移植の必要があったが、本部と病院による協議の結果、移植することになり、移植場所として南研究棟西側の植樹帯が選定された。移植に関し根回り約5m、深さ2mの掘方が必要とされることから、移植先の埋蔵文化財調査を行うことになった。個々の調査対象地の調査原因は上記したように各々の要因によるが、いずれも入院棟Ａ建設に伴う基幹整備として執り行われていることから、基幹整備共同溝等地区（略称HWK）とし、各々の対象地に通し番号を付した。

HWK－1地点は、ケヤキ移植先で、20㎡を対象に1996年5月12日～18日にかけて調査を実施した。本地点はグリッド設定区外に位置するため、平面直角座標系を基準として測量にあたった。

HWK－2地点は、設備管理棟の東側に隣接し、設備管理棟北側の地下部分と新設する共同溝の接続部分における地下枡設置及び下水本管の縦坑新設と、シールド工法のスタート地点としての掘削箇所で、102㎡を対象に1996年5月27日～6月27日にかけて調査を実施した。本地点もまた入院棟Ａ地点に設置したグリッド設定区外にあたることから、調査地点略称のK2を冠に付した独自グリッドを設定して調査を行った。

HWK－3地点は、入院棟Ａ地点の南側に位置し、共同溝本管から入院棟Ａに分岐する地下枡設置に伴う開削範囲と、その南東に位置する下水本管人孔設置に伴う縦坑を対象とする。前者が179㎡、後者が4.9㎡で、1996年6月3日～20日にかけて調査を実施した。本地点は入院棟Ａ地点で設定したグリッドを延長して、測量を行った。

HWK－4地点は、下水本管屈曲部の人孔設置に伴う深楚工法による縦坑部4.9㎡を対象とし、1996年6月24日～28日にかけて調査を実施した。本地点は入院棟Ａ地点で設定したグリッドを延長して、測量を行った。




4　医学部附属病院中央診療棟（病中）・設備管理棟（エネセン）
　・給水設備棟（給水）・共同溝（共同溝）
10　医学部附属病院外来診療棟（HG）
19　医学部附属病院看護師宿舎（HN）
21　医学部附属病院MRI-CT棟（MRI）
23　医学部附属病院入院棟A（HW）
25　医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場（HND）
48　医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期（HNⅡ）
55　医学部附属病院第2中央診療棟（HHC299）
60　医学部附属病院基幹整備外構施設等（HWK-6）
74　医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期（HHN308）
91　医学部附属病院立体駐車場（HHP09）
97-1　基幹整備（流域⑧排水）A区（HKS09）
97-2　基幹整備（流域⑧排水）B区（HKS09）
101　ドナルド・マクドナルド・ハウス東大（HMH10）
113　医学部附属病院入院棟Ⅱ期（HHWB12）

Ⅰ-1図　調査地点の位置

# 第Ⅱ章　HWK－1 地点の調査

## 第 1 節　調査の概要

### (1)　調査に至る経緯

東京大学医学部附属病院が計画した入院棟 A 建設範囲内南西部に位置するケヤキに対し、樹木保護の観点から移植することが決定した。病院敷地内は将来的に続く再開発計画のため、移植場所を確保することができず、龍岡門から病院敷地に至る車道東側の植樹帯が移植地として選定された。移植地は文京区№47 本郷台遺跡群内に位置し、移植のために直径 5 m、深さ 2 mの掘削を必要とすることから、大学当局と協議した結果、本調査を実施することとなった。

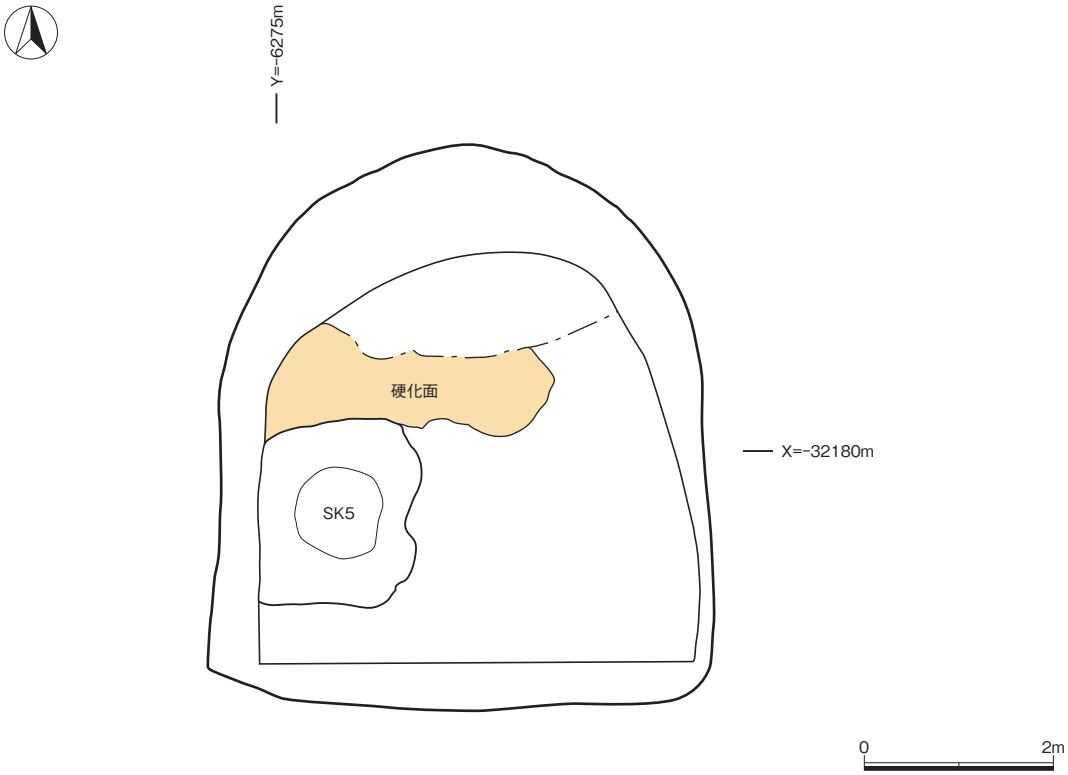
### (2)　調査の方法と経過

本地点は、入院棟 A 地点に設定したグリッド範囲から外れることから、平面直角座標系を基準として遺構測量を行った。調査は、ケヤキ移植坑範囲 20㎡を対象に、1996 年 5 月 12 日より 18 日にかけて行い、3 枚の遺構面と、4 基の遺構を検出した。

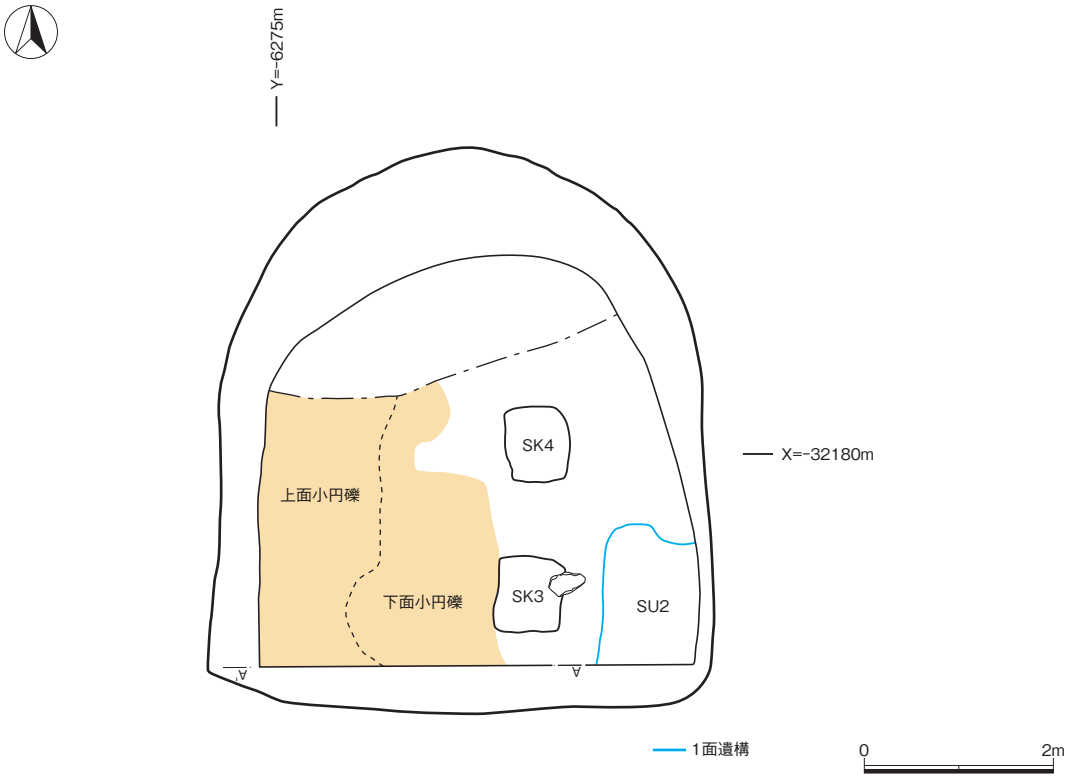
### (3)　調査地点の位置と環境

本地点は 1994 年に調査を行った山上会館龍岡門別館地点（本郷 22）の北方約 90 mに位置する。江戸時代は加賀藩本郷邸の東端部にあたり、絵図との比較から天和 3 年以降、幕末まで東御長屋下壇の庭部分に比定され、確認された遺構、遺物は、それに関連する資料と考えられる（Ⅰ－1 図）。

本地点の北側は、既設共同溝の縦坑掘方による撹乱を受けており、基本層序を確認するために撹乱内を重機掘削したところ、現表下約－270cm で自然堆積層の黒褐色土が確認され、さらにその下約 70cm で漸移層に至ることが確認された。山上会館龍岡門別館地点では調査区北端付近のロームレベルが標高約 21.2 mを測り、本地点の漸移層レベル標高 18.6m とは 2.6m の標高差がある。山上会館龍岡門別館地点のローム面は現表下 1m 弱で検出され、沖積層は認められなかった調査結果と、江戸時代に存在した東御長屋が南側を上壇、北側を下壇と称し、現在も大学敷地に隣接する道が北方向へ下がっていることから、旧地形はかなりの傾斜で北方向に下がっていたことが確認できる。また本地点北側約 100m に位置する外来診療棟地点では南東部のローム確認面標高が 15.8m とさらに下がっているものの沖積層は認められなかったことから、本地点周辺には小支谷の埋没谷が存在したと考えられる。周囲の調査地点との位置関係と調査成果から、この埋没谷は、薬学部新館地点（本郷 15）で検出された谷頭にはじまり、薬学部総合研究棟地点（本郷 66）を経て本地点を通り、給水設備棟地点（本郷 4）の南側を東流し、本郷構内に隣接する龍岡町遺跡第 7 地点で北方向に向きを変え、第 2 中央診療棟地点（本郷 55）を横断し、中央診療棟地点（本郷 4）で再び東北東方向に向きを変え、入院棟 A 地点（本郷 23）の北側を通り、茅町二丁目遺跡を東南東方向に抜け、根津谷方面に蛇行して開くことが明らかになってきており、江戸初期、藩邸開発以前の旧地形は、蛇行する谷に沿った緩斜面地であったことが判明した。



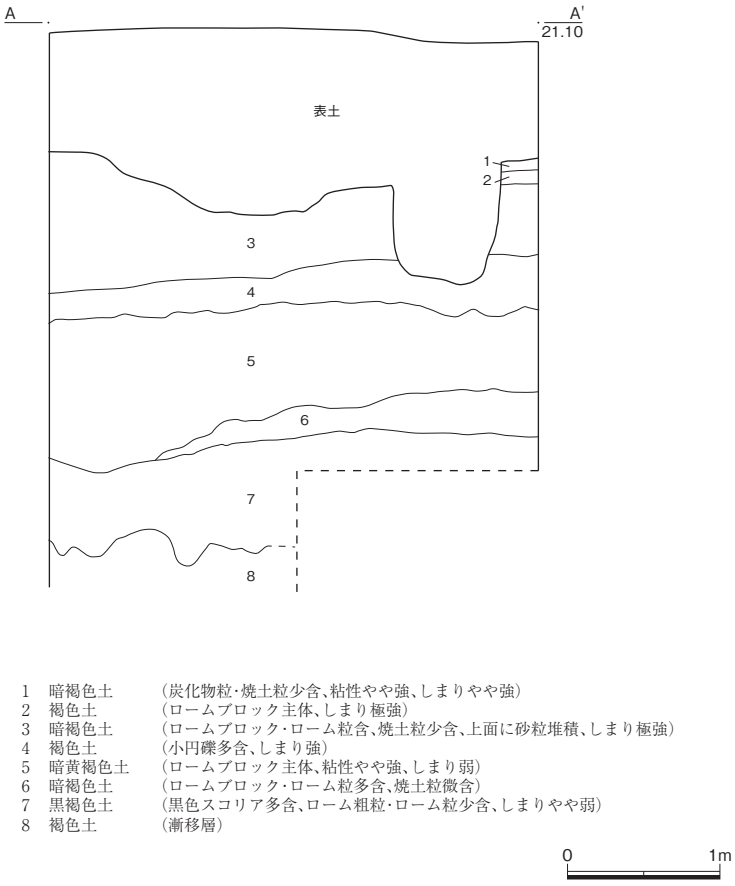

Ⅱ-1図　HWK-1 全体図3面




Ⅱ-2図　HWK-1 全体図1面･2面

この埋没谷の中央付近に位置する本地点は、山上会館龍岡門別館地点と比較してローム層上面レベルが低く、藩邸開発に伴う平準化を目的とした盛土造成によって、3枚の遺構面が構築されたことが確認された（Ⅱ－1、2図）。以下、基本層序を記載する。

7層の黒褐色土は自然堆積層である。切土造成による平準化の痕跡が認められる。7層上で検出された遺構は江戸時代初期の遺構と考えられる（3面）。7層上にロームブロック主体の5、6層が約1m盛土造成され、4層によって整地されている。4層はローム土と砂利層が版築状に堆積し、非常に硬く締まっている（2面）。さらにロームブロック主体土が盛土され（3層）、整地されている（2層）。2層は撹乱の影響でわずかな範囲でしか捉えることができなかったが、表面は平坦に整形され、本地点で確認された最上面と位置付けられる（1面）。また2層直上には焼土層が堆積し（1層）、ある段階の被災面と捉えられる。1面で検出されたSU2出土陶磁器の年代観と同一面に近代遺構が存在していることから、明治元年の火災に比定されると考えられる。




Ⅱ-3図　基本層序

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | 遺　物　図　版（Ⅱ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅱ-@ | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| 欠番 | 1 | | | | | | | | | | |
| SU | 2 | 6 | 1面 | 7 | | | | | | | |
| SK | 3 | 4 | 2面 | | | | | | | | |
| SK | 4 | 5 | 2面 | | | | | | | | |
| SK | 5 | 1 | 3面 | | | | | | | | |

HWK－1 遺構一覧表

## 第２節　遺構

### (1) ３面の遺構

３面からは不整形遺構 SK5 が検出された（Ⅱ－1 図)。本遺構は坑底に複数の根穴が認められることから植栽痕と考えられる。また本遺構北側の黒褐色土表面は平坦に整形され、硬く締まった硬化面が拡がることから、オープンエリアと考えられる。本遺構は、オープンエリアとの境界を目的とした生け垣にあたる可能性もある。

### (2) ２面の遺構

ロームブロック主体盛土層上の遺構面で、西側では砂利敷き整地面が確認された（Ⅱ－2 図)。その状況から邸内路地と長屋敷地の境界にあたることが推定される。検出された遺構は 2 基で、いずれも方形土坑である（SK3、SK4)。

SK3、SK4（Ⅱ－4、5 図)

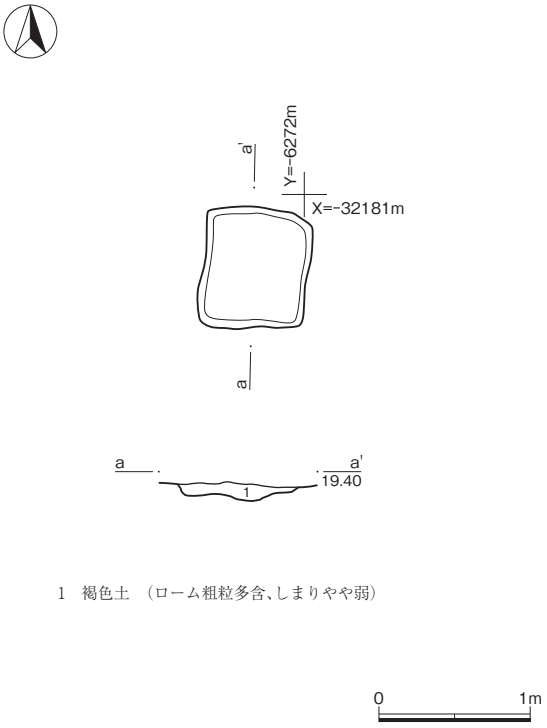
２面より検出された土坑である。平面形は方形を呈し、東西 70cm、南北 80cm、確認面からの深さは SK3 で 10cm、SK4 で 20cm を測る。両遺構の間隔は芯々で 160cm を測り、ほぼ南北に並ぶ。形態の類似性から供伴することが考えられる。本遺構面は両遺構を境に西側に砂利敷き整地層が拡がっていることから、両遺構は東御長屋敷地と邸内路地の境界にあたる塀跡の可能性が指摘できる。遺物は出土していない。

### (3) １面の遺構

本遺構面からは地下室 SU2 が検出された（Ⅱ－2 図)。それ以外の遺構は煉瓦片などを伴い近代以降に帰属することから、本遺構面は江戸から近代にかけて使用されていたと考えられる。また本遺構面直上には焼土層の堆積が認められたが、検出遺構の年代観から、明治元年の火災と推定される。

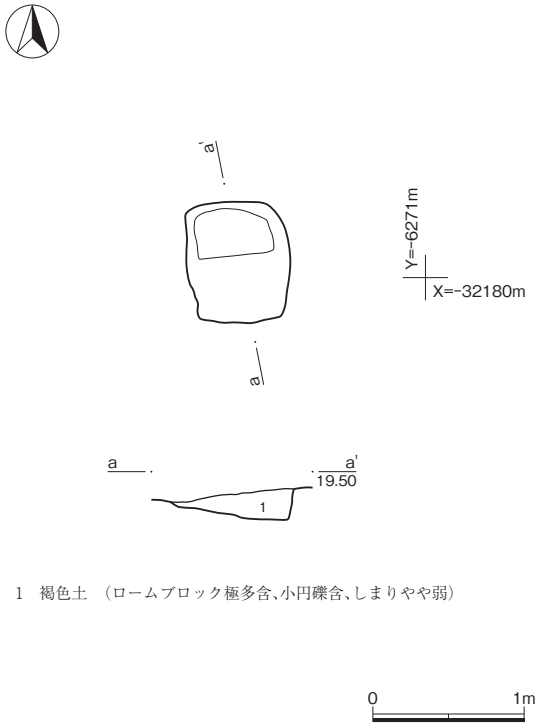
SU2（Ⅱ－6 図)

調査区南東部で検出された地下室である。遺構大半が調査区外に及び規模、形態ともに詳細は不明である。調査区域内での様相から開口部の平面形は方形または長方形と考えられる。壁は西、北方向にオーバーハングする。確認面からの深さは 250cm を測る。覆土はロームブロックを含み、ほぼ水平堆積を呈し、被災瓦片が含まれている。また 2、3 層は、本遺構埋没後に掘削された別遺構と考えられ、その堆積状況から柱穴の可能性がある。遺物は 18 世紀後葉から 19 世紀前半に比定される陶磁器類が出土している。本遺構は絵図との比較から東御長屋庭部分に構築された地下室と考えられる。



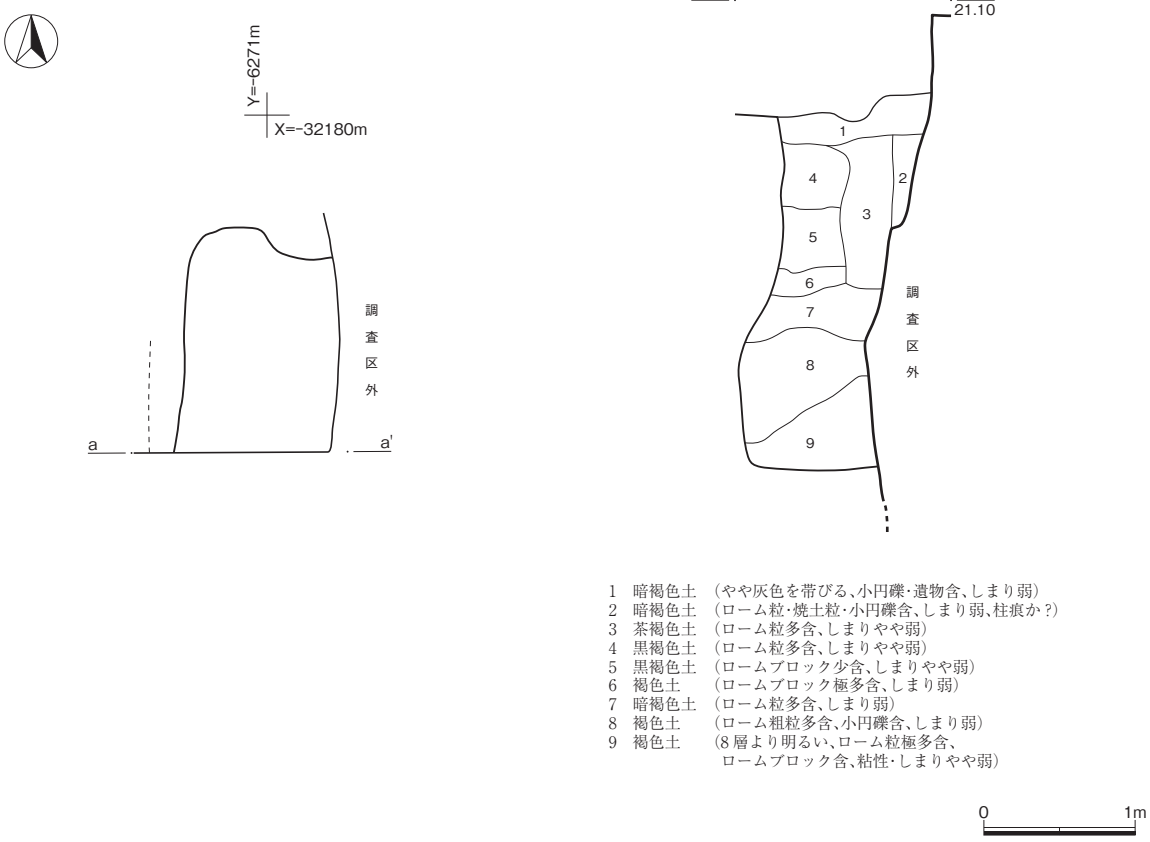

1　褐色土　（ローム粗粒多含、しまりやや弱）

Ⅱ-4図　SK3




1　褐色土　（ロームブロック極多含、小円礫含、しまりやや弱）

Ⅱ-5図　SK4




1　暗褐色土　（やや灰色を帯びる、小円礫・遺物含、しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒・小円礫含、しまり弱、柱痕か？）
3　茶褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
5　黒褐色土　（ロームブロック少含、しまりやや弱）
6　褐色土　（ロームブロック極多含、しまり弱）
7　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり弱）
8　褐色土　（ローム粗粒多含、小円礫含、しまり弱）
9　褐色土　（8層より明るい、ローム粒極多含、ロームブロック含、粘性・しまりやや弱）

Ⅱ-6図　SU2

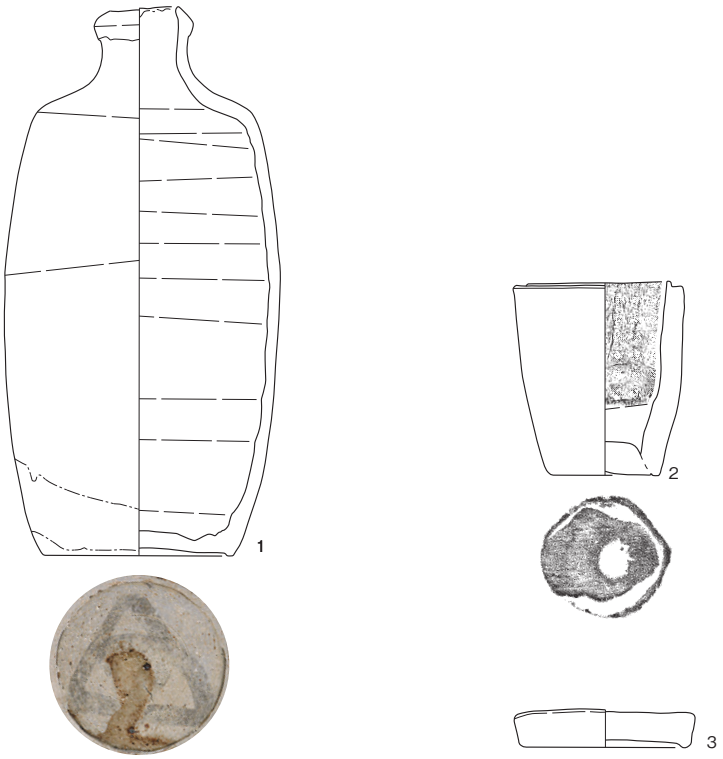
## 第３節　遺物

本地点出土遺物は、調査地点の位置関係から加賀藩邸に関する資料と考えられ、さらに藩邸絵図との対比から「東御長屋」に関する資料と考えられる。

本文中に示した、磁器・陶器・土器の分類基準は、本報告書第３分冊を参照されたい。

SU2（Ⅱ－７図）

１は五合徳利で、TC-10-d に分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質である。体部はほぼ寸胴形を呈し、最大径は体中位にある。口縁部は算盤玉形を呈し、口唇部内側には剥離痕が全周する。外面にはやや緑味を帯びた灰釉が掛けられ、体下部を拭き取っている。底部に屋号と思われる「三鱗」紋が墨書されている。２は板作り成形による塩壺で、DZ-51-ab に分類される。胎土は褐色を呈し、金雲母を多量に含む。底部は外側からはめられ、内体部には布目痕が観察される。口縁部直下の器面は横ナデによる整形が施されている。３は塩壺の蓋で、DZ-00-g に分類される。胎土は褐色を呈し、金雲母を多量に含む。裏面外端にはわずかに突起を有し、身掛かりを形成している。突起内にはきめ細かい布目痕が認められる。




Ⅱ-7図　SU2　磁器・陶器・土器

## まとめ

本調査地点からは、江戸時代に帰属する 3 枚の遺構面とそれに伴う遺構・遺物が確認された。第 1 節で述べたように、本地点は薬学部新館地点付近を谷頭として不忍池方面へ蛇行して開く開析谷上に位置する。そのため、江戸時代を通し 3 回約 180cm の盛土造成が行われていたことが明らかになった。本報告では検出順に上位の遺構面を 1 面とした。最も古い整地面である 3 面は、自然堆積層の黒褐色土を平準化したもので、1 辺約 200cm を測る不整形遺構が検出され、その北側に硬化面の拡がりが確認された。3 面上をロームブロック主体土で約 80cm 嵩上げし、表面を砂利層で整地した 2 面では南北に並ぶ方形土坑 SK4、SK5 が検出され、その西側で砂利敷き整地面の拡がりが確認された。さらに約 50cm 嵩上げし表面をロームブロック主体土で整地した 1 面では調査区東南端部より地下室 SU2 が検出された。また 1 面直上には厚さ数 cm を測る焼土層が堆積し、1 面段階で本地点を含む周辺部が被災したことが確認された。本節では上述した調査所見に本地点南側で調査された山上会館龍岡門別館地点で得られた調査所見を合わせ、本地点における土地利用変遷について若干の考察を加えてまとめとしたい。

3 面で検出された SK5 は、坑底に多数の根穴を有していたことから植栽痕と推定した。本地点周辺は現在植樹帯として利用されているが、本遺構周辺の遺構面上には根穴が認められなかったことから検出された根穴は本遺構の所産と考えた。本遺構は山上会館龍岡門別館地点 1 期に帰属する SB25、SB31 に形態、規模が類似し、それらと関連する塀跡もしくは生け垣跡と推定される。本遺構面が旧地形を整地した比較的簡素な造成であること、続く 2 面への造成が 1m 近い嵩上げを行っていることから、邸内平準化を目的とした大規模造成が行われる以前の生活面と考えられ、天和 2（1682）年以前の下屋敷段階の遺構面と推定される。

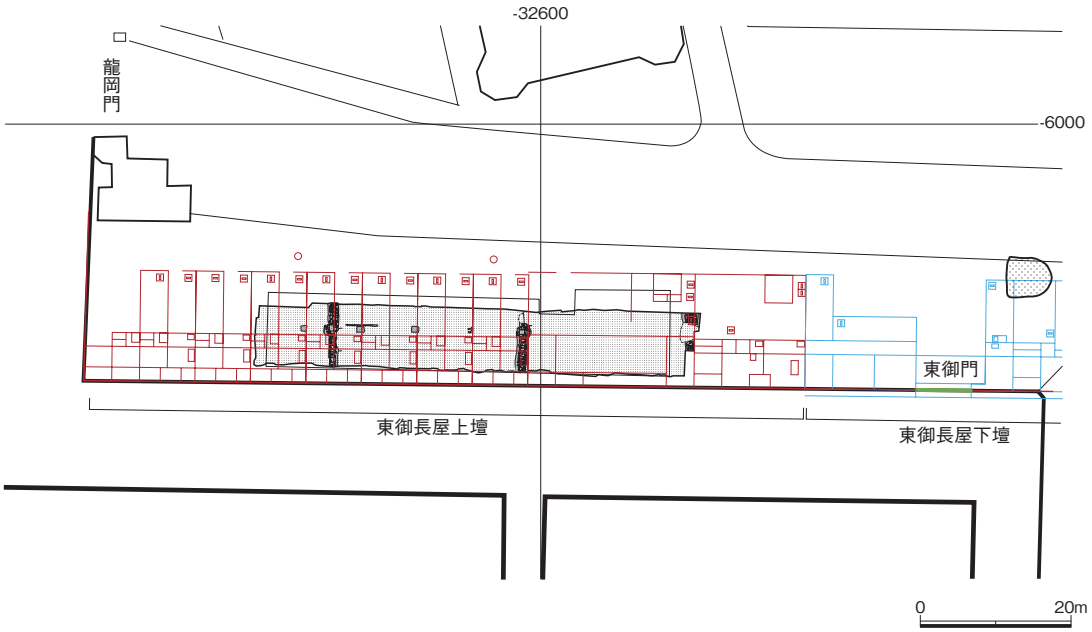
2 面構築に至る盛土造成は、ロームブロック主体土を用い約 1 mの嵩上げが行われた。この状況は、入院棟 A 地点における天和 3 年の盛土造成の様相に類似し、埋没谷上に位置し周囲より低標高であった本地点周辺を南方をはじめとする周囲の高標高生活面に合わせることを目的とした大規模造成であったことが考えられる。この造成時期と土地利用状況を遺構検出状況と絵図面との対比から以下に整理する。なお本地点周辺の絵図対比に関しては『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 所収「山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告」で詳細な考察が行われているので（香取 2004）、それを元に本地点の様相を考えたい。

現存する本郷邸屋敷絵図で最も古い絵図には、元禄元（1688）年とされる「武州本郷邸図」とそれに続く「御上屋敷御殿閣図」がある（いずれも前田育徳会所蔵）。両絵図と調査地点を対比させると、東御門を介した表長屋が描かれ、そのうち「御上屋敷御殿閣図」に記載された各部屋毎の居住者名から、本地点は「輿力並」の一角に比定される。この長屋は間口 4 ～ 5 間に仕切られ、建物西側には前庭を備えている。ここに記載された表長屋は間取りの変更などの変化は認められるものの、長屋自体は、幕末まで平士（中級藩士）の居住区として継続して存在している。Ⅱ－8 図は文久 3（1863）年に描かれた「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」（大鋸コレクション、石川県立歴史博物館所蔵）と現況図との合成対比図である。この図から本地点は東御長屋のうち東御門を含む下壇と称される長屋の前庭敷地境界付近に比定される。本遺構面で検出された SK4、SK5 は遺構列を境に西側に砂利敷き硬化面が存在しているが、絵図との対比から遺構列は表長屋西側敷地境界に位置し、表長屋前庭を取り囲む敷地境塀の基礎遺構と考えられ、西側に拡がる砂利敷き硬化面は、西側の御殿空間との間に拡がる詰

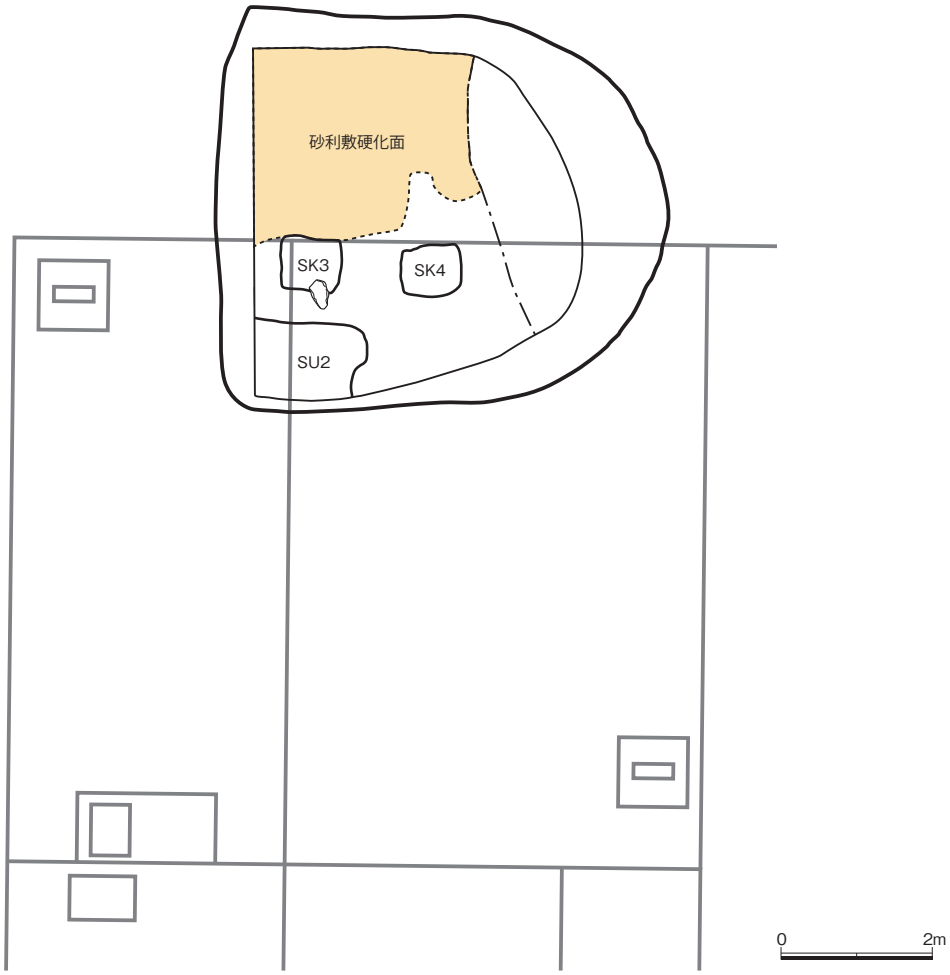
人空間路地機能を有する空閑地に比定することができる（Ⅱ－9図）。これらの様相から2面構築は、表長屋成立段階と考えられる上屋敷造成に向けた天和2年火災後の藩邸大規模再開発段階と考えられる。

1面からはSU2が検出されているが、近代以降に帰属する遺構も検出されており、本遺構面が近代まで機能していたことが確認される。SU2は第2節でも述べたように、上部に別遺構が重複しており、1面で検出されたプランは上部遺構に伴う可能性が高い。このような検出遺構の状況から、1面直上で検出された焼土層は、明治元年の火災層の可能性が考えられる。

以上、狭小な調査区ではあるが、近接調査地点での成果を元に土地利用の復元を試みた。本地点の東側にある南研究棟は、CRC－B棟建設計画によって将来解体されることが予定されており、南研究棟から山上会館龍岡門別館に至る現駐車場もその建設計画範囲に含まれ、再開発に伴う発掘調査が予定されている。遺存状況が良好であれば、東御門を含む東御長屋上壇及び下壇関連遺構の存在が予想され、本地点での考察を再検討できることが大いに期待される。




Ⅱ-8図　調査地点と東御長屋合成図
（香取2004より作成、座標は日本測地系）




Ⅱ-9図　1、2面検出遺構と東御長屋下壇対比図
（香取2004より作成）

# 第Ⅲ章　HWK－2 地点の調査

## 第 1 節　調査の概要

### (1)　調査に至る経緯

東京大学医学部附属病院が計画した入院棟 A 建設に伴い、共同溝によって、各種ライフラインを設備管理棟から入院棟 A まで延長する必要があった。すでに中央診療棟、外来診療棟新営時には、遺跡保護の観点から推進工法によって共同溝が埋設されており、本地点も同様に遺構遺存深度下での推進工法が適用されることになった。それに伴い設備管理棟と接続し入院棟 A に進むための推進工法縦坑として本地点が掘削対象となり、掘削面積を検討・協議した結果、事前調査を実施することとなった。

### (2)　調査の方法と経過

本地点は、入院棟 A 地点とは独立して、平面直角座標系を基準としたグリッドを設定して遺構測量を行った。調査は、縦坑掘削範囲 102㎡を対象に、1996 年 5 月 27 日より 6 月 27 日にかけて行い、3 ～ 4 面の遺構面と、119 基の遺構を検出した。

### (3)　調査地点の位置と環境

本地点は 1986 年に調査を行った中央診療棟新営関連地点のうち、設備管理棟地点の北東に、また基幹整備施設 U・V ＝ 31・32 区の南側に、U・V ＝ 33 区の南東に隣接する。次節でも触れているが、特に設備管理棟地点、U・V ＝ 31・32 区では、本地点にかけて拡がる遺構が検出されている。但し、設備管理棟地点とのつながりはその間に存在する既存コンクリート擁壁基礎などの撹乱を受け、不明点も多い。

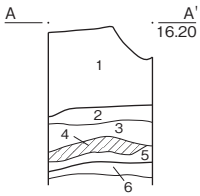
調査地点は、病院内にあって道路もしくはオープンスペースとして使用されてきたため、先述した調査区西端を南北方向に伸びるコンクリート擁壁基礎による撹乱以外にもほぼ中央部を東西方向に伸びる下水土管溝をはじめ、電気、通信、下水塩ビ管など、本郷キャンパス創設以降現在に至る数多くの撹乱が存在する。さらに下水土管埋設溝南側は全体的に一律に削平されている状況であった。調査区北側で撹乱の影響を受けていない区域では、かなり断片的ではあるが、幕末からの遺構面が比較的良好な状態で遺存していた。

調査地点は、絵図資料との比較から、寛永 16（1639）年以前は、加賀金沢藩下屋敷に、それ以降は一貫して大聖寺藩邸内に位置するが、遺構出土遺物年代から、検出された遺構は全て大聖寺藩邸に帰属すると考えられる。

### (4) 基本層序

Ⅲ－1 図は下水土管溝掘方北壁における基本層序で、その位置はⅢ－2 図 A－A' に示している。2 層の灰色粘土ブロック・漆喰片を含む褐色土は、やや黄灰色を帯びた粘質土で第 2 中央診療棟地点調

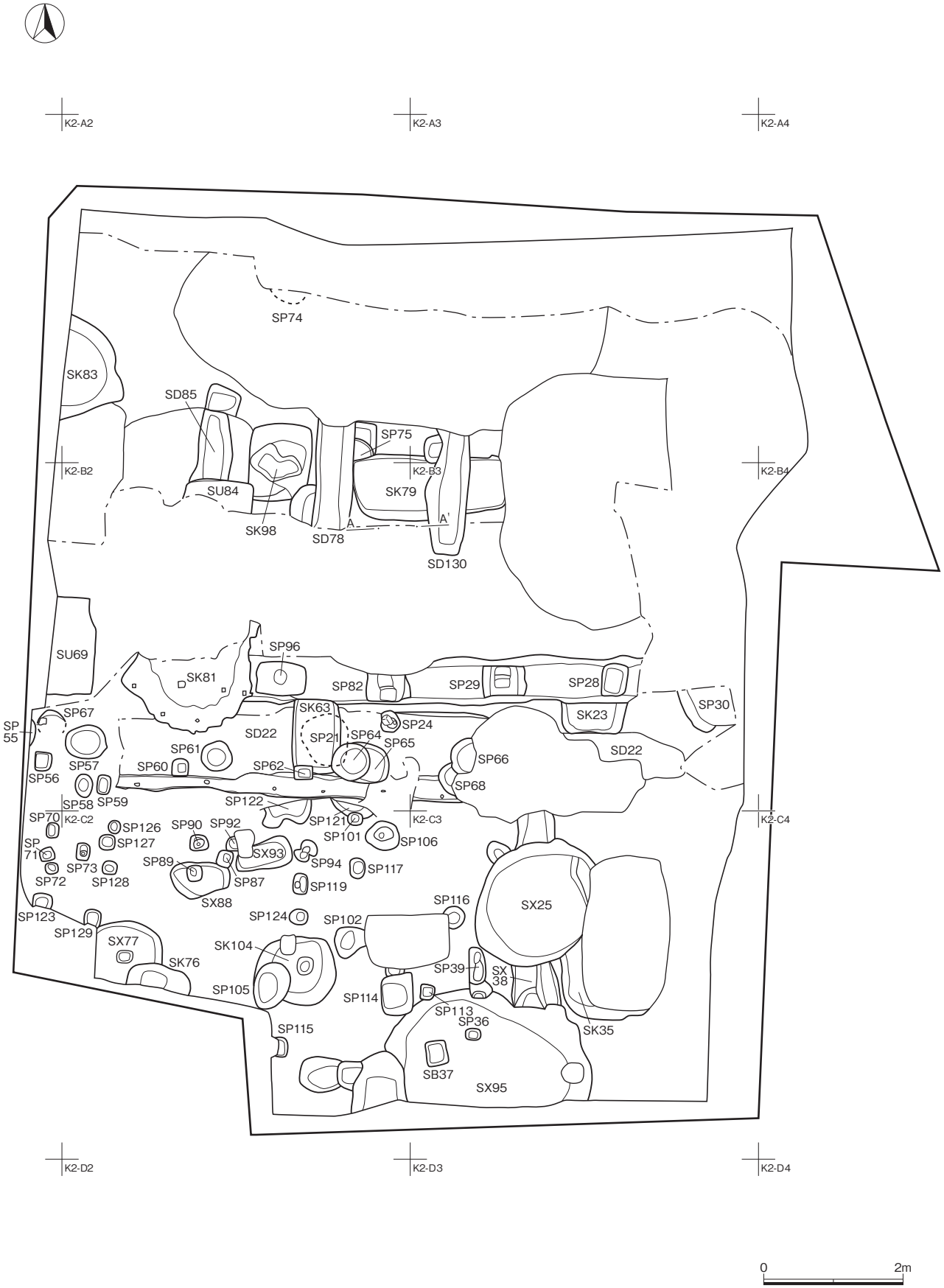
査時においても最上面で検出された盛土層である。本地点では遺存状況が比較的良好な K2－B ライン以北にて検出された。また部分的ではあるが、2 層上には焼土層の堆積が確認されており、概期に火災があったことを窺わせる。本地点では、この 2 層表面および 2 層分布範囲以外でそれに該当する遺構を 1 面帰属遺構とした。4 層は焼土ブロックを多量に含む暗褐色土層で、火災後の瓦礫整理層と位置付けられる。2 層同様 K2－B ライン以北にて確認された。調査区北西域にて本層上に宝永の新期テフラと考えられる火山灰層が検出されていることから、該当する火災は、元禄 16（1703）年と考えられる。よって 5 層上面は、元禄 16 年を下限とすると位置付けられ、入院棟 A 地点 1 区 C 面に対比される。また焼土層は 3 層上面においても部分的に確認されており、享保 15（1730）年など 18 世紀代の藩邸火災に比定される。いずれの盛土層も部分的な遺存状況を呈していることから、3 ～ 5 層上面に帰属する遺構を 2 面帰属遺構とした。6 層は砂粒を多量に含む砂質褐色土で、入院棟 A 地点 1 区 C 層硬化面に対比することができる。よってその直下のローム面（3 面）は天和 2（1682）年を下限とすると推定される。



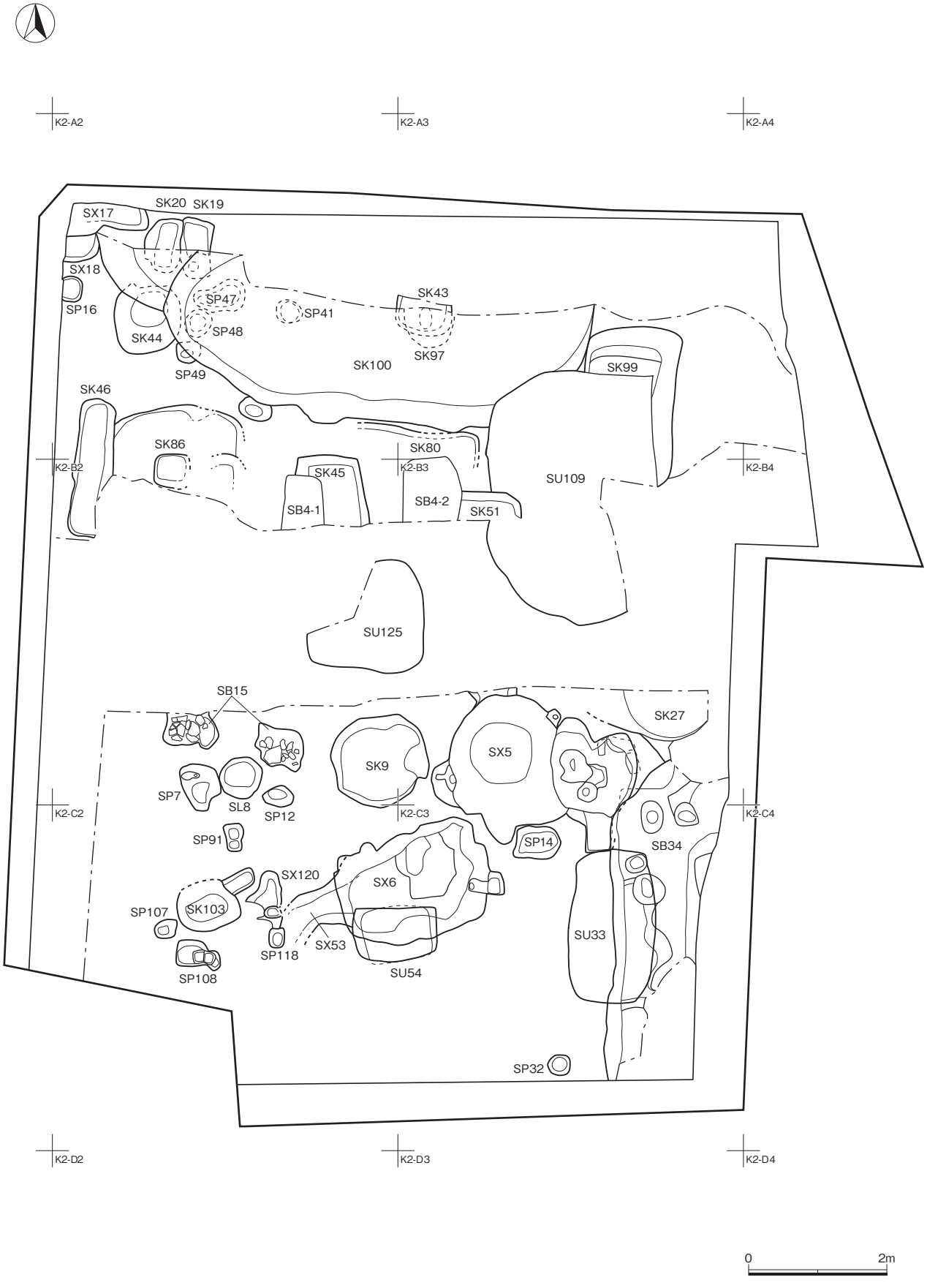

1　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・小円礫含）
2　褐色土　（灰色粘土ブロック・漆喰多含、しまりやや強）
3　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、しまり極強）
4　暗褐色土　（焼土ブロック極多含、粘性やや弱、しまりやや弱）
5　暗褐色土　（ローム粒・小円礫含）
6　褐色土　（砂質、砂粒多含、しまり極強）

0　1m

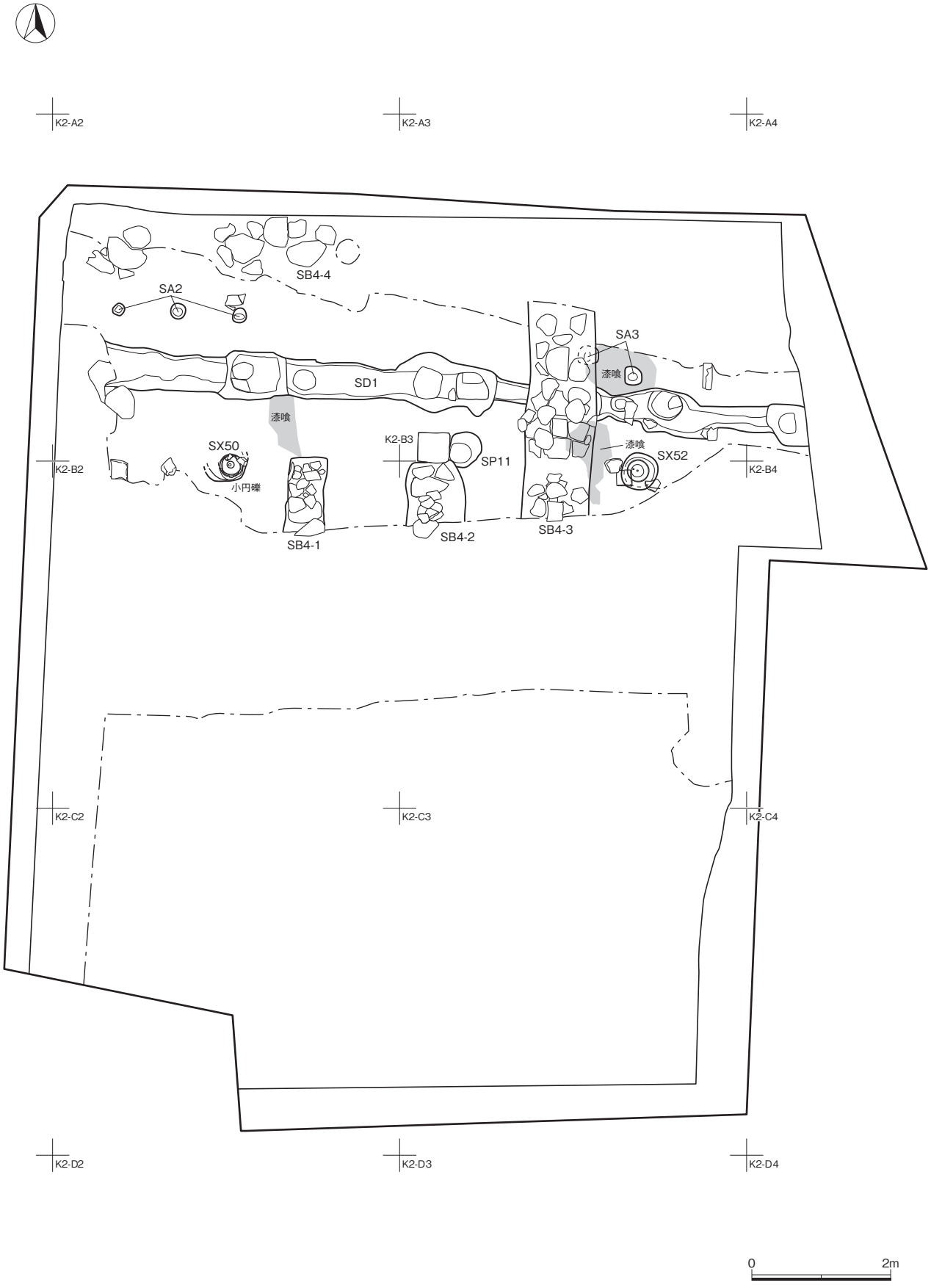
**Ⅲ-1図　基本層序**




Ⅲ-2図　HWK-2　全体図3面




Ⅲ-3図　HWK-2　全体図2面




Ⅲ-4図　HWK-2　全体図1面

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（Ⅲ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅲ-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| SD | 1 | 22 | 1面 | K2-A2、K2-A3、K2-A4 | | | | | | | | |
| SA | 2 | 20 | 1面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SA | 3 | 21 | 1面 | K2-A3 | | | | | | | | |
| SB | 4 | 23 | 1面 | K2-A2、K2-A3、K2-B2、K2-B3 | 23 | | | | | | | |
| SX | 5 | 11 | 2面 | K2-B3、K2-C3 | 23 | | | | | | | |
| SX | 6 | 2 | 2面 | K2-C2、K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 7 | 2 | 2面 | K2-B2、K2-C2 | | | | | | | | |
| SL | 8 | 14 | 2面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 9 | 2 | 2面 | K2-B2、K2-B3、K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 11 | 3 | 1面 | K2-A3、K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 12 | 2 | 2面 | K2-B2、K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 14 | 2 | 2面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SB | 15 | 10 | 2面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 16 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SX | 17 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SX | 18 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SK | 19 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SK | 20 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SD | 22 | 5 | 3面 | K2-B2、K2-B3 | | | | | | | | |
| SK | 23 | 1 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 24 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SX | 25 | 2 | 2面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SK | 27 | 2 | 2面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 28 | 9 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 29 | 9 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 30 | 1 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 32 | 2 | 2面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SU | 33 | 15 | 2面 | K2-C3 | 24 | | | | | | | |
| SB | 34 | 17 | 2面 | K2-B3、K2-C3 | 25 | | | | | | | |
| SK | 35 | 2 | 2面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 36 | 1 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SB | 37 | 2 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SX | 38 | 1 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 39 | 1 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 41 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SK | 43 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-A3 | | | | | | | | |
| SK | 44 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SK | 45 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 46 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 47 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SP | 48 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SP | 49 | 2 | 2面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SX | 50 | 18 | 1面 | K2-A2、K2-B2 | 25 | | | | | | | |
| SK | 51 | 2 | 2面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SX | 52 | 19 | 1面 | K2-A3、K2-B3 | 25 | | | | | | | |
| SX | 53 | 13 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |

Ⅲ－1表　HWK－2遺構一覧表（1）

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（Ⅲ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅲ-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| SU | 54 | 13 | 2面 | K2-C2、K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 55 | 1 | 3面 | K2-B1 | | | | | | | | |
| SP | 56 | 1 | 3面 | K2-B1 | | | | | | | | |
| SP | 57 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 58 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 59 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 60 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 61 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 62 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 63 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 64 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 65 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 66 | 1 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 67 | 1 | 3面 | K2-B1、K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 68 | 1 | 3面 | K2-B3 | | | | | | | | |
| SU | 69 | 7 | 3面 | K2-B1、K2-B2 | 25 ～<br>27 | | | | | | | |
| SP | 70 | 1 | 3面 | K2-C1 | | | | | | | | |
| SP | 71 | 1 | 3面 | K2-C1 | | | | | | | | |
| SP | 72 | 1 | 3面 | K2-C1 | | | | | | | | |
| SP | 73 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 74 | 1 | 3面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SP | 75 | 1 | 3面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SK | 76 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SX | 77 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 78 | 1 | 3面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 79 | 1 | 3面 | K2-A2、K2-A3、K2-B2、K2-B3 | | | | | | | | |
| SK | 80 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-A3 | | | | | | | | |
| SK | 81 | 1 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 82 | 9 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 83 | 1 | 3面 | K2-A2 | | | | | | | | |
| SU | 84 | 8 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SD | 85 | 6 | 3面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 86 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SP | 87 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SX | 88 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 89 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 90 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 91 | 2 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 92 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SX | 93 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 94 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SX | 95 | 1 | 3面 | K2-C2、K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 96 | 9 | 3面 | K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 97 | 2 | 2面 | K2-A3 | | | | | | | | |
| SK | 98 | 1 | 3面 | K2-A2、K2-B2 | | | | | | | | |
| SK | 99 | 2 | 2面 | K2-A3、K2-B3 | | | | | | | | |
| SK | 100 | 2 | 2面 | K2-A2、K2-A3 | | | | | | | | |

Ⅲ－1 表　HWK－2 遺構一覧表（2）

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（Ⅲ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅲ-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| SP | 101 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 102 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SK | 103 | 2 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SK | 104 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 105 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 106 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 107 | 2 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 108 | 2 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SU | 109 | 16 | 2面 | K2-A3、K2-B3 | 27、28 | | | | | | | |
| SP | 113 | 1 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 114 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 115 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 116 | 1 | 3面 | K2-C3 | | | | | | | | |
| SP | 117 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 118 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 119 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SX | 120 | 2 | 2面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 121 | 1 | 3面 | K2-B2、K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 122 | 1 | 3面 | K2-B2、K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 123 | 1 | 3面 | K2-C1 | | | | | | | | |
| SP | 124 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SU | 125 | 2 | 2面 | K2-B2、K2-B3 | | | | | | | | |
| SP | 126 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 127 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 128 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SP | 129 | 1 | 3面 | K2-C2 | | | | | | | | |
| SD | 130 | 1 | 3面 | K2-A3、K2-B3 | | | | | | | | |

Ⅲ－1 表　HWK－2 遺構一覧表（3）

## 第 2 節　遺構

### （1）3 面の遺構

SD22（Ⅲ－5 図）

3 面に帰属する溝状遺構で、K2－B・2 ～ 3 グリッドにかけて東西方向に伸び、両端は調査区外に及ぶ。北壁は下水管掘方の撹乱を受け残存していない。南北幅約 160cm、確認面からの深さ 20cm を測る。南壁際に幅 15cm を測る壁溝状の浅い落ち込みが存在する。その直上の覆土は灰褐色を基調とし、壁溝の北壁でほぼ垂直に立ち上がること（4 ～ 7 層）、壁溝内には 70 ～ 90cm 間隔で杭痕が認められることから、壁際に角材を設置し、杭で固定していたと推定される。壁溝内側の坑底は平坦に整形される。覆土は暗黄褐色土（1 ～ 2 層）と暗褐色土（3 層）に大別され、坑底直上の 3 層は玉砂利を極多量に含み、非常に締まっている。1 ～ 2 層はローム主体土で破砕礫、円礫が含まれる。この状況から本遺構は 3 層上面を使用面としていた可能性と、3 層が上部構造を支える版築層である 2 つの可能性が考えられる。前者の場合、南壁際の溝状落ち込みを胴木痕と推定すると、石組溝の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

SD78・SD85・SD130（Ⅲ－6図）

K2－A～B・2グリッドにかけて位置する遺構群で、西からSD85、SD78、SD130である。これらの東西は撹乱のため、全容は不明である。各々南北端が撹乱および遺構によって削平されており平面形は断定できないが、各遺構が同一形態と仮定した場合、南北約190cm、東西約50cmを測る長方形を呈すると推定される。確認面からの深さは約60cmを測る。個々の遺構は芯々で約180cm間隔で東西方向に並ぶ。坑底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土にはロームブロック、ローム粒が多量に含まれる。柱痕、礎石などは検出されなかったので断定できないが、類似遺構に法学部4号館地点での長方形土坑に礎石を伴う塀基礎列、第2中央診療棟地点1面で検出された長方形土坑列があり、本遺構も邸内の境界施設と推定される。SD85より17世紀代に比定される陶磁器類がわずかに出土している。

SU69（Ⅲ－7図）

3面に帰属しK2－B・1～2グリッドに位置する地下室である。設備管理棟地点で検出されたW33－1と同一遺構と考えられる。開口部は長方形を呈すると推定され、南北140cm、東西はW33－1西壁までの距離250cmを測る。確認面からの深さは315cmを測る。室部北側は推進工法によって構築された下水土管坑で削平され残存していない。南壁はほぼ垂直に立ち上がり、北東に向けて弧を描いている。W33－1で確認された南壁もやや弧を描き、西壁は直角に折れ、直線状に伸びる。本遺構同様北半は撹乱によって削平されており、北壁は残存していない。残存部の形状から坑底平面形は円弧を呈していたと推定される。天井部は全て崩落し、残存していないが、東壁において確認面下約200cmで東側に伸びる天井の痕跡が確認され、東側室内高は約110cmと考えられる。一方W33－1においては縦坑西側の室内高が180cmを測り、縦坑の東西で室内高が異なっていたことが確認された。覆土はほぼ水平堆積の様相を呈し、下層（15～20層）にはロームブロック、粘土ブロックが多量に含まれ、上層（5～14層）には玉砂利、砂が多量に含まれる。さらに最上層には焼土層が堆積しているが（1、2、4層）、間層に堆積した3層はほぼ純粋なローム土で上面には薄く炭化物層が形成されている。この様相から本遺構の最終埋没過程時に火災が発生し、その瓦礫を若干整理しローム土によって表面を整地した。その後起こった火災によってローム整地面表面に炭化物層が形成され、再び焼土層が堆積した、2度の火災による焼土層の形成が考えられる。遺物は東大編年Ⅱ～Ⅲa期に比定される陶磁器類が、コンテナ3箱出土しているが、被熱痕跡は認められず、火災以前の遺構埋め戻し過程において廃棄されたと考えられる。Ⅲ－26図7の染付皿は、胎土分析の結果、石川県の九谷古窯で生産されたと考えられる製品で、中央診療棟地点F33－3出土遺物との接合資料である。両遺構間は直線距離にして約80mを測るが、F33－3の共供出土遺物年代は東大編年Ⅴa期にあることから、2次廃棄と考えられる。

SU84（Ⅲ－8図）

3面に帰属し、K2－B2グリッドに位置する地下室である。重複するSD85、SK86より新しい。遺構南半は土管推進工法掘方の撹乱によって削平を受け、詳細な形態及び規模は不明である。残存部での開口部平面形は方形もしくは長方形を呈し、東西長約100cmを測る。壁面はやや撥状に広がり、坑底東西幅は110cm、確認面からの深さ150cmを測る。覆土は土管坑掘削時にほとんど削平され、詳細は不明である。遺物は出土していない。

SP28・SP29・SP82・SP96（Ⅲ－9 図）

K2－B・2 ～ 3 グリッドにかけて東西に伸びる柱穴列である。各遺構の平面形は長方形を呈し、1 辺は約 40 ～ 60cm を測る。SP29 は SU125 と重複し、それより古い。SP29、SP82 の坑底は南側が一段低くなっている。遺構間は芯々で約 160cm を測る。SP82 には柱痕が認められる。各々の柱穴は溝状遺構内に位置し、それを含めた一連の遺構と推定される。本柱穴列は南側の SD22 と平行していることから、K2－C ライン北側に 17 世紀代の藩邸内区画が存在したことが考えられる。

SB15（Ⅲ－10 図）

K2－B2 グリッドに位置する礎石列である。上部が撹乱による削平を受け、帰属面は不明である。不整形の掘方内に破砕礫、扁平川原石が敷き詰められており、礎石が外され根石が遺存した状態と考えられる。遺構間は芯々で 140cm を測る。遺構間の主軸は E－10°－S とやや南に傾き、周辺の遺構軸とやや異なる。性格は不明である。遺物は出土していない。

## （2）2 面の遺構

SB34（Ⅲ－11 図）

2 面に帰属し、調査区南東端 K2－B ～ C・3 グリッドに位置する布堀状の建築遺構基礎である。そのため、南北に伸びる部分と北端から東へ屈曲する部分の一部のみが逆 L 字状に確認された。南北溝部分は、重複する SU33 より新しい。溝幅は 70 ～ 80cm を測り、調査区内での南北長は 460cm を測る。確認面からの深さは約 50cm を測り、SU33 と重複する部分に関しては、上屋施設の荷重によってさらに 20cm 落ち込んでいる。覆土はローム土と小円礫を多量に含む暗褐色土が版築状に堆積し、その中には溝中央に直径 50 ～ 60cm 大の川原石がほぼ半間間隔で配置され、壁際には直径 20 ～ 30cm 大の川原石を巡らしている。いずれも垂直方向に積み重ねられ、中央部の川原石は最大 3 段確認されている。かなり強固な構造と捉えられ、土蔵建物の基礎と推定される。遺物は 18 世紀後半に比定される陶磁器類がコンテナ約 1/2 出土している。

SL8（Ⅲ－12 図）

2 面に帰属する遺構で、K2－B2 グリッドに位置する。平面形は直径約 60cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さは 20cm を測る。掘方内には直径約 45cm を測る施設が確認され、壁はほぼ垂直に立ち上がっていることから、桶枠が埋設されていた可能性が高い。覆土は、しまりのやや強い灰褐色土を呈していることから、便槽と考えられる。遺物はわずかに出土したにすぎない。

SU33（Ⅲ－13 図）

2 面に帰属する遺構で、K2－C3 グリッドに位置する。重複する SX25、SK35 より新しく、SB34 より古い。開口部の平面形は長方形を呈し、南北 225cm、東西 125cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁に天井崩落の痕跡が認められたことより、詰人空間タイプの地下室と考えられる。坑底平面形は長方形を呈し、南北 230cm、東西 115cm、確認面からの深さ 160cm を測る。覆土はレンズ状堆積を呈し、特に下層においてローム粒、ロームブロックが多く含まれる（6 ～ 10 層）。また 1 層はロームブロックを主体とするしまりの強い層序で、本遺構埋没後の整地層と推定される。遺物は 18 世紀中葉の陶磁器類がコンテナ 1 箱出土している。

SU54（Ⅲ－14 図）

2 面に帰属する遺構で、K2－C・2 ～ 3 グリッドに位置する。北西部を重複する SX53 に削平されている以外は、比較的良好な遺存状態である。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 120cm、南北 80cm、確認面からの深さ 170cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西角に昇降用の足掛け穴と考えられる小穴が上下 2 箇所検出されている。覆土には全体的にローム粒を含み、最上層の 3 層は、本地点基本層序 2 層（Ⅲ－1 図）に対比される。遺物は 19 世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。性格は不明。

SU109（Ⅲ－15 図）

2 面に帰属する遺構で、K2－A ～ B・3 グリッドに位置する。北東部で SK99 と重複し、それより新しい。また南東部は下水土管縦坑に、遺構下半南部は東西方向に伸びる下水管暗渠に、北部は北西から南東方向へ伸びる下水管暗渠によって撹乱され、遺存状況は極めて悪い。開口部形態及び規模は撹乱のため詳細は不明、坑底は長方形を呈し東西 250cm、南北 340cm、確認面からの深さ 280cm を測る。壁面は垂直に立ち上がり、坑底は平坦で、ともに比較的丁寧に整形されている。覆土は下水土管暗渠によって大きく崩落しており、観察することができなかった。遺物は東大編年Ⅵ期に比定される陶磁器類が、コンテナ 3 箱出土している。K2－C3 グリッドの SU33 とはほぼ南北線上に並び、南北方向の長屋建物に付随していたと推定される。

SX5（Ⅲ－16 図）

K2－B・C3 グリッド位置する不整形遺構で、南北長 190cm、確認面からの深さ 90cm を測る。確認面は 2 面で、焼土層にパックされている。断面形は椀状を呈し、坑底、壁面ともに工具痕が顕著に認められる。覆土はレンズ状堆積を呈し、ローム粒を多く含む。その形態から植栽痕の可能性が考えられる。19 世紀前半を下限とする陶磁器類が出土している（Ⅲ－23 図）。

## （3）1 面の遺構

SA2（Ⅲ－17 図）

1 面に帰属するピット列で、K2－A2 グリッドをほぼ東西に伸びる。各ピットは直径約 20cm、確認面からの深さ数 cm を測る不整円形を呈し、芯々で 90cm 間隔で並び、主軸方位は E－3°－S である。覆土には基本層序 2 層が堆積していることから、本遺構廃絶直後に 2 層が造成されたことが窺える。本遺構列は柵列と推定されるが、構造に関しては不明である。

SA3（Ⅲ－18 図）

1 面に帰属するピット列で、K2－A3 グリッドに位置する。SB1 の北側にあり、漆喰面を切って構築されている。東側のピットには柱痕が認められ、掘立柱構造の遺構であることが確認されるが、西側ピットの覆土は単層で、構造は不明。また両ピットは平面規模には類似性があるものの、各ピットの深度に共通性が認められないこと、主軸方位が周辺遺構と異なることから、供伴関係も断定できない。

SB4（Ⅲ－19 図）

1 面に帰属する礎石建築遺構で、漆喰片を含む灰褐色土を切って構築されている。K2－A ～ B･2 ～ 3

グリッドにかけて検出された。SB4－1 ～ 3 南側は下水埋設溝による撹乱を受け削平されている。各々の掘方は南北方向に長い長方形を呈し、芯々 180cm 間隔で配置されている。いずれの掘方も 1 mを越える深さを測り、坑底から根石を積み上げ、周囲を栗石で補強している。特に SB4－3 では、本遺構下に存在する SU109 の影響によって、SU109 坑底までトレンチ状に掘り下げ、ロウソク地業を行っている。ほかにも SK100、SD1 に掛かる箇所など、いずれもローム層まで掘り下げることを基準としている。本調査区北側の既存調査区である中央診療棟地点外構 U・V ＝ 31・32 区では、本遺構に供伴すると考えられる礎石列が検出されている。さらに第 2 中央診療棟地点においても SB4－1 ～ 3 南端より北方約 16m でロウソク地業の基礎遺構が検出されており、一連の遺構とすると、かなり大規模な建造物が想定される。

明治期の大学建物配置図には、本遺構に該当する建物は認められず、また文化年間とされる唯一の大聖寺藩邸絵図にも本遺構に該当する建物は認められないことから、幕末期の大聖寺藩邸に帰属する遺構の可能性が高い。遺物は 18 世紀後半から 19 世紀前半に比定される陶磁器類がコンテナ 1 箱出土しているが、本遺構が多くの他遺構覆土を掘削して構築されていることから、2 次廃棄遺物も多く含まれていることが予想される。

SD1（Ⅲ－20 図）

1 面に帰属する溝状遺構で漆喰片を含む灰褐色土面で検出された。K2－A・2 ～ 4 グリッドにかけて東西に伸び、東西両端は調査区域外へ至る。主軸方位は E－5° －S を測る。溝幅は 30 ～ 50cm を測り、全体的に粗製な作りである。坑底にはピット状の落ち込みが 5 箇所認められるが、SB4 に帰属する可能性がある。藩邸内の区画施設と考えられるが、関連遺構は不明である。遺物は 18 世紀後半から 19 世紀前半に比定される陶磁器類がコンテナ 1 箱出土している。

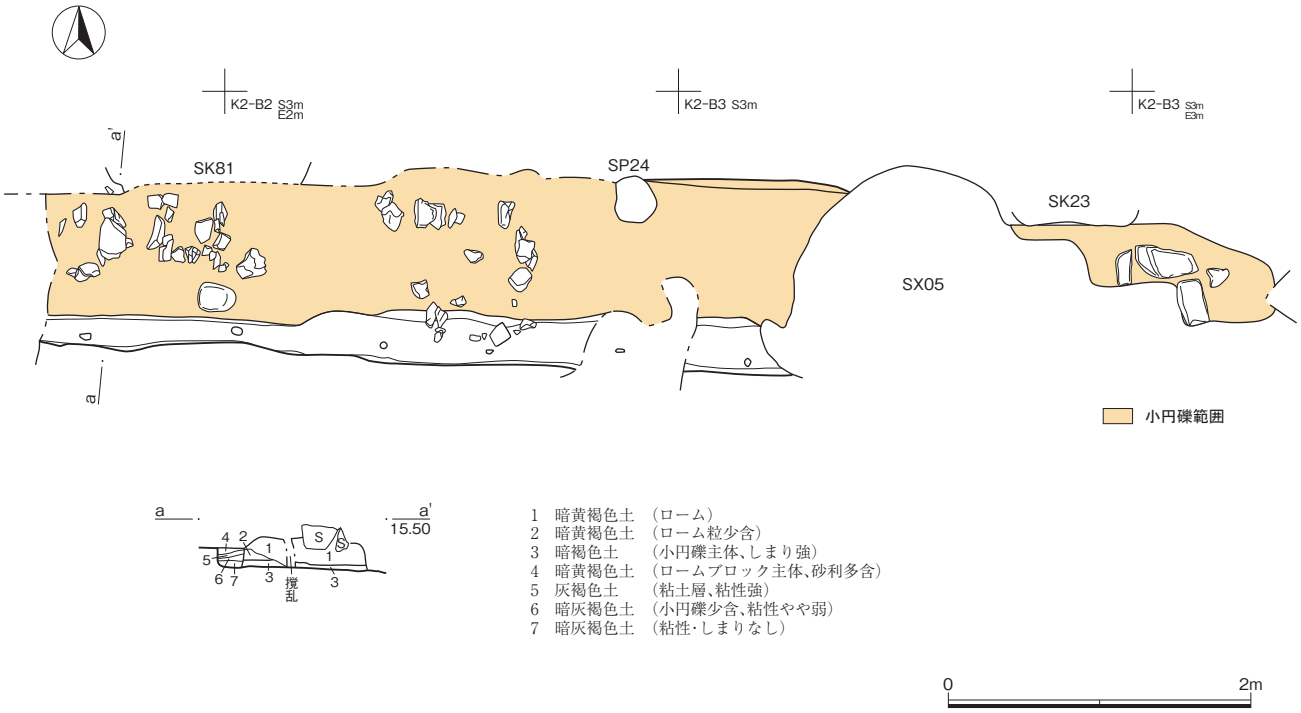
SX50（Ⅲ－21 図）

1 面に帰属する埋甕遺構で、K2－A ～ B・2 グリッドに位置する。数 cm 大の小円礫分布域内で検出された。掘方は、直径約 50cm、確認面からの深さ約 40cm を測る不整円形を呈し、掘方内には甕が逆位で埋設され、底部は甕内に欠落した状態で検出された。埋甕は口径 33cm、器高 37cm を測る常滑産の甕で、体上半には 1 単位横ハの字状の連続ヘラ描き文が巡っている。甕を埋設する際に掘方坑底に小円礫を多量に含む暗褐色土が埋められている（3 層）。また甕内は空洞になっているが、3 層上には厚さ数 cm を測る泥炭が堆積し、その中央部は半球状に凹んでいる。坑底上に崩落していた甕底部片には中央部に直径 15mm を測る焼成前穿孔が存在しており、2 層表面に認められた半球状の凹みは、穿孔部からの水滴によって浸食された凹みと考えられる。甕を埋めた表層には小円礫を配置し、甕のほぼ上部には甕を隠すように破砕礫が置かれていた。以上の様相より、本遺構は水琴窟と考えられ、地表面を玉砂利によって装飾した庭に伴う施設であろう。また本遺構の北東 1 m周辺に地表面上に漆喰を貼った遺構が存在する。激しく撹乱を受けているため、構造、形態などは不明であるが、このような漆喰層を貼った遺構は 1 区の泉水に認められることから、水琴窟に伴う水場遺構の可能性も考えられる。本遺構の東方約 6 mにも同様の遺構が存在し、周辺域が一定期間露地庭として機能していたと推定される。

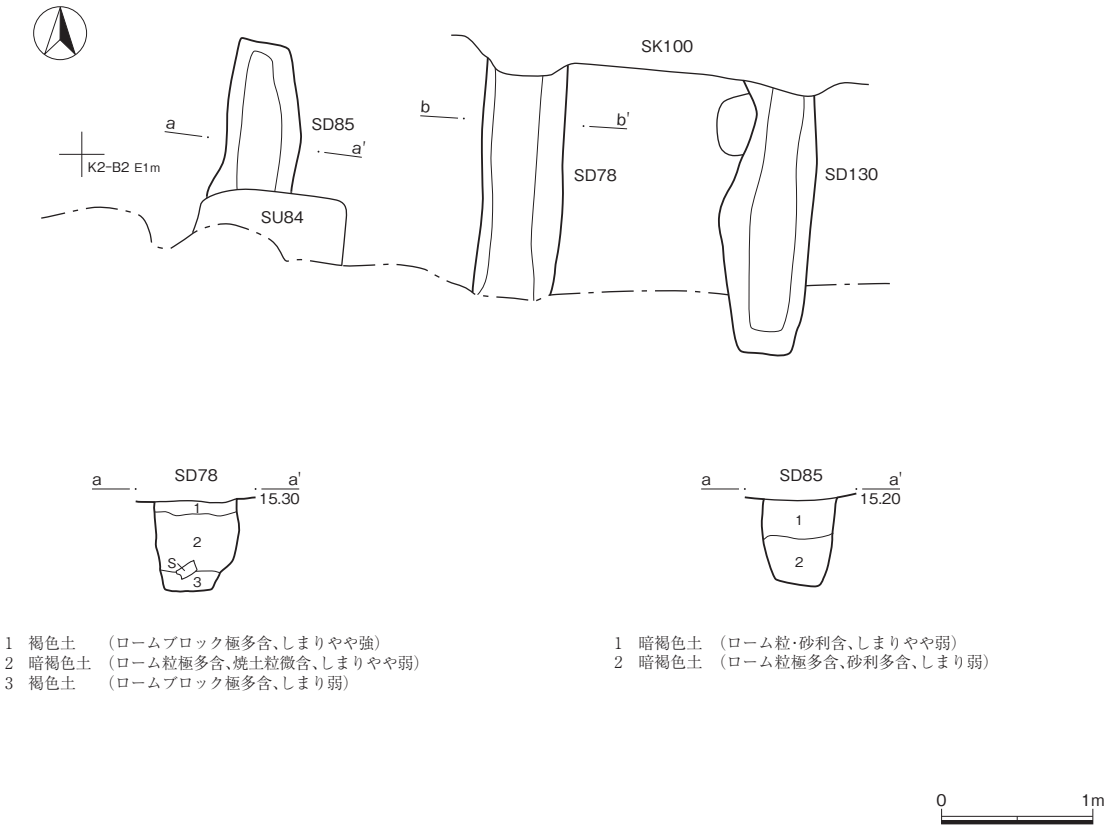
SX52（Ⅲ－22 図）

1 面に帰属する埋甕遺構で、K2－A ～ B・3 グリッドに位置する。掘方平面形は 1 辺 50cm を測る

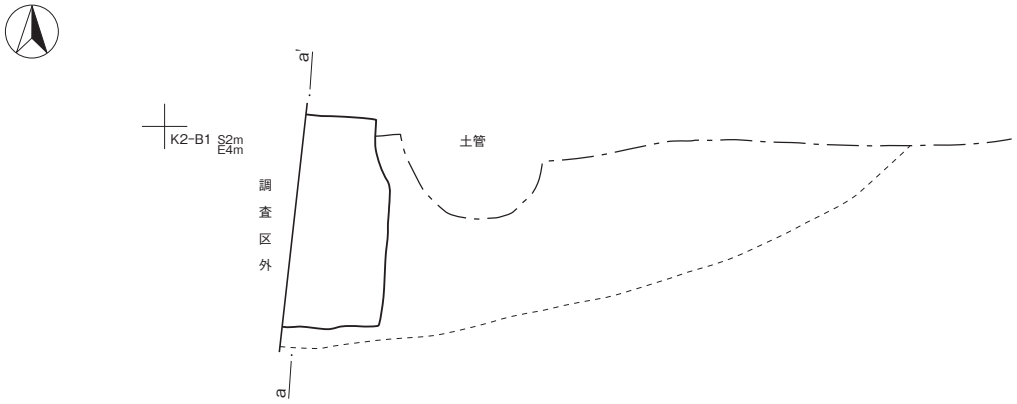
隅丸方形を呈し、確認面からの深さは 42cm を測る。埋甕埋設位置内には坑底直上に小円礫を多量に含む暗褐色土が敷き詰められている（4 層）。埋甕は完形状態で検出され、口径 35cm、器高 40.5cm を測る常滑産の甕が使用されていた。底部中央には直径 20mm を測る焼成前穿孔が認められ、専用器であることを窺わせている。また底部周縁部には焼成後の二次加工による直径 15mm の穿孔が認められる。埋甕内は基本的に空洞で、4 層上には泥炭が堆積し、その中央は甕穿孔部からの水滴浸食による数 cm を測る凹みが認められる。しかし、底部周縁穿孔部からの水滴による浸食は明確には認められなかった。地表面における付随施設は認められなかったが、本遺構の西側と SB1 を挟んだ北側には漆喰層の拡がりが確認されている。特に西側の漆喰層から本遺構上部に掛かるように切石が 2 点配置されており、SX50 で述べたように、水琴窟を伴う水場遺構と考えられる。

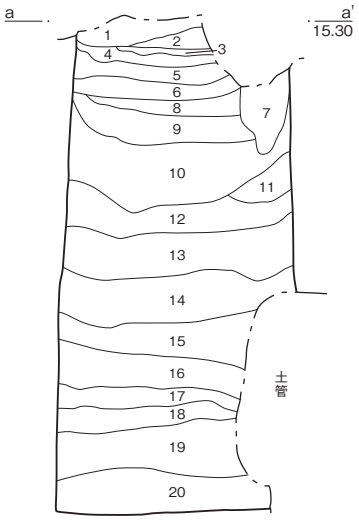



Ⅲ-5図　SD22




Ⅲ-6図　SD78、SD85、SD130

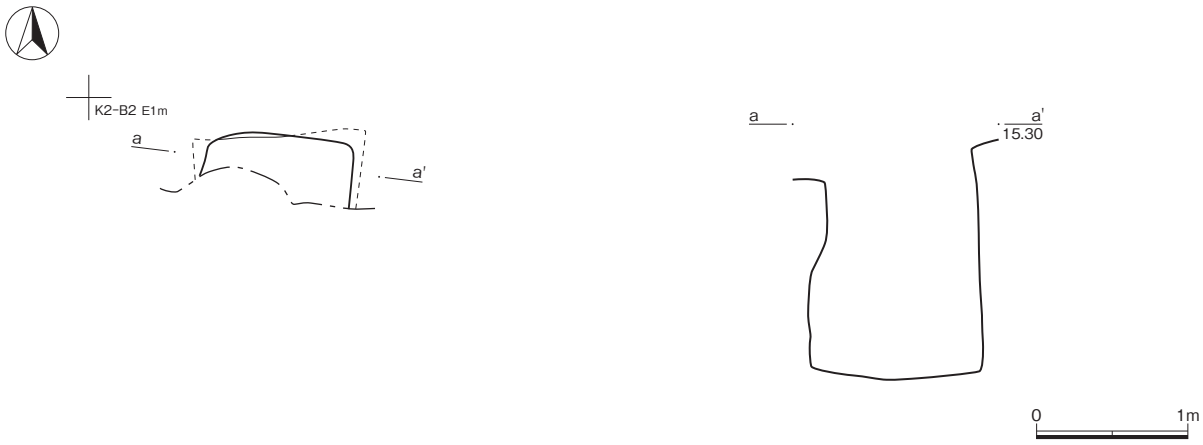


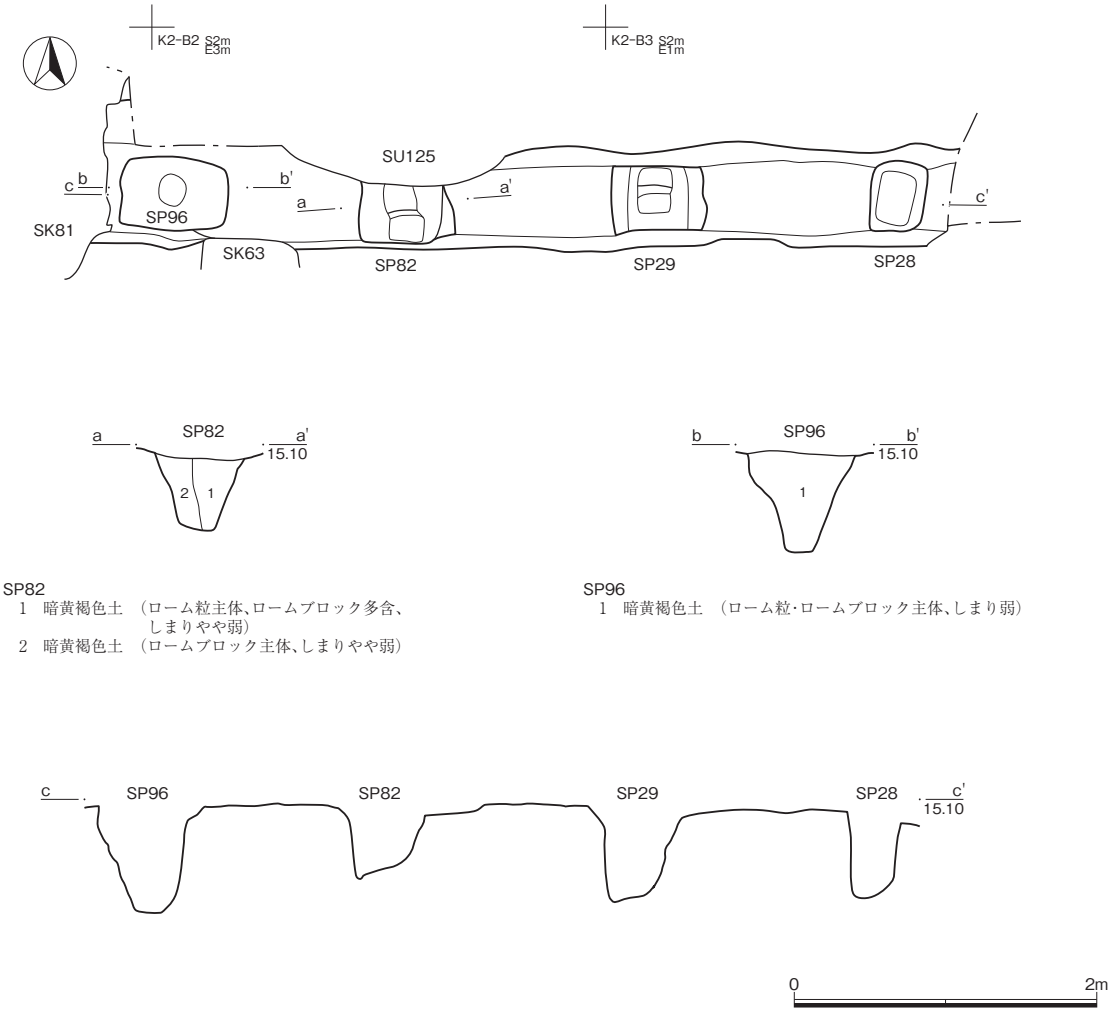

1 暗赤褐色土 （焼土ブロック多含、しまり強）
2 橙褐色土 （焼土ブロック主体、粘性・しまり弱）
3 暗黄褐色土 （ローム埋土、上部に炭化物層、粘性やや強、しまり極強）
4 暗赤褐色土 （焼土粒極多含、炭化物粒多含、粘性弱、しまり強）
5 暗褐色土 （小円礫極多含、しまりやや強）
6 褐色土 （小円礫極多含、粘性弱、しまり極強）
7 褐色土 （ローム粒・焼土粒・砂利含、粘性やや強）
8 褐色土 （ローム粒・小円礫極多含、粘性やや強、しまり極強）
9 暗褐色土 （ロームブロック極多含、粘性・しまり強）
10 暗褐色土 （灰色を帯びる、砂極多含、砂利多含、粘性やや強、しまりやや弱）
11 暗黄褐色土 （ローム粒極多含、粘性・しまりやや強）
12 褐色土 （ローム粒・小円礫極多含、粘性強、しまり極多含）
13 暗褐色土 （小円礫極多含、ローム粒・炭化物多含、焼土粒少含、しまりやや強）
14 暗褐色土 （ローム粒多含、小円礫含、粘性やや強、しまり強）
15 暗黄褐色土 （ローム粒・ロームブロック主体、粘性強、しまり極強）
16 黒褐色土 （ローム粒・ロームブロック極多含、粘性強、しまり極強）
17 褐色土 （白色粘土ブロック極多含、粘性強、しまり極強）
18 暗褐色土 （ローム粒・炭化物粒多含、粘性強、しまり極強）
19 褐色土 （ロームブロック・白色砂質粘土ブロック極多含、粘性・しまり強）
20 暗黄褐色土 （ロームブロック極多含、黄白色砂質粘土ブロック多含、粘性・しまり極強）

0 1m

Ⅲ-7図　SU69



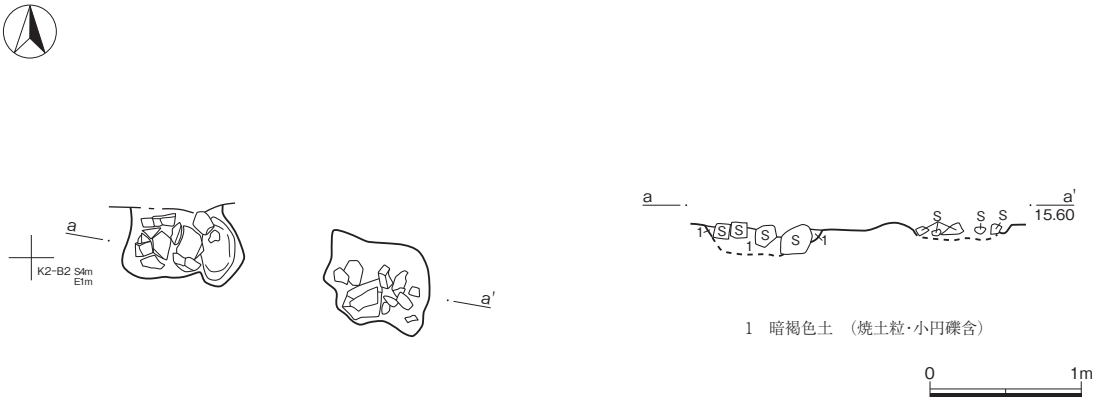

Ⅲ-8図　SU84



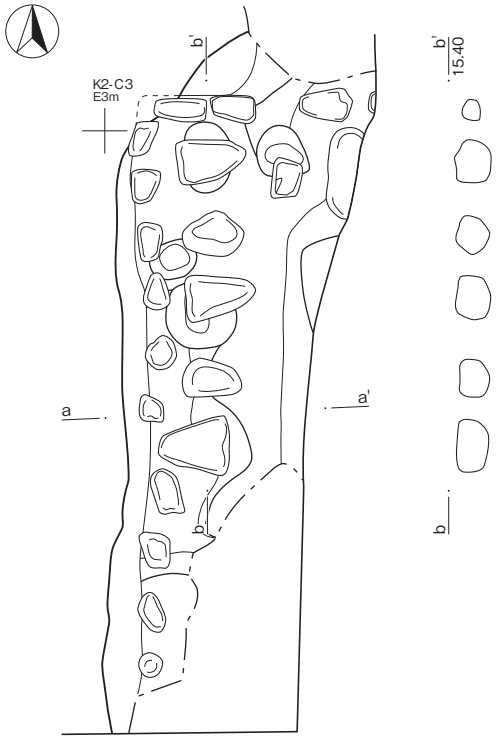

SP82
1　暗黄褐色土　（ローム粒主体、ロームブロック多含、しまりやや弱）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりやや弱）

SP96
1　暗黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック主体、しまり弱）

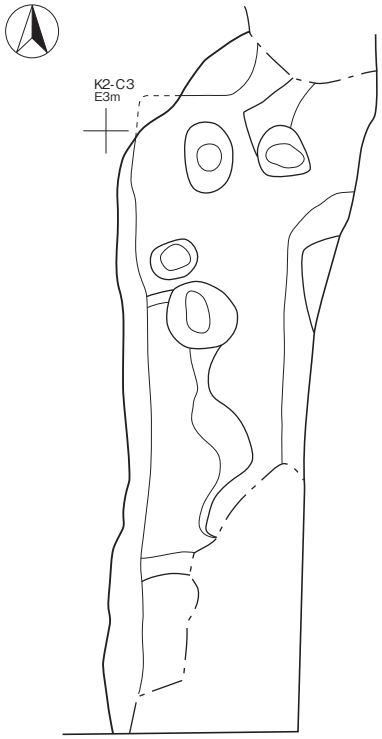
Ⅲ-9図　SP28、SP29、SP82、SP96



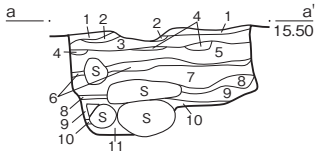

Ⅲ-10図　SB15




石検出



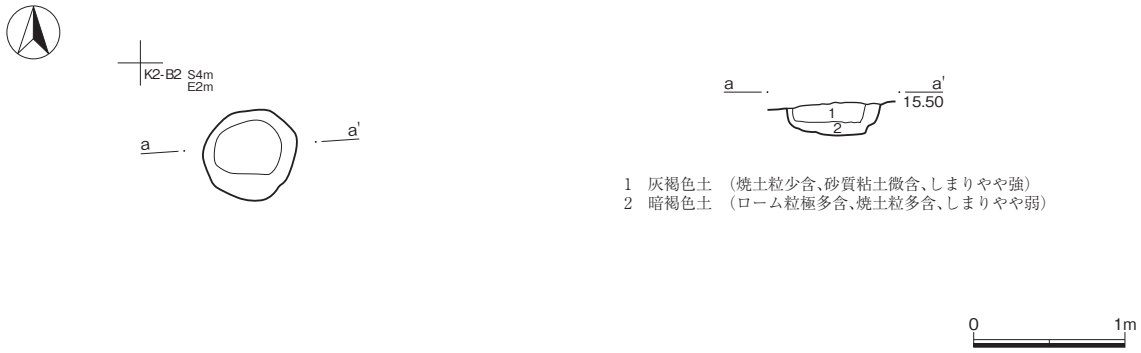

堀方




1　暗黄褐色土　（ロームブロック極多含）
2　暗褐色土　　（小円礫主体、粘性・しまり弱）
3　暗黄褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、しまり強）
4　暗褐色土　　（小円礫主体、粘性・しまり弱）
5　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含、しまり強）
6　暗褐色土　　（小円礫主体、粘性・しまり弱）
7　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含）
8　暗褐色土　　（小円礫主体、粘性・しまり弱）
9　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含）
10　暗褐色土　　（小円礫主体）
11　暗黄褐色土　（ロームブロック主体）

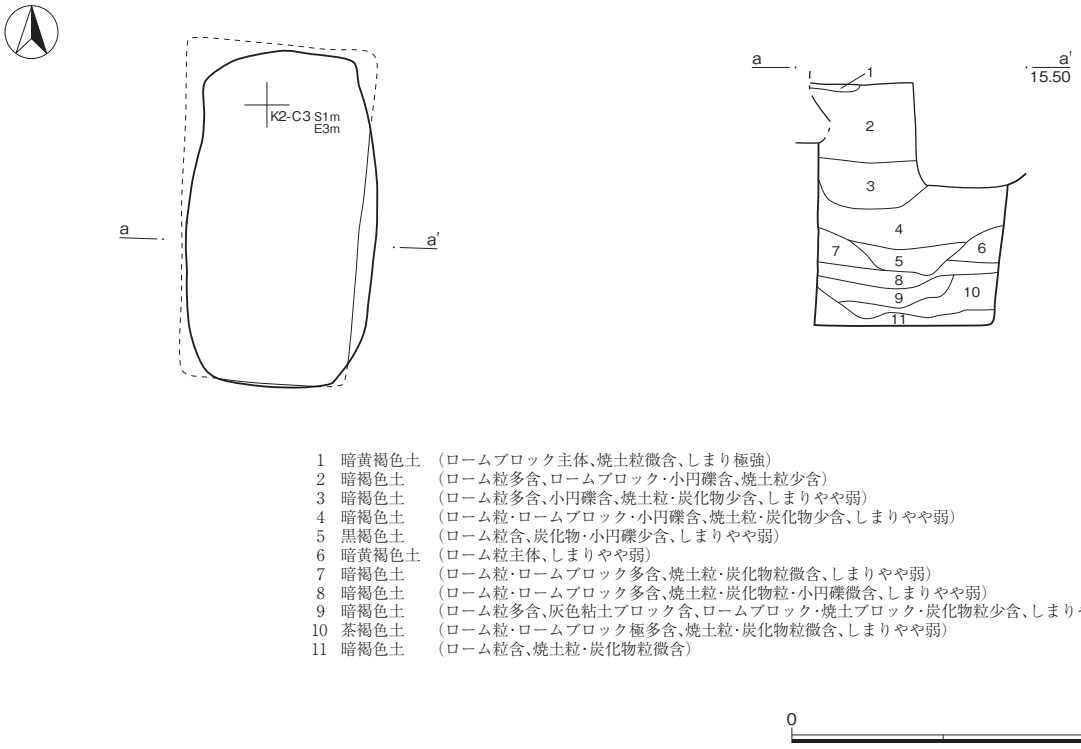
0　1m

Ⅲ-11図　SB34



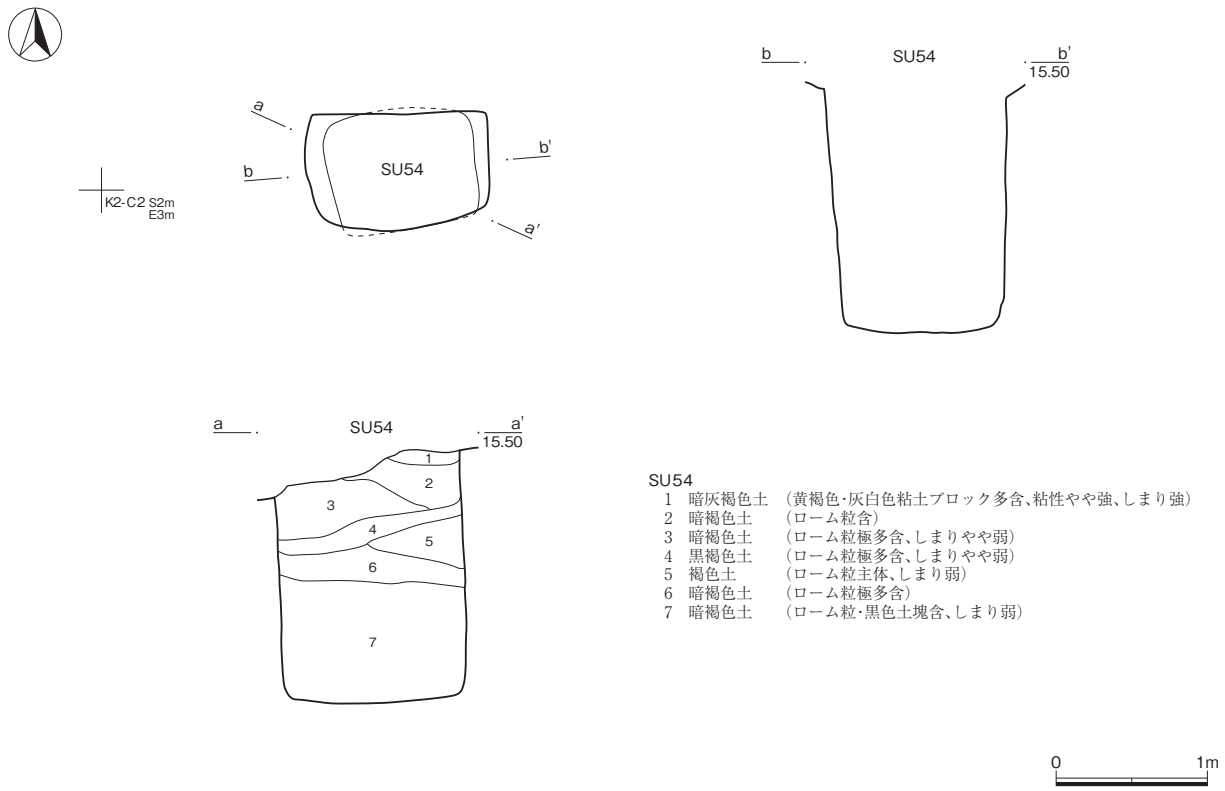

1　灰褐色土　（焼土粒少含、砂質粘土微含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒極多含、焼土粒多含、しまりやや弱）

Ⅲ-12図　SL8

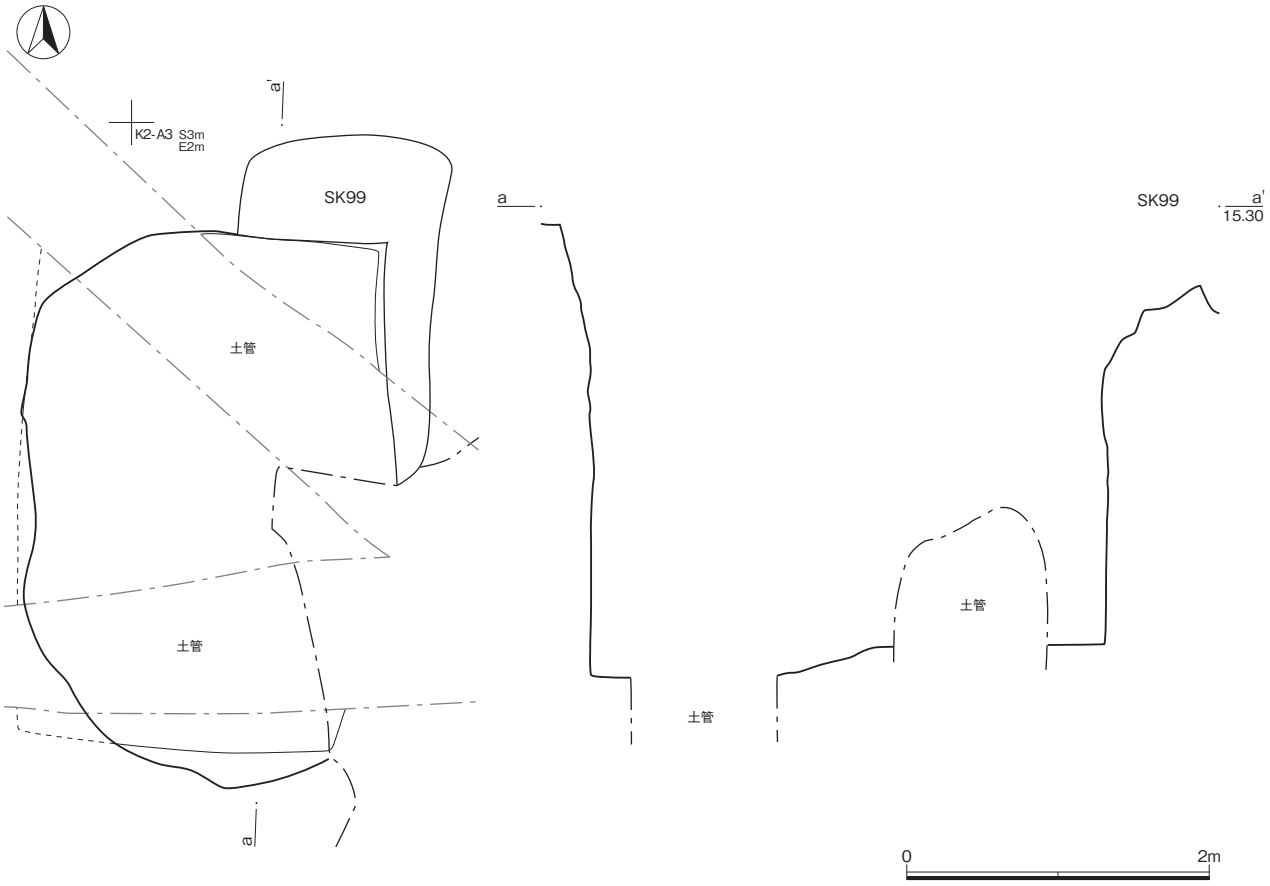



1　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、焼土粒微含、しまり極強）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック・小円礫含、焼土粒少含）
3　暗褐色土　（ローム粒多含、小円礫含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック・小円礫含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
5　黒褐色土　（ローム粒含、炭化物・小円礫少含、しまりやや弱）
6　暗黄褐色土　（ローム粒主体、しまりやや弱）
7　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒・炭化物粒微含、しまりやや弱）
8　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒・炭化物粒・小円礫微含、しまりやや弱）
9　暗褐色土　（ローム粒多含、灰色粘土ブロック含、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物粒少含、しまりやや弱）
10　茶褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含、焼土粒・炭化物粒微含、しまりやや弱）
11　暗褐色土　（ローム粒含、焼土粒・炭化物粒微含）

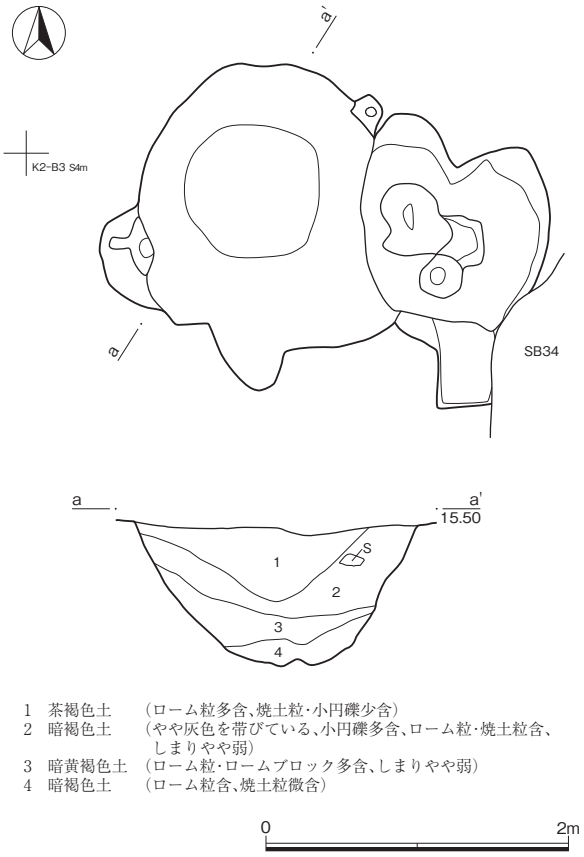
Ⅲ-13図　SU33




Ⅲ-14図　SU54



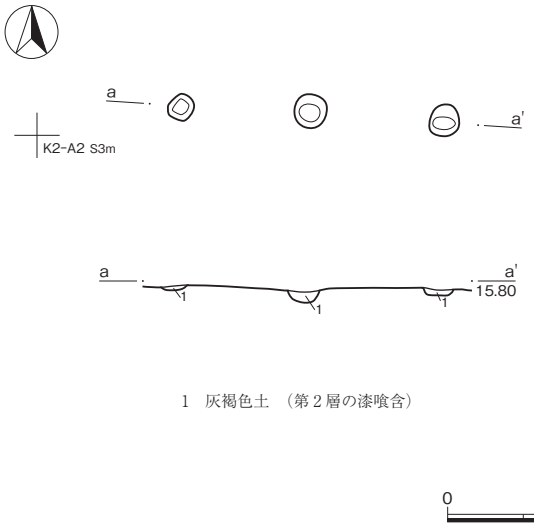

Ⅲ-15図　SU109




1　茶褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・小円礫少含）
2　暗褐色土　（やや灰色を帯びている、小円礫多含、ローム粒・焼土粒含、しまりやや弱）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒含、焼土粒微含）

0　2m

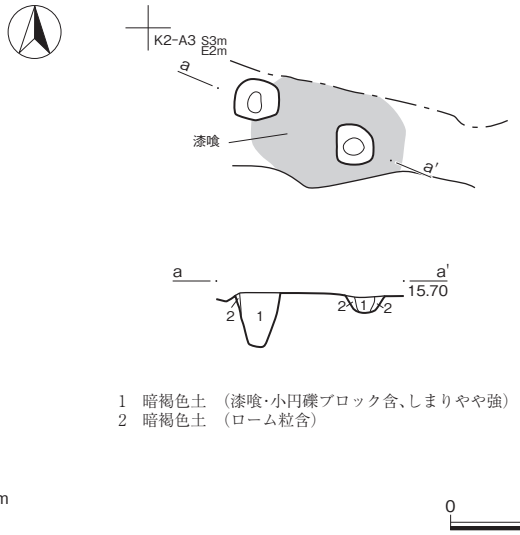
Ⅲ-16図　SX5




1　灰褐色土　（第２層の漆喰含）

0　1m

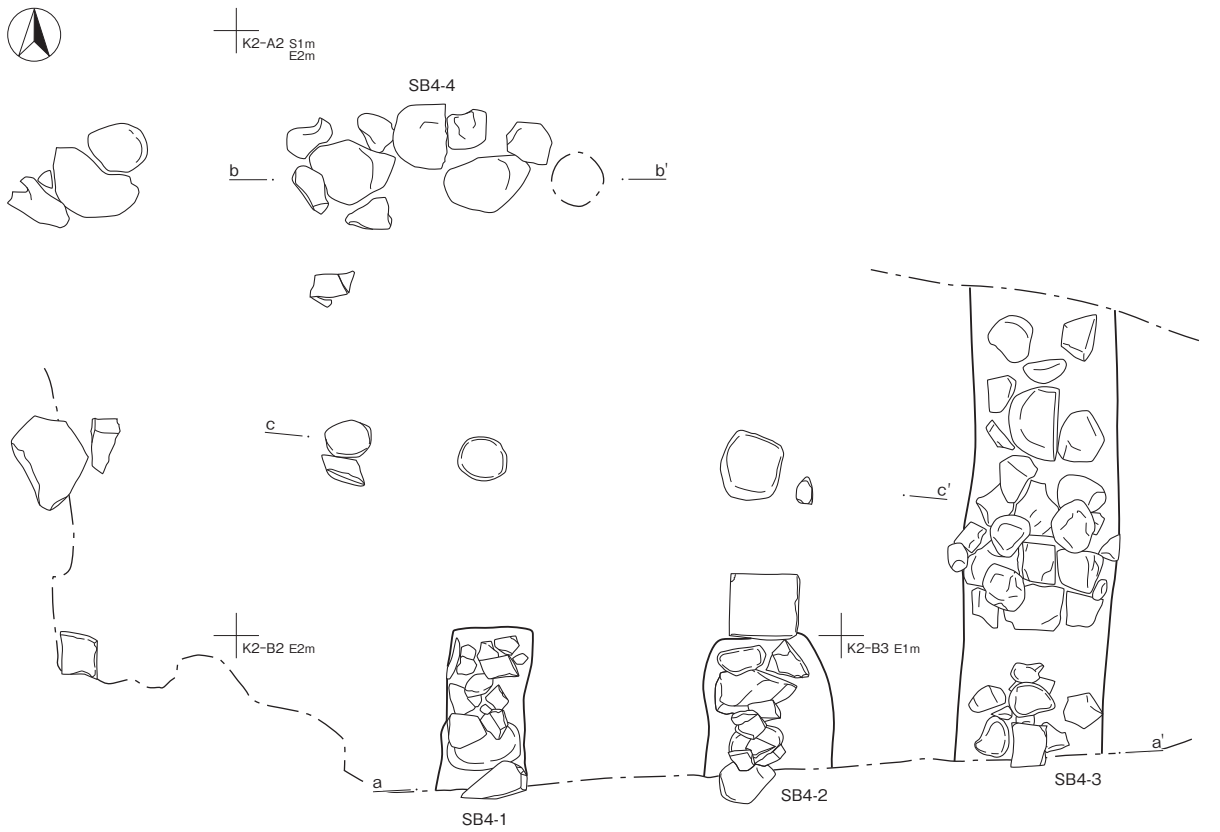
Ⅲ-17図　SA2

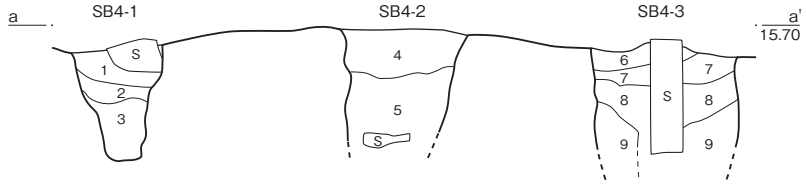



1　暗褐色土　（漆喰・小円礫ブロック含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒含）

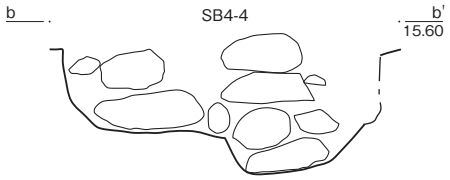
0　1m

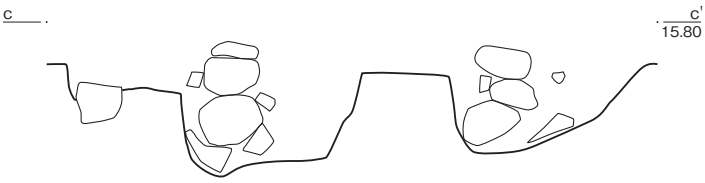
Ⅲ-18図　SA3




1　褐色土　（ローム粒含、しまりやや強）
2　褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物粒微含、しまり極強）
3　褐色土　（3層より明るい、ローム粒・ロームブロック極多含、しまりやや強）
4　褐色土　（ローム粒極多含、小円礫少含、焼土粒微含）
5　褐色土　（ローム粒極多含、やや砂質、しまりやや強）
6　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、しまり極強）
7　褐色土　（ローム粒・焼土粒少含、しまり極強）
8　暗黄褐色土　（ローム粒主体、ロームブロック多含、しまり極強）
9　暗褐色土　（ローム粒・小円礫多含、しまりやや弱）

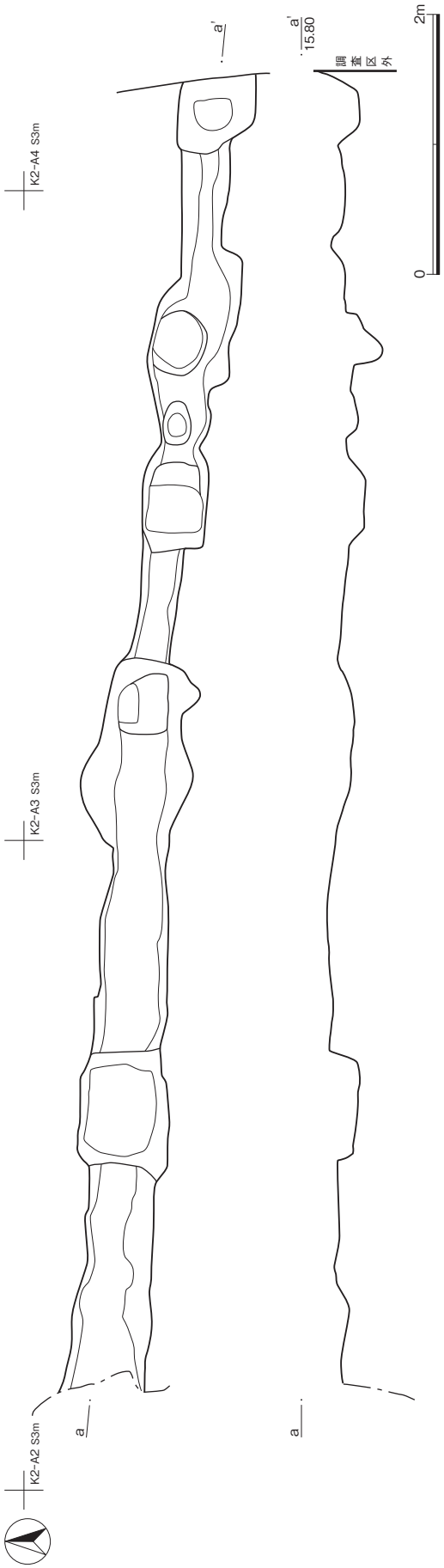


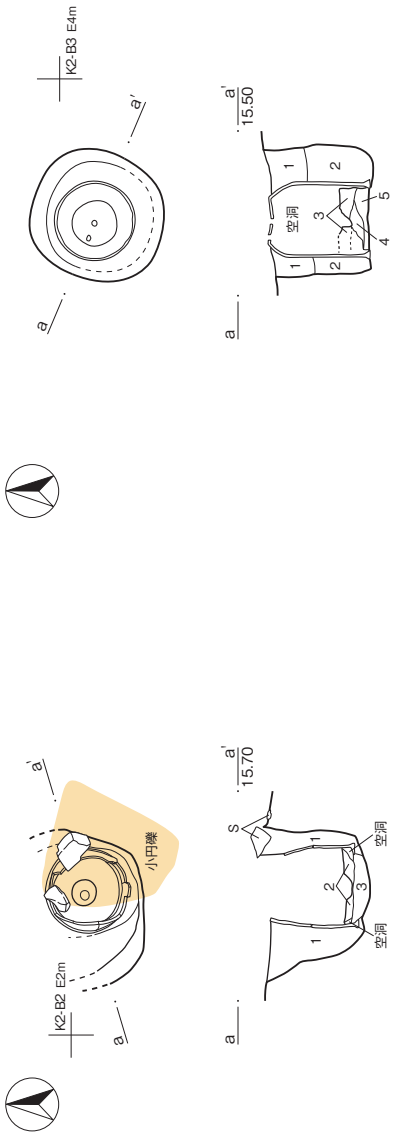




Ⅲ-19図　SB4




Ⅲ-20図　SD1




1 暗褐色土（ローム粒少含、小円礫微含、しまりやや弱）
2 暗褐色土（粘性やや強）
3 暗褐色土（小円礫多含、ローム粒少含、しまりやや弱）

Ⅲ-21図　SX50

1 暗褐色土（ローム粒少含、小円礫微含、しまりやや弱）
2 暗褐色土（ロームブロック少含、しまりやや弱）
3 暗褐色土（やや灰色を帯びている、粘性やや強）
4 暗褐色土（小円礫多含、ローム粒少含、粘性やや強）
5 暗褐色土（ローム粒含、しまりやや強）

Ⅲ-22図　SX52

## 第３節　遺物

本地点出土遺物は、調査地点の位置関係から、全て大聖寺藩邸に関する資料と考えられる。

本文中に示した、磁器・陶器・土器の分類基準は、本報告書第３分冊を、人形・玩具類の分類基準は、「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（東京大学埋蔵文化財調査室 2012）を参照されたい。

### 磁器・陶器・土器（Ⅲ－23 ～ 28 図）

SB4（Ⅲ－23 図）

１は小丸碗の体部片で、JB-1-j に分類される。体部には幾何学文が描かれてる。２は灰釉二合半徳利の口縁部片で、TC-10 に分類される。口縁部は、上端が鍔状に突出する縁帯を形成する。口唇部に熔着痕が認められる。３は施釉土師質油受け皿で、DZ-40-b に分類される。胎土は橙褐色を呈し、軟質である。受け部は口唇部よりも低く、先端部の釉が剥落している。４は施釉土師質皿で、DZ-2-h に分類される。胎土断面は黒褐色を呈し、やや軟質である。器面は風化のためか釉の剥落が著しい。灯心痕が認められる。

SX5（Ⅲ－23 図）

１は丸碗で、JB-1-v に分類される。 胎土は灰白色を呈し、釉はやや白濁している。外面には簡略化された雪輪梅樹文が描かれ、高台内には銘が書かれている。見込みには不特定方向の直線状擦痕が多数認められる。２は蓋物の蓋である。表面中央には撥形の橋状摘みを有する。３は灰釉丸碗で、TC-1-c に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。底部を除き、やや緑味を帯びた灰釉が施されている。見込みには環状擦痕が認められる。４は半筒碗で、TD-1-i に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台は畳付幅 8mm を測る蛇ノ目状を呈し、畳付外側は面取りされている。高台脇には意匠として意図的に付けられたカンナ痕が巡る。体部はハの字状に開き、中位で屈曲、直立して口縁部に至る。屈曲部は一段膨らみを有する。見込みには目痕が認められるが、底部が一部欠損しているため、総数は不明である。やや緑味を帯び、細かい貫入が入った透明釉が底部を除き施されている。体部には白泥と鉄絵によって文様が描かれているが、欠損箇所が多く意匠は不明である。５は平碗で、TD-1-h に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台は逆台形を呈し、高台内中央に円圏ケズリを有する。底部を除き、細かい貫入が入った透明釉が掛けられている。６～９は灰釉つけ掛けによる二合半徳利で、TC-10-c に分類される。６の胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。口縁部は上端が鍔状に突出する縁帯を形成する。体部には列点状の釘書きで「川村」と書かれている。７、８の胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。口縁部は上端が鍔状に突出する縁帯を形成する。体部には列点状の釘書きで「久〇」と書かれている。７の底部には直径 3.5cm を測る環状熔着痕が認められる。９の胎土は黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。口縁部は縁帯を形成している。体部には列点状の釘書きによって〇と長方形が書かれている。10 は壺・甕の蓋である。胎土は灰白色を呈し、硬質である。表面中央には粘土紐の貼り付けによる橋状摘みが付けられている。釉は表面に灰釉が掛けられている。11 は灰釉植木鉢で、TC-21 に分類される。胎土は黄白色を呈し、硬質である。高台には水はけのためのアーチ状を呈する切り欠きが認められる。残存部での状況から全体で３箇所設けられていたと考えられる。体部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部は鍔状に屈曲する。釉は口縁部内側から高台際にかけて掛けられている。12 は軟質瓦質植木

鉢で、DZ-21 に分類される。胎土表面は黒褐色、断面は暗褐色を呈し、暗赤褐色粒子を含む。底部中央には直径 2cm を測る水抜き穴が穿たれ、円錐形の脚が 3 箇所貼り付けられている。体部は丸味を帯びながらほぼ垂直に立ち上がり、欠損部からやや外反して開くようであるが、上部形状は不明である。

SU33（Ⅲ－24 図）

1 は小丸碗で、JB-1-j に分類される。釉は焼成不良のため、やや白濁し、全面に細かい貫入が入る。文様は外面に笹と鳥（鳳凰？）が、見込みに鷺が描かれている。2 は 4 寸皿で、JB-2-e に分類される。焼成不良のため、釉は白濁し、外側面、底部には釉飛びが認められる。呉須は黒く発色している。見込み中央にコンニャク印判による五弁花文が描かれ、内側面は二重線によって 4 単位に区画され、花、蔓を描いている。外側面には圏線唐草文が描かれている。3 は灰釉丸碗で、TC-1-c に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。釉は全面に施釉した後、底部部分を拭き取っている。見込みにはドーナツ状に拡がる擦痕が多量に認められる。4 は銹絵染付筒形碗で、TD-1-j に分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色を呈し、硬質かつ緻密である。高台は内側が外傾し、断面形は逆台形を呈する。畳付外側が面取りされている。底部中央には円圏ケズリが認められる。体部には呉須と鉄絵によって松が描かれている。5 は青緑釉輪剥皿で、TB-2-a に分類される。胎土は淡褐色を呈し、硬質かつ緻密である。見込みには青緑釉、外側面には透明釉が掛けられている。6 は丸碗形の灰釉小坏で、TC-6 に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。釉は底部を除き、やや緑味を帯びた灰釉が掛けられている。体部には染付文様が認められる。7 は灰釉壺で、TZ-15 に分類される。胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含み、硬質かつ緻密である。底は平底であるが、中心に向かってわずかにアーチを描いている。体部は扁平球状を呈し、頸部は強く屈曲し、口縁部に向かってハの字状に開く。釉はやや深緑味を帯びた灰釉が掛けられている。唾壺の可能性がある。8 はいわゆる由右衛門徳利で、TF-10 に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色微粒子を少量含み、硬質かつ緻密である。体部は砲弾状を呈し、中央に 1 箇所凹みが付けられている。口縁部は玉縁を形成する。釉は口縁部から頸部に掛けて鉄釉が、体部には鉄泥が掛けられている。底部には墨書が書かれている。9 は五合徳利で、TC-10-d に分類される。底部を欠損する。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。体下半部と肩部に数条の沈線が巡る。口縁部は折り返され算盤玉形を呈す。体部上半に沈線状の釘書きが認められるが、欠損のため内容は不明である。10 は甕で、TD-15 に分類される。胎土は黄白色を呈し、緻密である。高台は内側が外傾し、断面形は逆台形を呈する。畳付外側は面取りされている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、中位で 2 条の凹みが巡る。口縁部は内湾する。口縁部から高台脇にかけて透明釉が掛けられている。釉下に白泥と鉄絵によって文様が描かれている。底部には墨書が認められる。11 は油受け皿で、TF-40 に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質である。円柱形の油皿受けには半月状のスリットが 2 箇所穿たれている。鉄泥が掛けられている。12 は鬢水入れで、TC-25 に分類される。胎土は灰白色を呈し、硬質である。体部には型紙摺りによる鉄絵文様が描かれている。13 は土瓶で、TD-34-a に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。体部は扁平球状を呈し、注口は S 字状を呈す。欠損のため詳細は不明であるが、茶漉し穴は 6 箇所以上穿たれている。体部上半には鉄絵によって松が描かれている。底部露胎部にはススの付着が認められる。14 は土瓶の蓋である。表面中央には扁平球状の摘みが貼り付けられている。13 の蓋と考えられる。15 は上製かわらけで、DZ-2-d に分類される。胎土は橙褐色を呈す。全体的に丁寧に磨かれている。

SB34（Ⅲ－25 図）

1 は染付丸碗で、JB-1-v に分類される。外面には簡略化された雪輪梅樹文が、高台内には著しく崩れた「大明年製」銘が書かれている。2 は色絵半球碗で、TD-1-b に分類される。胎土はやや灰色を帯びた黄白色で、硬質かつ緻密である。体部には赤、緑？絵の具で笹文が描かれている。3 は五合徳利で、TC-10-d に分類される。胴下半部を欠損する。胎土は黄白色を呈し、硬質である。肩部には数条の沈線が巡る。外面には褐釉が掛けられているが、焼成不良のため、斑状の白濁が全面に入る。幅約 1cm を測る幅広沈線状の釘書きが認められ、残存部では「久」と読むことができる。4 は施釉土師質皿で、DZ-2-h に分類される。胎土は橙褐色を呈す。左回転のロクロ水引き成形によって成形されている。透明釉が全面に掛けられている。

SX50（Ⅲ－25 図）

1 は甕で、TG-15 に分類される。遺構内に逆位の状態で埋設されていた。胎土は橙褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質である。底部は中心部に向かい緩い上げ底に成形されている。中央には直径約 15mm の孔が穿たれ、水琴窟専用器として生産されたことが窺える。口縁部は内側に突出した T 字形を呈し、内端に 2 箇所熔着痕が認められる。熔着痕は胴下半にも 2 箇所認められ、重ね焼きによる窯詰めが行われていたことが判る。体上部には箍をイメージしたような棒状工具によるハの字状の沈線文が巡っている。底部を除き、鉄泥が掛けられている。内底部穿孔部周囲には二次加工による剥離痕が認められる。

SX52（Ⅲ－25 図）

1 は甕で、TG-15 に分類される。遺構内に逆位の状態で埋設されていた。胎土は橙褐色を呈し、白色粒子を含み、硬質である。口縁部は T 字状を呈す。体上部には箍をイメージしたような棒状工具によるハの字状の沈線文が巡っている。底部は中心部に向かい緩い上げ底に成形されている。中央には直径 20mm を測る焼成前穿孔と、その脇に直径 15mm を測る二次穿孔が認められる。内底部穿孔周囲にはともに敲打による二次加工が施され、底部側から内底部にむけてハの字状に面取りされた状態を呈している。この二次加工は SX50 出土資料にも認められ、水琴窟として水滴の滴り状態との関係が推定される。

SU69（Ⅲ－25 ～ 27 図）

1、2 は高台無釉丸碗で、JB-1-b に分類される。1 の高台断面は U 字形を呈す。外面には山水文、見込みには二重圏線内に文様が描かれている。2 の高台断面は逆台形を呈する。外面には一重網目文が描かれている。3、4 は青花小坏で、JA1-6 に分類される。3 の高台は蛇ノ目状を呈し、畳付外側は面取りされている。底部無釉である。体部には呉須による染付と赤絵の具による上絵付けが認められるが、小片のため意匠は不明である。4 は端反形の小坏で、全体的に器壁は薄い。口唇部の釉はいわゆる虫喰いによって全て剥落している。高台内には二重圏線内に銘が書かれているが、小片のため詳細は不明である。5 は端反形の小坏で、JB-6-b に分類される。器面は灰白色を呈し、釉垂れが認められる。呉須もくすんだ発色をしている。6 は青花五寸皿で、JA1-2 に分類される。畳付外側はシャープに面取りされている。高台内には放射状のカンナ目が認められる。口唇部には口銹が施されている。見込みには算木文、内側面には鳳凰、雲が 3 単位に割り付けられ描かれている。7 は染付皿で、JN-2 に分類される。胎土は灰白色を呈し、ややボソッとした感がある。釉には細かい貫入が入り、ややヌメッ

とした感があり、釉飛びも認められる。高台断面は三角形を呈し、細い。畳付には砂が熔着し、熔着による剥離痕が認められる。見込みには花文が描かれているが、呉須の発色ははくすんだ藍色を呈す。本資料は、胎土分析によって九谷古窯の製品と認められた医学部附属病院中央診療棟地点 F33-3 出土資料（Ⅳ－039 図 23）と遺構間接合する。F33-3 は東大編年Ⅴａ期の基準資料であることから、本遺構出土資料が、本来の一次廃棄による資料と考えられる。8 は色絵五寸皿の小片で、JB-2-c に分類される。高台断面は三角形を呈し、やや内傾する。全体的に器壁は薄い。底部にはハリ支え痕が認められる。見込み文様は黒絵の具による骨書きの上を黄絵の具などで塗り埋めている。外側面には赤絵の具によって折れ松葉が描かれている。高台内には黒絵の具によって二重角枠内に「角福」銘が書かれている。9 は染付皿で、JB-2-a に分類される。高台断面は逆台形を呈し、畳付には砂が熔着している。釉には細かい貫入が入り、器面は青灰色を呈する。見込みには「日」字が書かれている。10 はうのふ釉碗で、TC-1 に分類される。胎土は黄白色を呈す。高台は逆台形を呈し、高台内はヘラ削りによって緩やかな円錐形状を呈している。体部は緩やかに丸味を帯びながらハの字状に開く。底部を除き、うのふ釉が掛けられている。11 は長石釉端反皿で、TC-2 に分類される。高台はシャープな逆台形を呈し、畳付は残存部においてアーチ状の切り欠きが認められ、波状を呈している。小片のためこの畳付整形が意図的なものか判断しがたいが、見込みにこの波状突起部分とほぼ同じ幅の弧状熔着痕が認められることから、意図的に整形された可能性がある。体部は緩やかなＳ字を描いて立ち上がり、口縁部は外反する。釉は畳付の一部を除き、全面に施釉されている。12 は瓶の底部片で、TE-10 に分類される。胎土は橙褐色を呈し、白色微粒子を含み、硬質である。底部脇は大きく面取りされ、体部はほぼ垂直に立ち上がる。鉄泥が掛けられている。13 は鉄釉壺で、TB-15-a に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。高台内側は外傾し、畳付外側は面取りされている。高台内のケズリはやや偏っている。体部は丸味を帯びて立ち上がり、最大径は肩部にある。口縁部はくの字状に外反し、口唇は玉縁を呈す。底部を除き、鉄釉が施されている。14 は手鉢と考えられる陶器で、TZ-5 に分類される。胎土は黄白色を呈し、黒色微粒子を少量含み、硬質かつ緻密である。高台断面は逆台形を呈す。体部は筒状に立ち上がり、二角を面取りした長方形の把手が水平方向に貼り付けられている。把手には 2 箇所の孔が並ぶが、一つは釉が埋まり貫通していない。体部は把手上部で一段が付き、口縁部に至る。また口縁部は把手近くで突起状の立ち上がりを見せているが、上部構造は欠損のため、不明である。高台内は左回転によって削られていることから、朝鮮半島系技術が導入された九州地域の製品と考えられる。内面と高台内を除き、鉄釉が掛けられている。15 は柿釉擂鉢で TC-29 に分類される。胎土は黄白色を呈し、白色微粒子を含む。口縁部はクランクして立ち上がり、縁帯部は断面三角形を呈す。擂目は 1 条 17 単位で構成され、見込みには丸と放射状に施されている。釉は全面に掛けられ、体下半から底部にかけて拭き取られている。内側面下位には重ね焼き時の団子痕が認められる。16 は焼き締め擂鉢で、TK-29 に分類される。胎土は暗褐色を呈し、白色粒子、黄白色粒子を多量に含む。口縁部は断面三角形を呈し、内側では口縁部下端擂目との境に、外側では口唇部下に沈線が巡る。外側面下半には指頭圧痕が観察される。擂目は 1 条 8 単位で構成され、見込みには丸と放射状に施されている。内体部下位には重ね焼き時の陶片痕による変色が認められる。17 は壺の蓋である。胎土は黄白色を呈す。皿状を呈するが、摘みは有さない。表面に鉄釉が施されている。18 ～ 28 はかわらけである。18 は手づくねかわらけで、DZ-2-g に分類される。胎土は淡褐色を呈す。底部は丸味を有し、外側面下半には指頭圧痕を有す。上半は肥厚し横方向のナデが入る。内面底体間には沈線状圏線が巡る。口縁部には灯心痕が著しく認められる。19 ～ 28 は、DZ-2-a に分類される。19 ～ 22、27 は右回転のロクロ水引き成形である。19 は器高が低く、口縁部が外反する。灯心痕が

認められる。20 ～ 22､27 は口縁部が内湾する。糸切りは比較的疎である。胎土は褐色を呈し､白色、暗赤褐色粒子を含む。口縁部には灯心痕が認められる。23 ～ 26、28 は左回転のロクロ水引き成形である。胎土は淡褐色～褐色を呈し、暗赤褐色粒を含む。底体間の立ち上がりは明確で、口縁は内湾する。口縁部には灯心痕が認められる。28 には口縁部に二次加工と推定されるアーチ状の切り欠きが認められる。

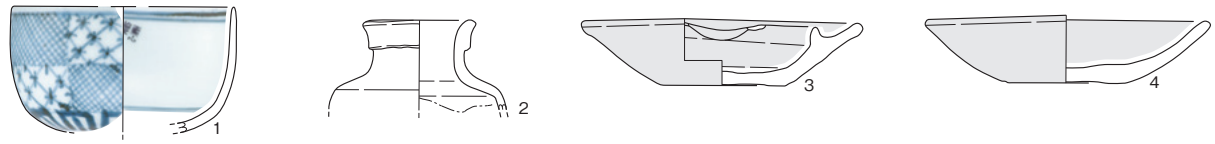
SU109（Ⅲ－27、28 図）

1 は染付五寸皿で、JB-2-f に分類される。口縁部は緩やかに外反し、8 単位の輪花を形成する。文様は見込み中央にコンニャク印判五弁花文が、内側面にはざくろを描いた雲形状の窓絵を 2 箇所対に配し、窓絵間には雪輪竹文を描いている。外側面には線書きによる唐草文が、高台内には一重圏線内にいわゆる馬字状「渦福」銘が書かれている。全体的に呉須の発色はくすんでいる。2 は蓋物の蓋である。表面中央には橋状摘みが貼り付けられていたが、欠損している。身掛かりの無釉部分にはアルミナが熔着している。3 は灰釉丸碗で、TC-1-c である。胎土は灰褐色を呈し、白色微粒子を含み、硬質である。釉は底部を除き施され、見込みには縮緬状の擦痕が認められる。4 は腰が張る端反碗で、TZ-1 に分類される。胎土は灰白色を呈し、ボソボソした割れ口である。口縁部には呉須が掛けられている。体部下半に二次穿孔が認められるが、用途は不明。5 は半筒碗で、TD-1-i に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。畳付は蛇ノ目状で幅広である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側が面取りされている。高台脇にはカンナ痕が放射状に巡っている。体部の屈曲部は一段張りだし、その上下が沈線状に凹む形を呈している。見込みにはピン痕が 2 箇所認められる。釉は比較的厚く施され､全体に細かい貫入が入る｡体部には白泥と鉄絵で文様が描かれている｡6 は小碗で、TZ-1 に分類される。胎土は橙褐色を呈し、比較的水簸され、硬質である。高台断面は長方形を呈し、畳付外側は面取りされている。体部は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。白化粧を施した上に釉を掛けている。白泥による文様が認められる。7 は油皿で、TC-2-o に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質かつ緻密である。器高は 14mm と低い。見込み、底部に環状熔着痕が認められる。8 は灰釉餌・水入れで、TC-30 に分類される。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。円筒形の体上部には粘土紐の貼り付けによる円形の把手が付けられている。9 は灰釉一升徳利で、TC-10-e に分類される。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。体部はほぼ寸胴で、頸部には一条の圏線が巡る。10 は灰釉二合半徳利で、TC-10-a に分類される。底部欠損。胎土は灰褐色を呈し、硬質である。体部はやや膨らみを有し、最大径は中位にある。口縁部は鉤状に折り返され、縁帯を有する。体部は列点状の釘書きで、□に大と書かれている。11 はいわゆる由右衛門徳利の底部片で、TF-10 に分類される。胎土は暗茶褐色を呈し、硬質かつ緻密である。底部に「久○」の墨書が書かれている。SK99 と遺構間接合する。12 はロクロ成形による塩壺で、DZ-51 に分類される。胎土は暗橙褐色を呈し、金雲母を少量含む。左回転のロクロ水引き成形によって成形されている。13 は板作り成形壺形塩壺の蓋で、DZ-00-c に分類される。胎土は淡褐色を呈し、白色粒子を含む。内面にはきめ細かい布目痕が認められる。

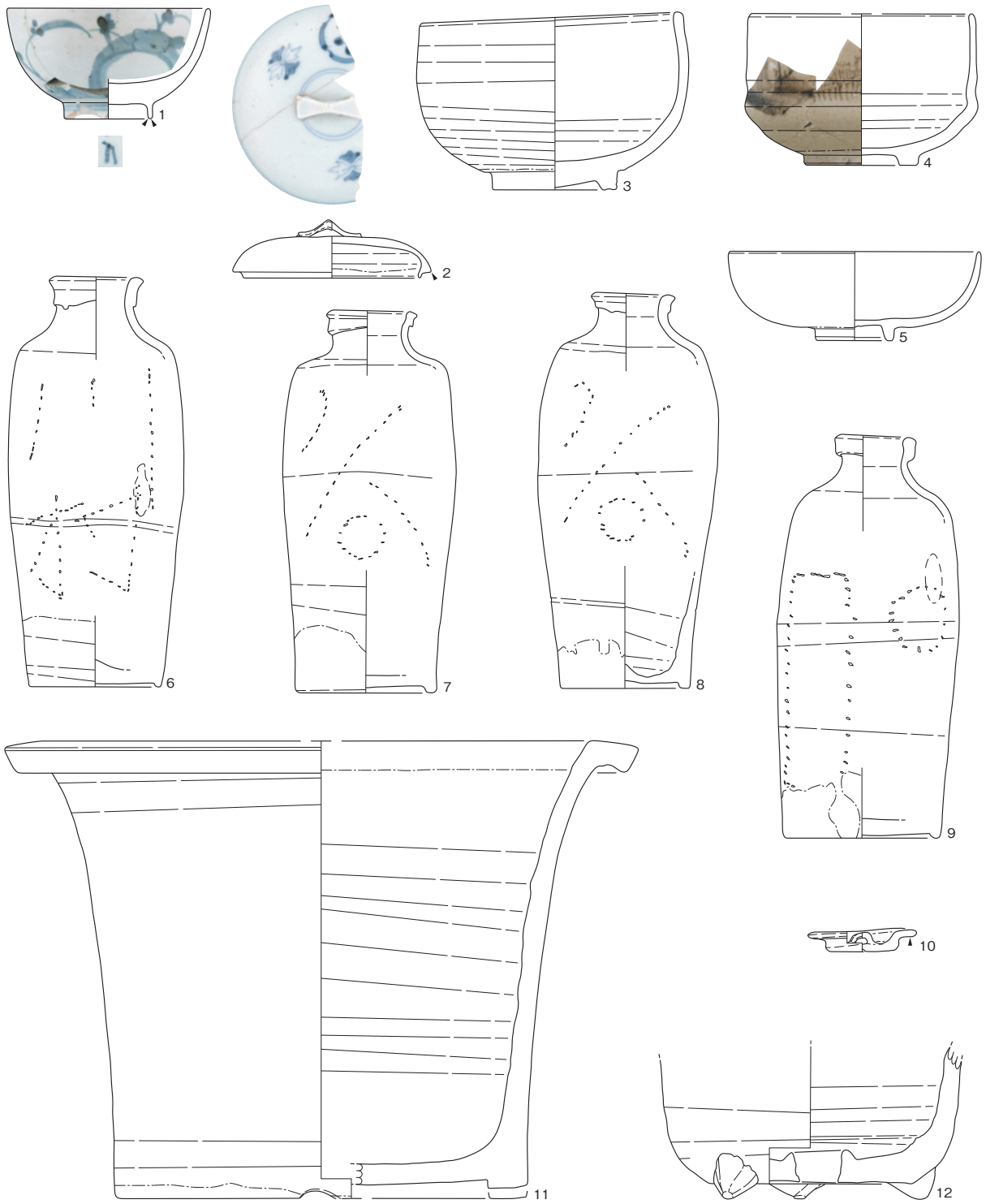
## 瓦（Ⅲ－29 図）

1 ～ 3 は包含層出土の軒桟瓦である。1 の瓦当文様は軒平部が江戸式Ⅱ Li、軒丸部は連珠三つ巴文 C で、連珠は 12 個巡っている。全幅 28.3cm、全長 21.8cm。桟部の切り込みの深さは 7.5cm で江戸式の特徴を表している。江戸式Ⅱ Li の文様を持つ軒桟瓦は、御殿下記念館地点で東大編年Ⅸ期で出土

している。2 の瓦当文様は東海式に分類される。文様の差以外に江戸式と比べ軒丸部が大きい。江戸では、19 世紀以降に多く見られる。3 の瓦当文様は類似分類無し。軒丸部下方に漆喰が付着している。




SB4

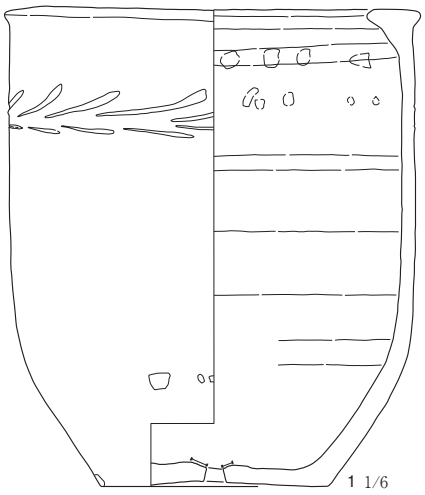



SX5

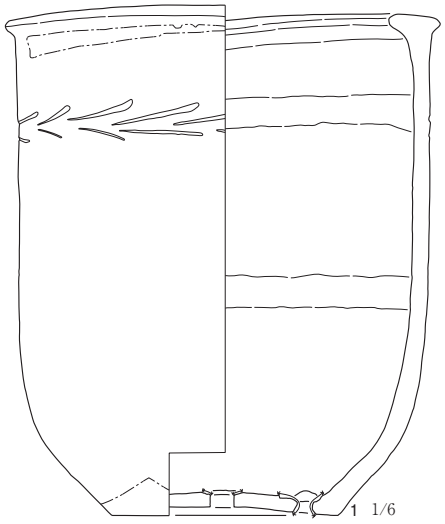
Ⅲ-23図　SB4、SX5　磁器・陶器・土器

Ⅲ-24図　SU33　磁器・陶器・土器

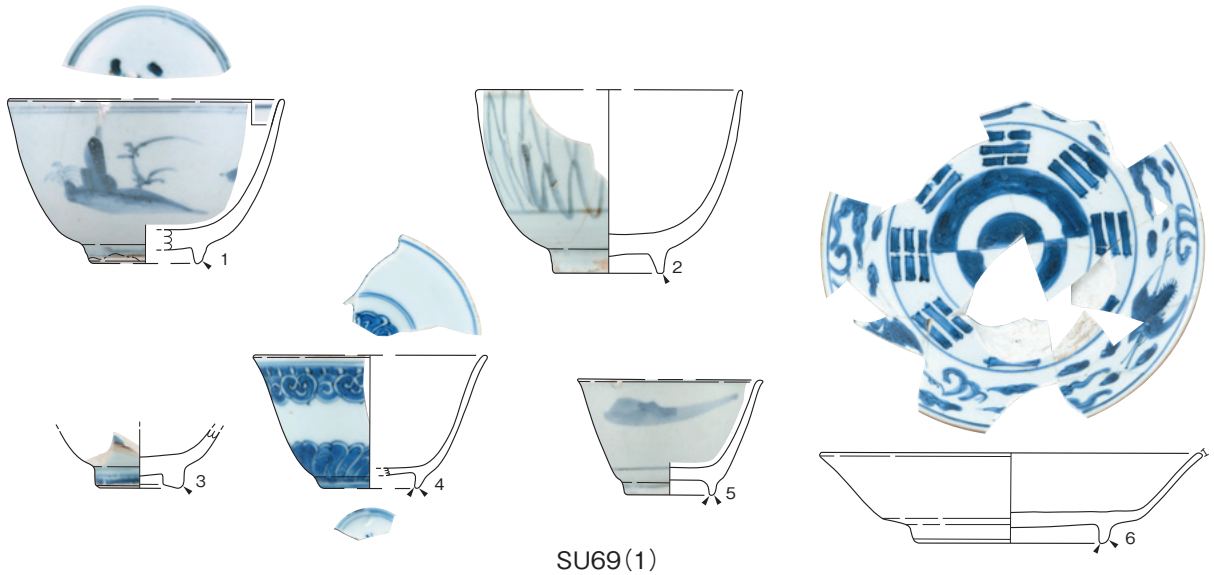
SB34




SX50



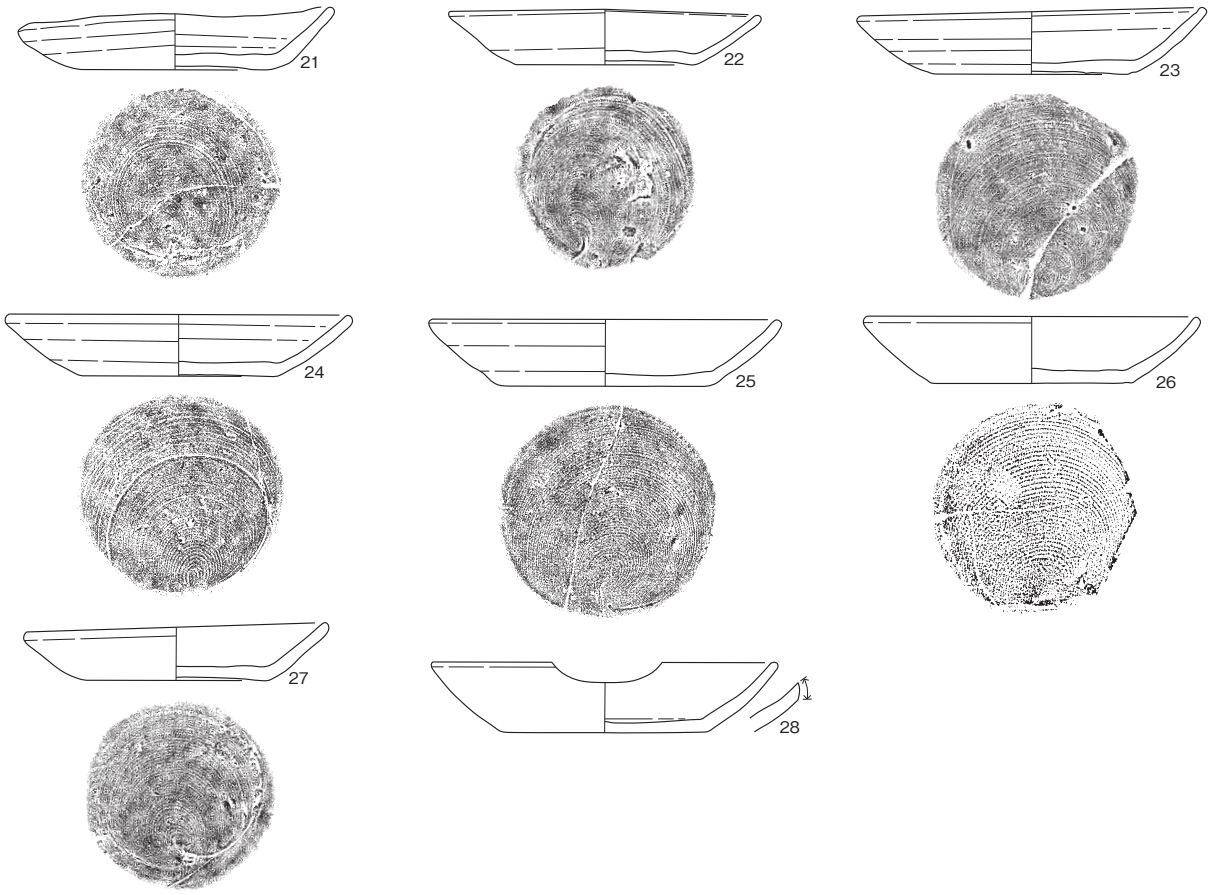

SX52



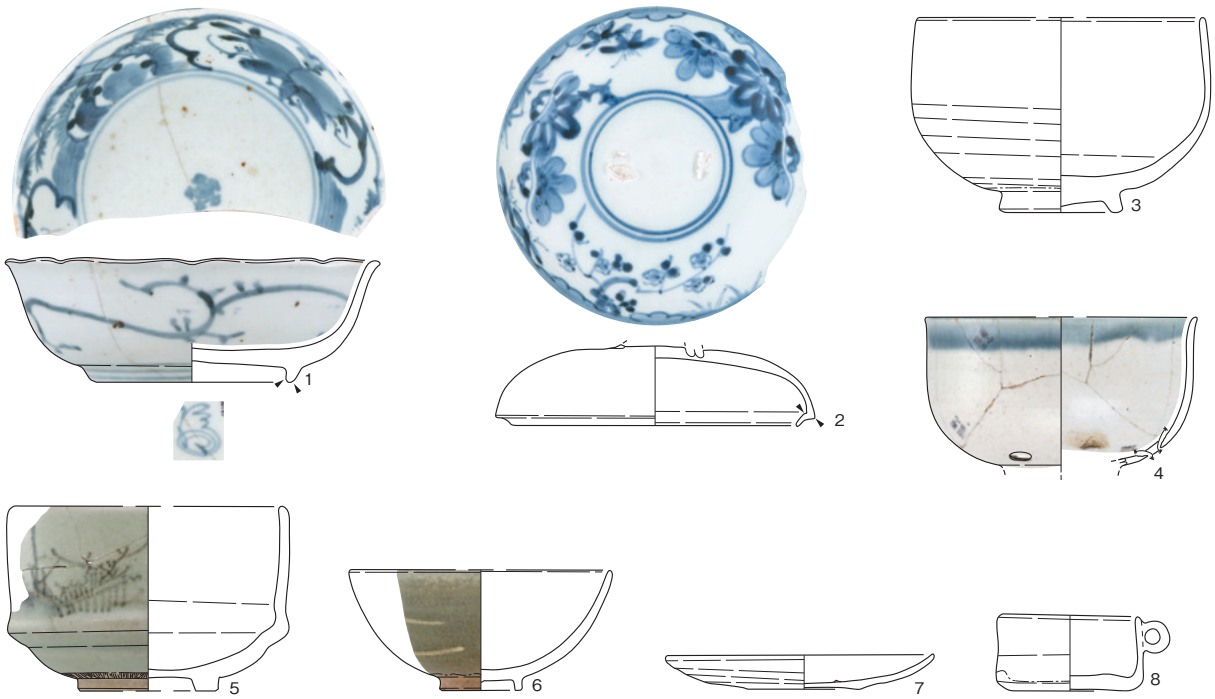

SU69(1)

Ⅲ-25図　SB34、SX50、SX52、SU69(1)　磁器・陶器・土器

Ⅲ-26図　SU69(2)　磁器・陶器・土器

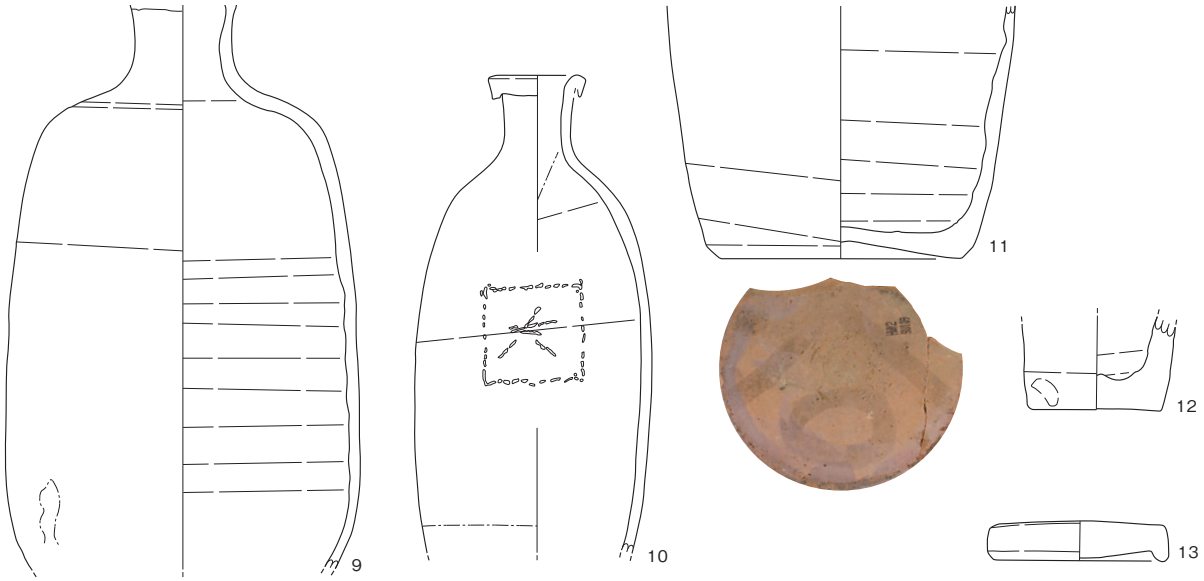



SU69(3)

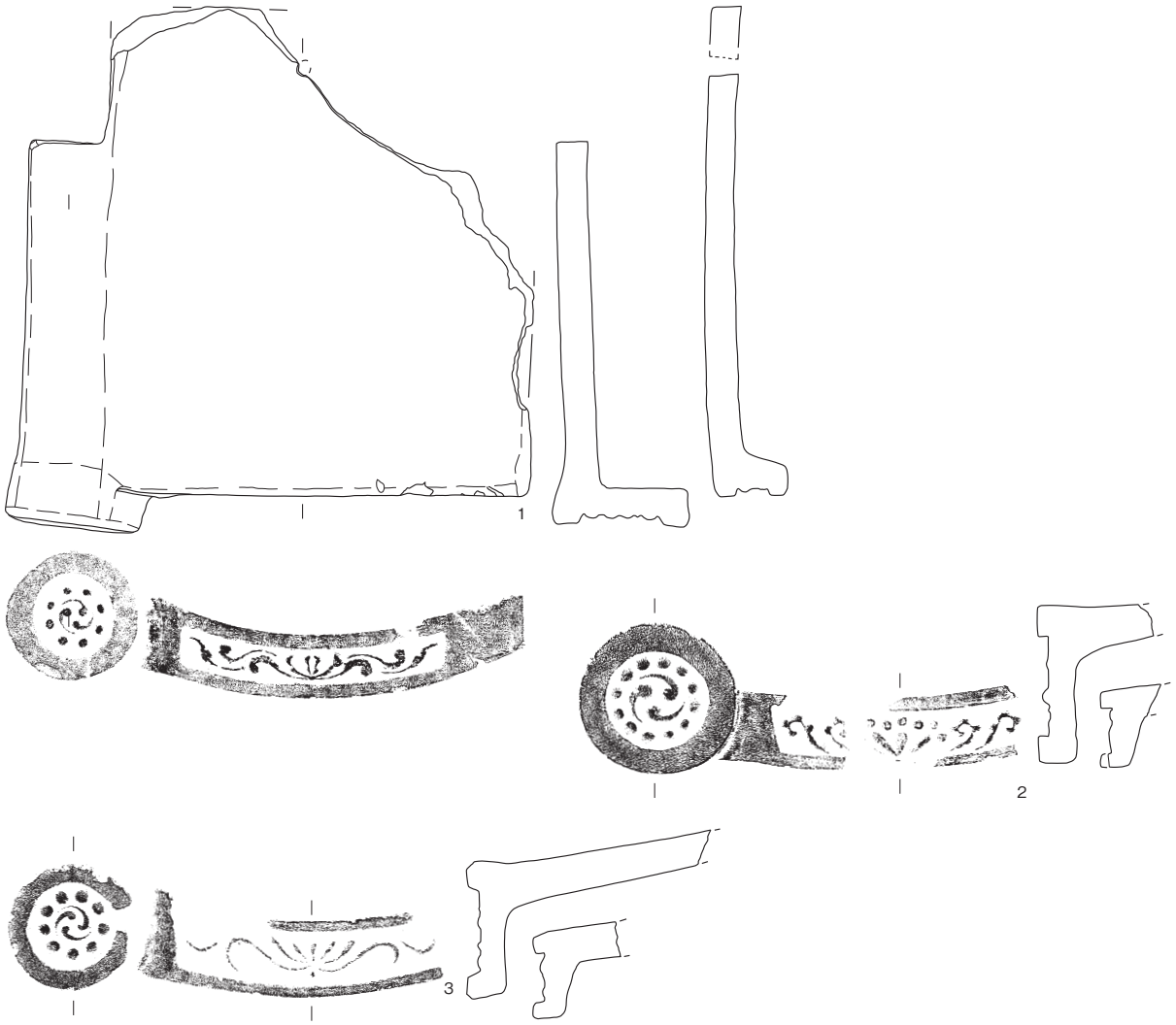



SU109(1)

Ⅲ-27図　SU69(3)、SU109(1)　磁器・陶器・土器




Ⅲ-28図　SU109(2)　磁器・陶器・土器




Ⅲ-29図　瓦

## まとめ

本地点の調査では、江戸時代の遺構・遺物が確認された。文献記録、絵図資料から判断して、江戸時代の本地点は、加賀藩が本郷邸を拝領する元和2・3（1616・17）年以前は大久保忠隣江戸屋敷、加賀藩から富山藩・大聖寺藩が分封する寛永16（1639）年までは、加賀藩邸、支藩分封以降は大聖寺藩邸の一部に該当する。遺構一括資料など出土した遺物年代からは、寛永16年を遡る資料は認められず、検出遺構、出土遺物の全てが大聖寺藩邸に関連する資料と位置付けられる。

第1節第4項でも触れたように、本地点では大枠3枚の遺構面が検出された。以下、それに従い、各遺構面の概要をもとに、本地点の土地利用の変遷を述べる。

### 3面

3面から検出された主な遺構として、調査区北側でSD85、SD78、SD130とした東西方向に伸びる長方形土坑、調査区中央に東西方向に伸びるSD22と、それに北接してSP28、SP29、SP82、SP96を伴う溝が存在する。北側の長方形土坑群は礎石などの痕跡は確認されなかったものの、江戸間1間間隔で配置されていることと、その形態が法学部4号館地点、懐徳門地点、第2中央診療棟地点などで検出された主柱・支柱の配置を目的とした塀基礎土坑と類似することから、本遺構群も藩邸内を南北に区画する塀に伴う基礎施設と考えられる。中央部のピットを伴う溝も、入院棟A地点1区、伊藤国際学術研究センター（加賀藩邸）地点などにおいて検出された、17世紀中葉段階の区画施設と共通する。このように本段階において、藩邸内の区画域に位置していたことが考えられる。区画北側は調査面積が狭いことに加え2面のSK100で大きく削平されており、土地利用の様相を窺い知ることはできない。一方南側はSX25、SX95などの植栽痕とその西側にはピット群が拡がり、変化・移動する境界及びその施設の集合体と考えられる。

本遺構面の下限は、SU69の覆土最上層に堆積した天和2（1682）年火災に比定される焼土層より天和2年の火災前の大聖寺藩邸期に位置付けられる。

### 2面

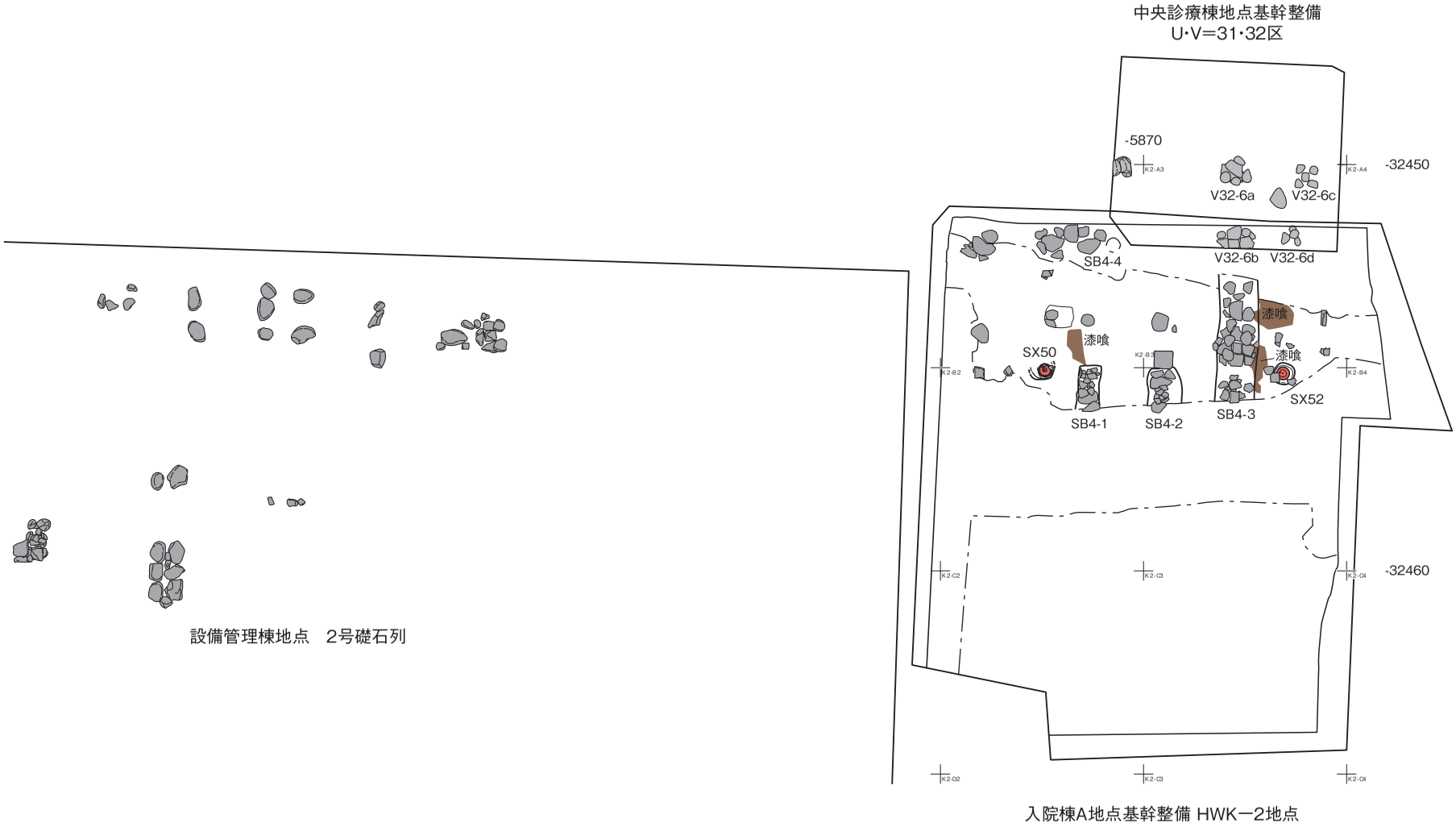
元禄16（1682）年の火災を上限とし、おおよそ18世紀代と考えられる遺構面である。北端に位置するSK100は中央診療棟地点V31－1と同一遺構で採土坑と考えられる遺構である。遺物は18世紀前半の陶磁器類が少量出土している程度で廃棄土坑としては利用されていない。南東部ではSB34→SU33と遺構が変遷する。SU33はいわゆる詰人空間タイプの地下室で、周囲にはSU109、SU54、SU125が分布する。出土遺物年代から18世紀前～中葉に廃絶されたと考えられ、概期には詰人空間の長屋に伴う庭空間であったと推定される。また地下室の分布域が東西約4m、南北約8mに拡がっていることから、加賀藩邸内の長屋付随庭空間奥行きサイズを援用すると、南北方向の長屋配置を想定することができる。SU33に切られているSB34は布堀を伴う基礎遺構で、従来の知見より土蔵基礎と考えられる。加賀藩邸事例にみられる土蔵は、御殿空間内もしくはそれに隣接する詰人空間に配置されていること、文化年間の大聖寺藩邸図では御殿空間奥向に位置している等より、本地点は元禄16年火災以降、18世紀前葉までは御殿空間内に位置していたと推測される。すなわち、遺構属性からは、その後詰人空間へと変化していく様相が読み取れるが、その契機として享保15（1730）年もしくは元文（1738）元年の藩邸火災に起因することが推測される。

1 面

布堀礎石遺構 SB4 は、設備管理棟地点および基幹整備地点 U・V ＝ 31・32 で検出された一連の礎石列に関連する建物基礎と考えられる（Ⅲ－31 図）。大聖寺藩邸図において本地点の位置は、御殿空間と詰人空間の境界付近にあたり、東西方向に伸びる長屋建物が描かれている。しかし描かれた建物の柱間寸法は 1 ～ 3 間と部屋ごとで異なり、検出された礎石列のように半間もしくは 1 間で規則的に配置されている様相とは異なる。故に、これらの礎石列は描かれた建物とは関連性が低く、文化年間以降に建設された建物と考えられ、その強固な基礎事業から土蔵もしくは御殿建物の可能性がある。その基礎に切られた漆喰範囲は第 2 中央診療棟地点事例から、隣接する水琴窟と供伴することが考えられ、本地点周辺が建物に近接する中庭的空間であったことを窺わせる。

以上のように、遺構変遷から本地点は大聖寺藩邸中にあって、御殿空間と詰人空間の境界域に位置し、年代によって帰属するエリアが異なっていた様相が看取される。また、現存する藩邸南側外郭の石垣が東に進むにつれ、段数が増えていることに認められるように、周囲は無縁坂に続く台地縁辺部の緩斜面地に位置している。そうした自然地理的要因に加え、火災などを契機とする土地利用改変、それに伴う空間利用変化によって、特に 18 世紀以降、約 10cm 単位の盛土整地がくり返し行われたといえる。このような藩邸内造成は天和 3 年に実施された邸内ほぼ全域に及ぶケースから土地利用改変による限定された区域で実施されるケースなど、多様性が指摘できる。

本地点 SU69 から出土した九谷産染付皿（Ⅲ－26 図 7）は、中央診療棟地点 F33－3 との遺構間接合資料である。両遺構は直線距離約 80 m を測り、さらに F33－3 が東大編年Ⅴ a 期に位置付けられることから、廃棄年代にも約 50 年の隔たりがある。遺物の生産年代からも SU69 出土破片が 1 次廃棄、F33－3 出土破片が 2 次廃棄と考えられ、F33－3 出土破片は、本来、天和 2 年火災時の瓦礫整理によって本地点周辺に廃棄された遺物のひとつで、瓦礫整理時に埋め戻された遺構覆土あるいは被災面上に新たに構築された整地層に包含されていたと考えられる。それが、F33－3 廃絶による埋め戻しを目的として掘削された（もしくは遺構構築など別の理由で掘削された土が F33－3 埋め戻しに利用された）などの理由による発生土とともに移動し、結果として 2 次廃棄に至った事象と捉えられ、藩邸内において開発もしくは改変に伴う土砂移動が行われていた証左を示していよう。




Ⅲ-31図　HWK−2地点とその周辺で検出された礎石列(S=1/150)
(座標は日本測地系)

# 第Ⅳ章　HWK－3 地点の調査

## 第 1 節　調査の概要

### (1) 調査地点の位置

入院棟 A 地点 1 区（以下、1 区）南側に位置する（Ⅰ－1 図）。文献資料からは天和 2（1682）年の大火以前は黒多門邸と呼称される加賀藩屋敷地の一部であり、大火以後は加賀藩支藩である大聖寺藩の屋敷地であったことが明らかとなっている。なお地歴詳細については第 1 分冊第 1 章を参照されたい。

### (2) 調査の方法と経過

調査は 1996 年 6 月 3 日～ 6 月 20 日に実施、調査面積は約 185㎡であり、それには縦坑部分（S ～ T・6 グリッド円形部分）の調査も含む。本地点のグリッドは 1 区の基準杭を南側に延長する形で西から東へ 2 ～ 7 の算用数字、北から南へ R ～ T のアルファベットを合わせたものを各杭の名称とし、北西隅の杭を基準とした。

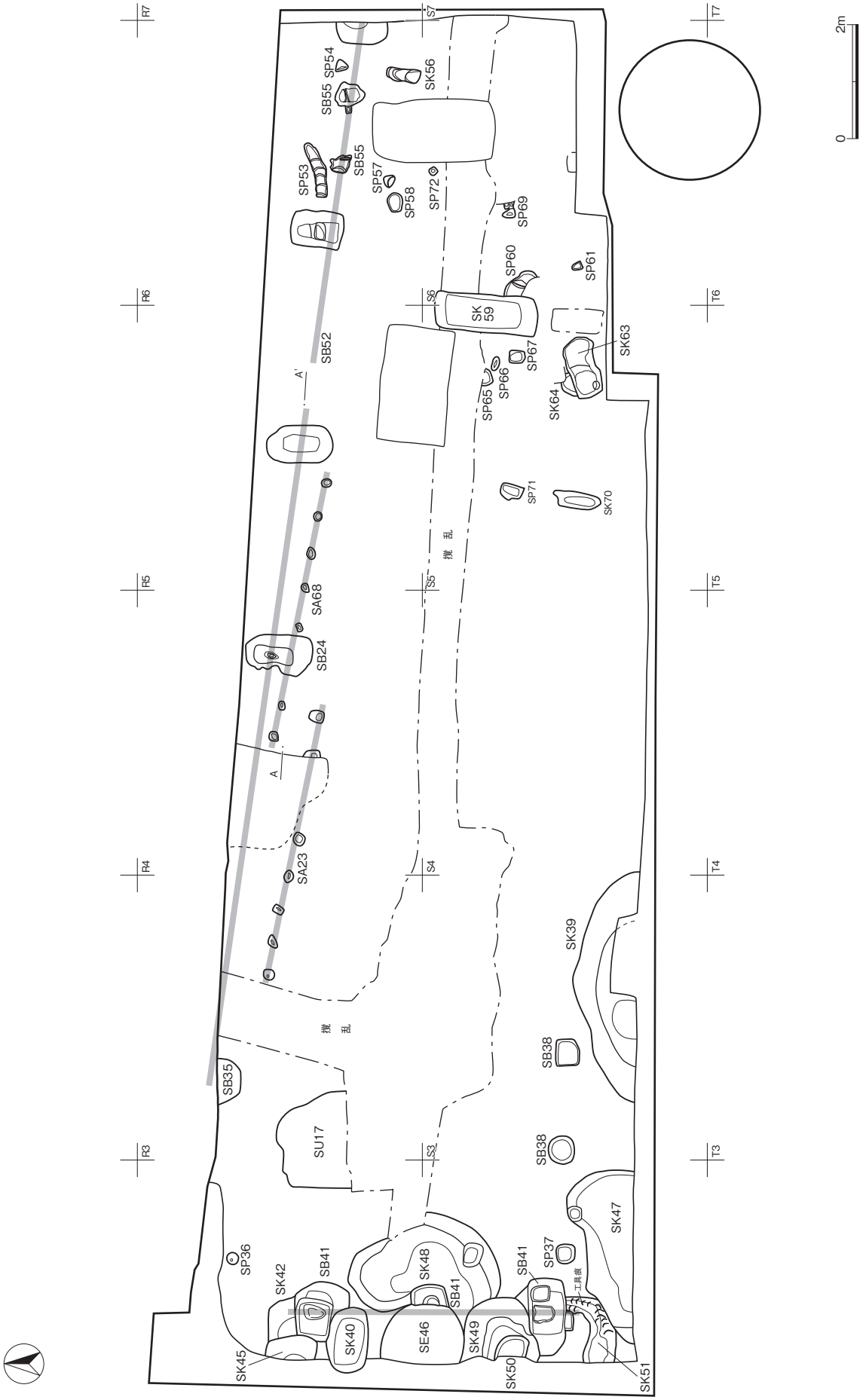
### (3) 基本層序

基本層序は 1 区南側とほぼ同じであり、江戸時代の生活面は地山を含め 3 面確認される（Ⅳ－4 図）。現地表面下 70 ～ 90cm までは表土や近代の盛土層、その下に江戸時代の盛土層（1 ～ 6 層）が 60cm 前後の厚さで確認される。この盛土層からは 18 世紀前半に比定される陶磁器土器が出土しており、1 区 A 層に対応する層と判断される。Ⅳ－3 図で A 面としているのはこの A 層上面で検出された遺構であるが、A 層上面では特に硬化した状況は認められなかった。確認されたのは地下室と性格不明の遺構のみで、遺構密度が非常に低い。6 層直下に硬化面（7 層上面、C 面）が 1 枚確認されたが、この硬化面を構築する 7 層は厚さ 5cm 前後のごく薄い層であり、炭化物や焼土物を含む。7 層は堆積状況および出土遺物の年代観から 1 区 C0 層と対応する層と判断され、出土陶磁器には 1 区の C2 層、C3 層から出土したものと同じものも含む。

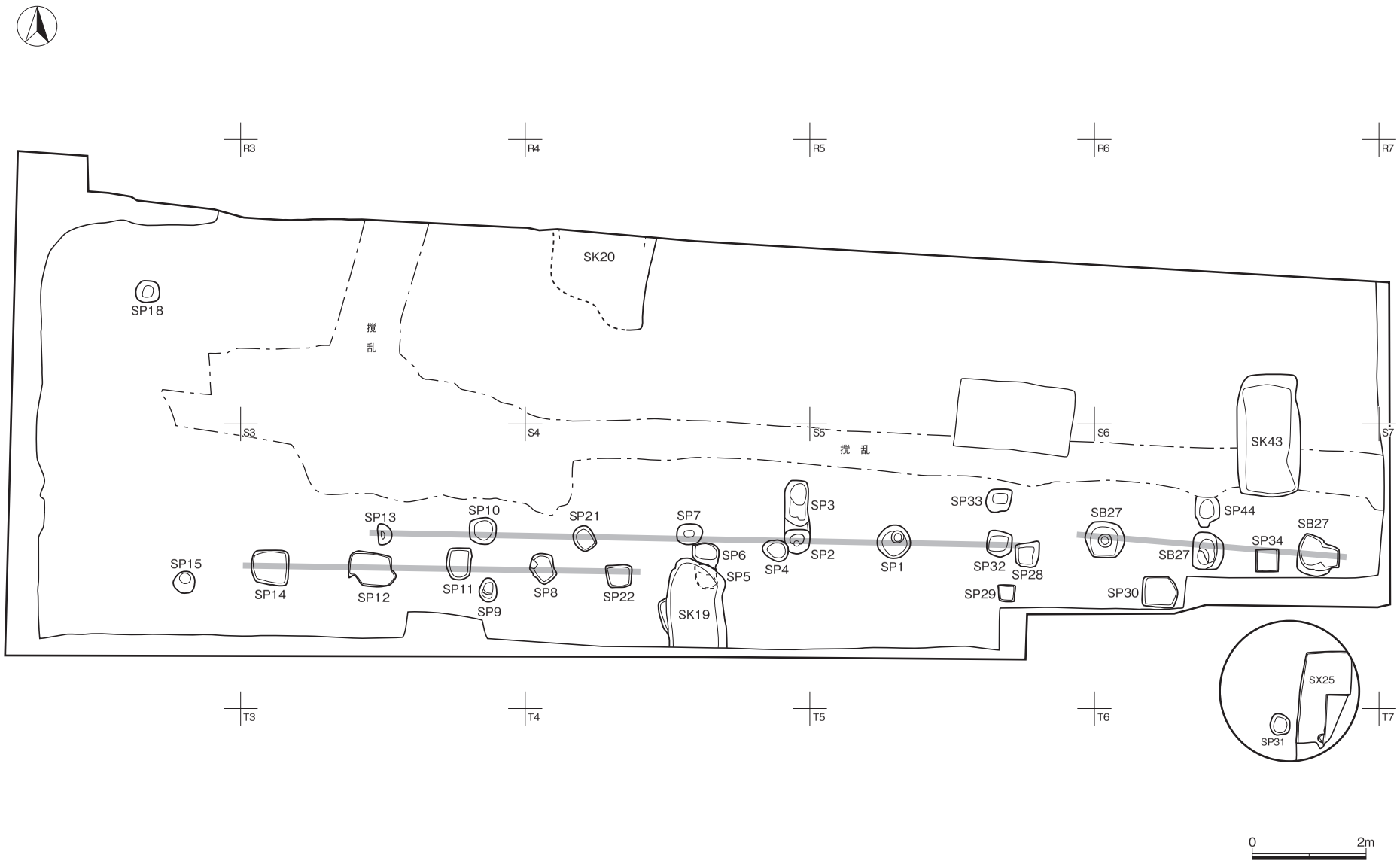
### (4) 調査の概要

C 面では調査区南側に遺構が集中する状況が認められたが、1 区 C 面においても調査区南壁際は遺構密度が低く、そのような状況がその南側に位置する本調査地点北側まで及んでいるということであろう。確認された遺構の大半は東西方向に連なる柱穴列であり、他は長方形土坑 2 基、性格不明遺構 1 基である（Ⅳ－2 図）。7 層直下はローム（地山）で、本地点では D 面として調査を実施、1 区 D 面から E 面に対応する。もっとも遺構密度が高く、調査区内ほぼ全体で遺構が検出されたが、遺構の種類や密度には違いが認められる（Ⅳ－1 図）。調査区中央の撹乱北側では掘立柱建物跡や塀列跡が確認されるが、これらには重複関係はなく、また各遺構の主軸も異なるものであることから、構築段階に時期差があったと思われる。調査区西から南西付近では礎石建物跡、井戸、円形土坑などが重複

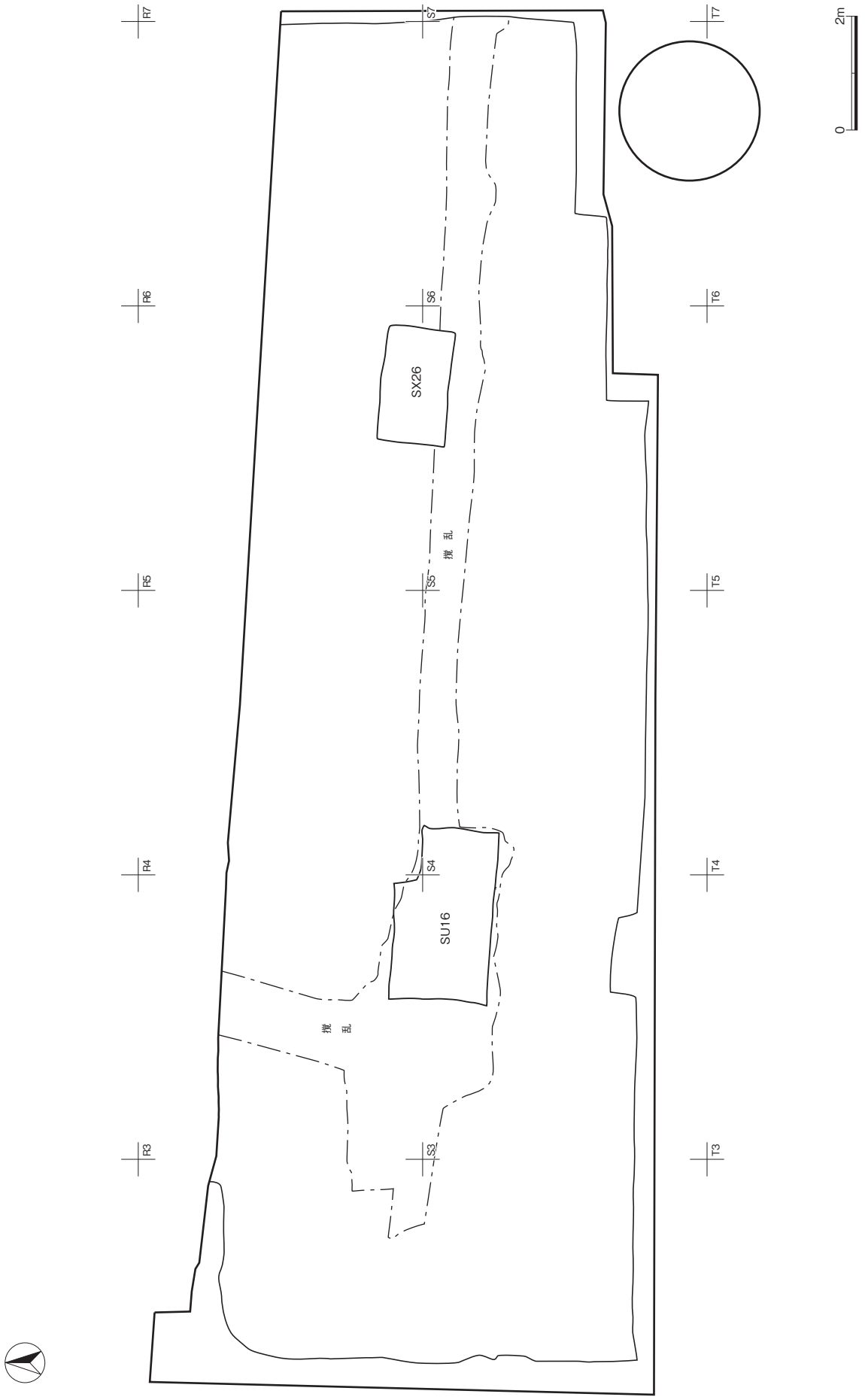
して検出されるなど、土地の頻繁な利用があった事がうかがわれる。また他の面では検出されなかった植栽痕と考えられる大形円形土坑も検出されている。調査区東から南東付近では大形の長方形土坑1基と小ピットが散在する。



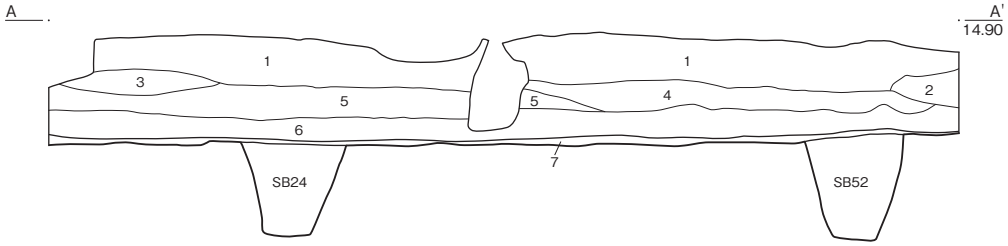

Ⅳ-1図　HWK-3全体図D面




Ⅳ-2図　HWK-3全体図C面




Ⅳ-3図　HWK-3全体図A面




1　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、明灰色シルト･粘土やや多含、炭化物･焼土粒･礫少含、粘性やや強）
2　黒色土　（粘性やや強、しまりなし）
3　灰黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック･灰色･粘土やや多含、炭化物･焼土粒･礫少含、粘性やや弱、しまりやや弱）
4　黄褐色土　（ローム粒･ロームブロック極多含、黒褐色土粒･ブロック少含、炭化物･焼土粒･礫微含、粘性強）
5　暗褐色土　（黒褐色土粒･ブロック多含、ローム粒･ロームブロック少含、炭化物･礫微含、粘性やや強）
6　褐色土　（ローム粒･ロームブロック･明灰色シルト･炭化物･焼土粒･粘土少含、礫微含、粘性やや強）
7　明灰色土　（ローム粒･炭化物少含、焼土粒微含、上面に 1cm 大の礫あり、粘性強、しまり極強）

0　2m

## Ⅳ-4図　基本層序

（A－A'はⅣ－1図参照）

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（Ⅳ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅳ-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| SP | 1 | 19 | C面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 2 | 19 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 3 | 18 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 4 | 2 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 5 | 2 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 6 | 2 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 7 | 19 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 8 | 19 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 9 | 2 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 10 | 19 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 11 | 19 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 12 | 19 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 13 | 19 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 14 | 19 | C面 | S3 | | | | | | | | |
| SP | 15 | 2 | C面 | S2 | | | | | | | | |
| SU | 16 | 20 | A面 | R3、R4、S3、S4 | | | | | | | | |
| SU | 17 | 15 | D面 | R2、R3 | 22 | 24 | | | | | | |
| SP | 18 | 2 | C面 | R2 | | | | | | | | |
| SK | 19 | 2 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SK | 20 | 1 | C面 | R4 | | | | | | | | |
| SP | 21 | 19 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SP | 22 | 19 | C面 | S4 | | | | | | | | |
| SA | 23 | 5 | D面 | R3、R4 | | | | | | | | |
| SB | 24 | 4 | D面 | R4 | | | | | | | | |
| SX | 25 | 2 | C面 | S6 | | | | | | | | |
| SX | 26 | 21 | A面 | R5、S5 | | | | | | | | |
| SB | 27 | 16 | C面 | S5、S6 | | | | | | | | |
| SP | 28 | 2 | C面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 29 | 2 | C面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 30 | 2 | C面 | S6 | | | | | | | | |
| SP | 31 | 2 | C面 | S6 | | | | | | | | |
| SP | 32 | 19 | C面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 33 | 2 | C面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 34 | 2 | C面 | S6 | | | | | | | | |
| SB | 35 | 1 | D面 | R3 | | | | | | | | |
| SP | 36 | 1 | D面 | R2 | | | | | | | | |
| SP | 37 | 1 | D面 | S2 | | | | | | | | |
| SB | 38 | 7 | D面 | S2、S3 | | | | | | | | |
| SK | 39 | 1 | D面 | S3 | | | | | | | | |
| SK | 40 | 12 | D面 | R2 | | | | | | | | |
| SB | 41 | 8 | D面 | R2、S2 | | | | | | | | |
| SK | 42 | 13 | D面 | R2 | | | | | | | | |
| SK | 43 | 17 | C面 | R6、S6 | 22、23 | | | | | | | |
| SP | 44 | 2 | C面 | S6 | | | | | | | | |
| SK | 45 | 1 | D面 | R2 | | | | | | | | |
| SE | 46 | 11 | D面 | R2、S2 | | | | | | | | |
| SK | 47 | 1 | D面 | S2 | | | | | | | | |
| SK | 48 | 1 | D面 | R2、S2 | | | | | | | | |
| SK | 49 | 1 | D面 | S2 | | | | | | | | |

Ⅳ－1 表　HWK－3 遺構一覧表（1）

| 遺構 | | 遺構図版 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（Ⅳ-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | Ⅳ-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| SK | 50 | 1 | D面 | S2 | | | | | | | | |
| SK | 51 | 1 | D面 | S2 | | | | | | | | |
| SB | 52 | 9 | D面 | R5、R6 | | | | | | | | |
| SP | 53 | 1 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SP | 54 | 1 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SB | 55 | 10 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SK | 56 | 1 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SP | 57 | 1 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SP | 58 | 1 | D面 | R6 | | | | | | | | |
| SK | 59 | 14 | D面 | S5、S6 | | | | | | | | |
| SP | 60 | 1 | D面 | S6 | | | | | | | | |
| SP | 61 | 1 | D面 | S6 | | | | | | | | |
| SK | 63 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SK | 64 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 65 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 66 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 67 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SA | 68 | 6 | D面 | R4、R5 | | | | | | | | |
| SP | 69 | 1 | D面 | S6 | | | | | | | | |
| SK | 70 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 71 | 1 | D面 | S5 | | | | | | | | |
| SP | 72 | 1 | D面 | S6 | | | | | | | | |

Ⅳ－1 表　HWK－3 遺構一覧表（2）

# 第 2 節　遺構

## （1）D 面の遺構

### SA23（Ⅳ－5 図）

R･3 ～ 4 グリッドにかけて位置する柱穴列である。1 列で構成されていることから塀跡と考えるが、SK20 を挟んで平面形、規模、間尺が異なることから、主軸を揃えた塀が 2 基並んでいた可能性もある。しかし SK20 の西側では柱穴 2 基のみしか確認できず 1 つの塀跡と判断した。SK20 西側の柱穴は、平面形は隅丸方形ないし円形を呈し、規模は 1 辺 20cm 前後、確認面からの深さは 4cm を測り、柱穴間の間隔は 60cm 前後である。SK20 の東側に位置する柱穴は、平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西 20cm、南北 26cm、確認面からの深さは 10cm を測る。柱穴間の間隔は 75cm 前後である。覆土はいずれもローム主体である。

本遺構東側に位置する SA68 とは遺構主軸がほぼ同じであり、何らかの関連性が推定される。遺物は出土しなかった。

### SA68（Ⅳ－6 図）

R・4 ～ 5 グリッドに位置する柱穴列である。平面形はやや歪な隅丸方形から円形を呈し、規模は 1 辺 15 ～ 20cm、確認面からの深さは 4 ～ 6cm を測る。本遺構は 1 列の柱穴列で構成されていることから塀跡と考えられる。柱穴間の間隔は 60cm 前後である。覆土はいずれもローム主体である。

本遺構西側に位置する SA23 とは遺構主軸がほぼ同じであり、何らかの関連性が推定される。遺物は出土しなかった。

### SB38（Ⅳ－7 図）

S・2 ～ 3 グリッドに位置する掘立柱建物跡である。東西方向に 2 基の柱穴が 180cm 間隔で確認されるが、北側は撹乱、南側は調査区外となるため、建物規模は不明である。東側柱穴の平面形はやや歪な円形を呈し、直径約 50cm、確認面からの深さは 8cm を測る。西側柱穴の平面形はやや歪な方形を呈し、1 辺約 45cm、確認面からの深さは 18cm を測る。覆土はともにローム主体で 1 度に埋め戻されている。R ～ S・2 グリッドに位置する SB41 とは遺構主軸が同じであり、本遺構と関連する建物跡の可能性もある。遺物は出土しなかった。

### SB41（Ⅳ－8 図）

R ～ S･2 グリッドに位置する礎石建物跡である。南北方向に 3 基の柱穴が約 200cm 間隔で確認され、うち根石を伴うものが 2 基、素掘りの柱穴が 1 基である。平面形はいずれも長方形を呈す。SK40、SK42、SK45、SE46、SK49 と重複しており、新旧は SK42 より新で、SK40、SK49、SE46 より旧である。規模はそれぞれ異なり、1 番北側の柱穴は東西 106cm、南北 96cm、確認面からの深さは 49cm、中央の柱穴は東西 30cm、南北 66cm、確認面からの深さは 36cm、南側の柱穴は東西 134cm、南北 66cm、確認面からの深さは 57cm を測る。いずれの柱穴も掘方の壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。坑底で検出された根石は形状や規模は異なるが、表面は平坦に成形され、高さを揃えるための工夫なのか南側柱穴の根石下には瓦片が置かれる状況も確認された。遺物は

南側に位置する柱穴から陶磁器、土器片が少量出土している。

SB24、SB35、SB52（Ⅳ－9図）

R・3～6グリッドに位置する掘立柱建物跡である。360～380cm間隔で5基の柱穴が東西方向に確認されるが、SB35とSB24の柱間隔をみると他の柱間隔の約2倍あり、その間にもう1基柱穴が存在していた可能性もある。最も東側で確認されている柱穴の東側立ち上がりは調査区外となっており、建物跡もさらに東側へ伸びる可能性がある。いずれの柱穴も掘方平面形は長方形を呈し、規模は東西65cm前後、南北95cm前後、深さ57～73cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。柱痕が遺存していたのは1基のみであるが、柱痕が残存していなくて坑底に小柱穴状の凹みを有すものが多い。覆土はしまりがやや弱く、ロームブロック主体の黄褐色土で一度に埋め戻されている。なお最も西側で確認されているSB35は1区ではSK391として調査された遺構であるが、SK391のさらに西側に続くか否かは、別遺構による撹乱や調査区外となるため未確認である。遺物は出土しなかった。

SB55（Ⅳ－10図）

R6グリッドに位置する。東西方向に2基の柱穴が約130cm間隔で確認される。掘方は不整形を呈す。規模は東側の柱穴が長軸（南北）54cm、短軸（東西）34cm、深さ2cmを測り、西側の柱穴は長軸（南北）32cm、短軸（東西）30cm、深さ6cmを測る。ともにごく浅く、坑底、壁の凹凸が著しい。遺物は出土しなかった。

SE46（Ⅳ－11図）

R～S・2グリッドに位置する井戸である。上面は撹乱され、西側は調査区外へ拡がる。残存する平面形は半円形を呈し、規模は南北142cm、東西105cmを測る。調査は安全上の理由から遺構の東側1/3を掘削し、断面観察を確認面下167cmまで実施する事にとどめたため、壁面に足掛け穴やタガの痕跡を確認するには至らなかった。観察できた覆土はローム粒やブロックを多く含むしまりのやや弱いものである。遺物は陶磁器、土器片が少量出土している。

SK40（Ⅳ－12図）

R2グリッドに位置する遺構である。SB41と重複しており、新旧はSB41より新である。平面形は隅丸長方形を呈し、残存規模は東西115cm、南北70cm、確認面からの深さは18cmを測る。坑底は凹凸を有し、壁には工具痕が認められる。覆土はローム粒やブロックを多く含む。本遺構南側に位置するSK50は本遺構と規模、形状、覆土が酷似する遺構であり、南北に伸びる土坑群あるいは建物跡の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SK42（Ⅳ－13図）

R2グリッドに位置する遺構である。SB41と重複しており、新旧はSB41より旧である。本遺構西側に位置するSK45との切り合いは不明である。平面形は不明、残存規模は長軸（東西）70cm、短軸（南北）50cm、確認面からの深さは20cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、特に壁には階段状に工具痕が認められる。本遺構南側に位置するSK49は規模、形状、覆土の状況などが本遺構と酷似する。南北に伸びる土坑群あるいは建物跡の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SK59（Ⅳ－14 図）

S・5 ～ 6 グリッドに位置する遺構である。平面形は南北に細長い長方形を呈し、規模は東西 182cm、南北 70cm、確認面からの深さは 120cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、特に壁面には工具痕も看取される。壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土はローム粒やブロックを多く含むもので数回にわたり埋め戻されている。遺物は陶磁器、土器片が少量出土している。

SU17（Ⅳ－15 図）

R･2 ～ 3 グリッドに位置する地下室である。南側は撹乱され、開口部形状は不整形で、長軸（東西）172cm、短軸（南北）122cm、確認面からの深さは 187cm を測る。北、東壁、坑底ともに丁寧に整形され平滑である。坑底の平面形は台形を呈し、北辺は東西 163cm、南辺は 192cm、南北 180cm を測る。坑底は全体的に開口部より外側へハングしているが、東側へ最も大きく拡がり、また確認面から約 30cm 下で地山をアーチ状に削り込んだ痕跡が確認されることから、本地下室は天井がアーチ状に整形された室部を東側に有す地下室であった可能性がある。最下層（7 層）の覆土はローム主体であり、その堆積状況などから室部の天井崩落土である可能性もある。

遺物は陶磁器、土器が遺物収納箱 1 箱分出土しているが、中心はⅣ－22 図に図示したような 17 世紀後半に位置づけられるものである。

## （2）C 面の遺構

SB27（Ⅳ－16 図）

S・5 ～ 6 グリッドに位置する掘立柱建物跡である。3 基の柱穴が東西方向に確認される。柱穴掘方の平面形、規模に規則性はないが、その間隔は 180cm とほぼ 1 間間隔で並ぶ。遺物は出土しなかった。

SK43（Ⅳ－17 図）

R ～ S・6 グリッドに位置する遺構である。南側が一部撹乱されるが、平面形は長方形を呈し、東西 111cm 以上、南北 216cm、深さ 60cm を測る。壁、坑底ともに凹凸を有し、工具痕が顕著である。北壁はほぼ坑底から垂直に立ち上がるが、他はやや開きながら立ち上がっている。坑底は西側半分がやや全体的に深く、凹凸が著しい。覆土は大きく 2 つの堆積状況が確認される。すなわち 3 層より上層はレンズ状に堆積し、下層は埋め戻しと掘削が繰り返されたような堆積状況を呈す。貝を多く含む層（6 層）も確認されることから、廃棄土坑として繰り返し利用された可能性もある。

遺物は陶磁器、土器が遺物収納箱 1/2 箱分出土しており、中心はⅣ－22 ～ 23 図に図示したような 17 世紀後半に位置づけられるものである。

SP3（Ⅳ－18 図）

S4 グリッドに位置する遺構である。SP2 と重複しており、新旧は SP2 より旧である。平面形は細長い長方形を呈し、東西 41cm 以上、南北 90cm、深さ 24cm を測る。坑底にごく緩やかな段差を有す。周囲に対応する柱穴は検出されず、性格は不明である。遺物は陶磁器、土器片が少量出土している。

SP1、SP2、SP7、SP8、SP10、SP11、SP12、SP13、SP14、SP21、SP22、SP32（Ⅳ－19 図）

S・3 ～ 5 グリッドに位置する東西方向に伸びる柱穴列群で、2 条の柱穴列が南北に近接して並ぶ。北側の柱穴列は西から SP13、SP10、SP21、SP7、SP2、SP1、SP32 の 7 基の柱穴が 180cm 間隔で並

ぶ。各柱穴の平面形は概ね方形を呈し、規模は一辺約 40 ～ 50cm、確認面からの深さは東西両端の SP13、SP32 は約 40cm を測る。南側の柱穴列は西から SP14、SP12、SP11、SP8、SP22 の 5 基の柱穴が 150cm 間隔で並ぶ。各柱穴の平面形は概ね長方形を呈し、規模は長軸 50 ～ 70cm、短軸 40 ～ 50cm、確認面からの深さは 10cm 前後である。なお南側の柱穴列は規模や形態などが酷似する本遺構東側に位置する SP5 まで伸びる可能性もある。2 つの柱穴列は遺構主軸がわずかに異なり、柱間間隔も異なることから柱穴列とその控えとは考えにくい。近接して作り直しが行われた塀列か。遺物は SP1、SP8、SP10、SP12、SP14 から陶磁器、土器片が少量出土している。

## （3）A 面の遺構

### SU16（Ⅳ－20 図）

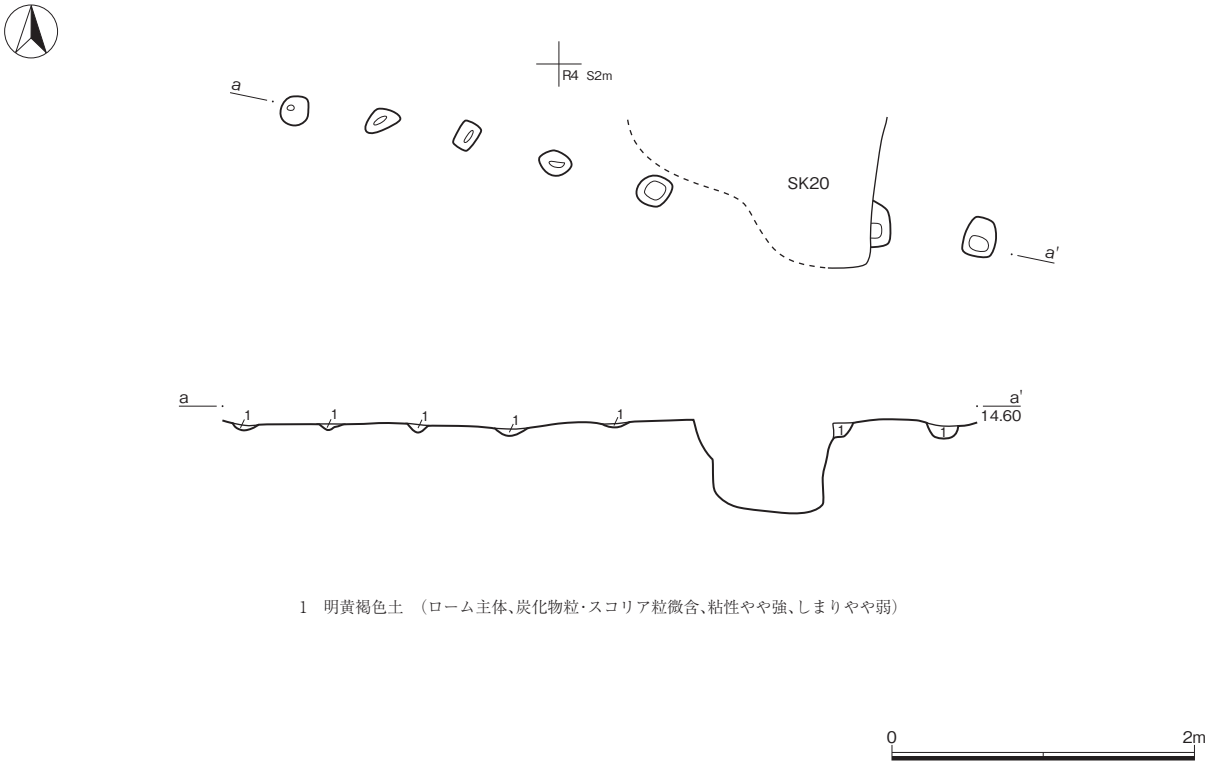
R ～ S・3 ～ 4 グリッドに位置する地下室であり、上部および坑底北側は撹乱される。残存する開口部は北東隅を欠いたような長方形を呈し、その規模は東西 300cm、南北 136cm ～ 174cm、確認面からの深さは東側立ち上がりでは 30cm、西側立ち上がりでは 112cm を測る。なお坑底では北辺が撹乱されるため残存する平面形は北辺が歪な長方形を呈すが、東側立ち上がりから西側へ緩やかに傾斜し、途中 10cm ほどの段差が確認された。壁、坑底ともに平滑に整形され、壁は坑底からわずかに内傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。

覆土を観察すると、5 層がほぼ水平に堆積しており、その時点では本遺構は開口していた可能性がある。その上の 4 層はローム主体層で、水平に堆積する 5 層の上にマウント状に堆積していることから周囲の壁の崩壊土の可能性もあるが、壁面にはそのような状況は確認されなかった。

遺物は陶磁器、土器片が少量出土しており、それらは 18 世紀前葉を中心とする様相を呈すものである。

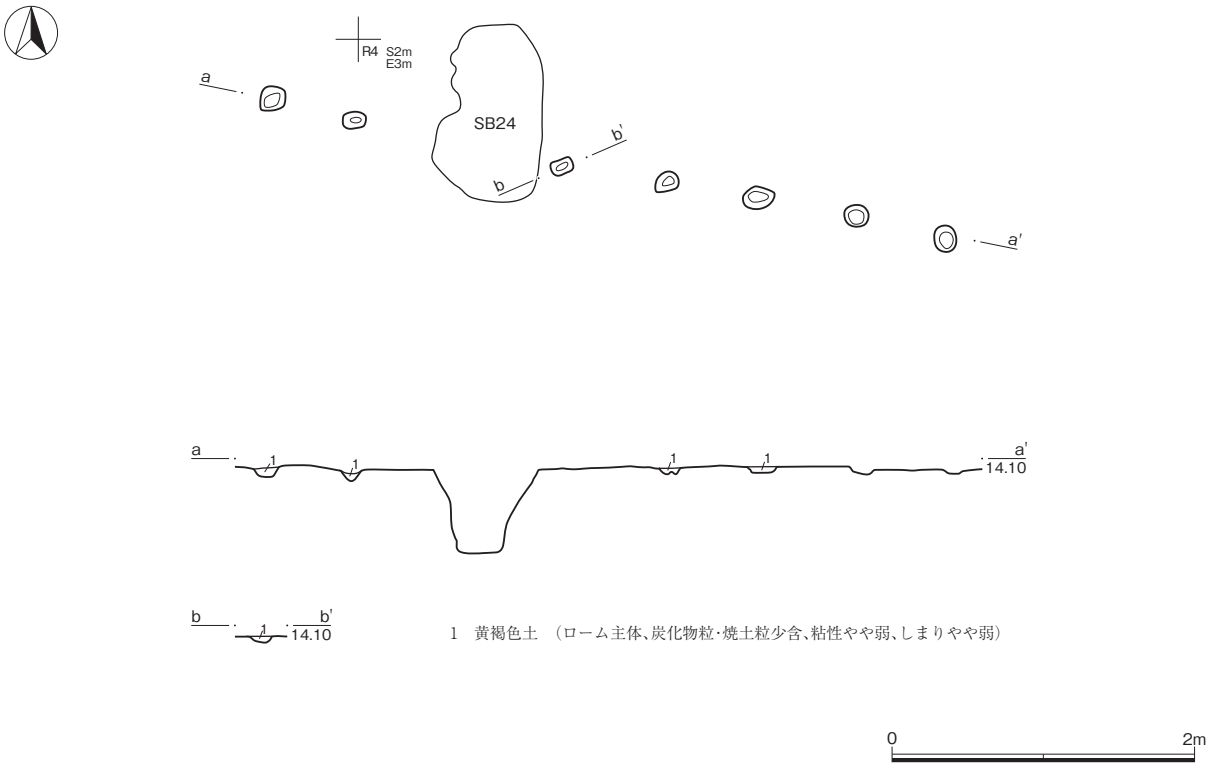
### SX26（Ⅳ－21 図）

R ～ S・5 グリッドに位置する。上部は撹乱される。残存する開口部形状は長方形を呈し、東西 205cm、南北 120cm を測る。調査は安全上の理由から確認面下 198cm にて中止した。壁面は比較的平滑に調整され、坑底にむかってほぼ垂直に落ちている。覆土は明黄褐色のローム土を数度にわたり埋め戻しているが、転圧した状況は確認されなかった。坑底まで掘削していないため本遺構がいわゆる地下室なのか判然としない。遺物は陶磁器、土器片が少量出土している。



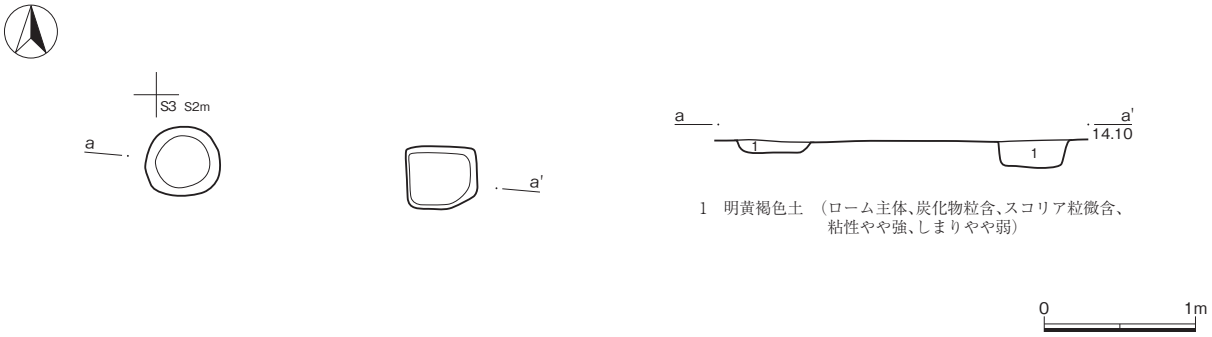

1　明黄褐色土　（ローム主体、炭化物粒・スコリア粒微含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅳ-5図　SA23

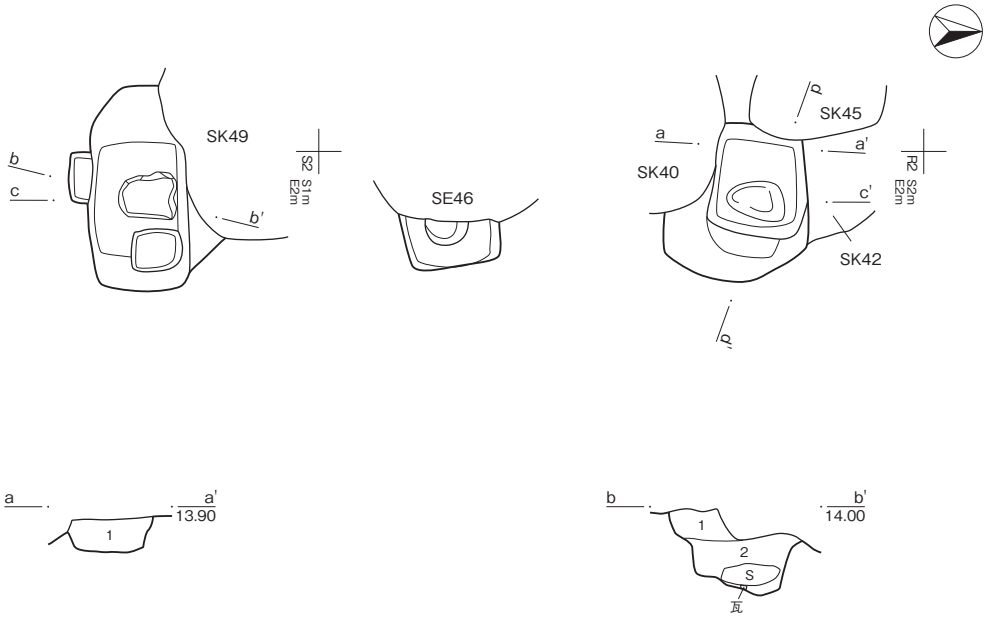


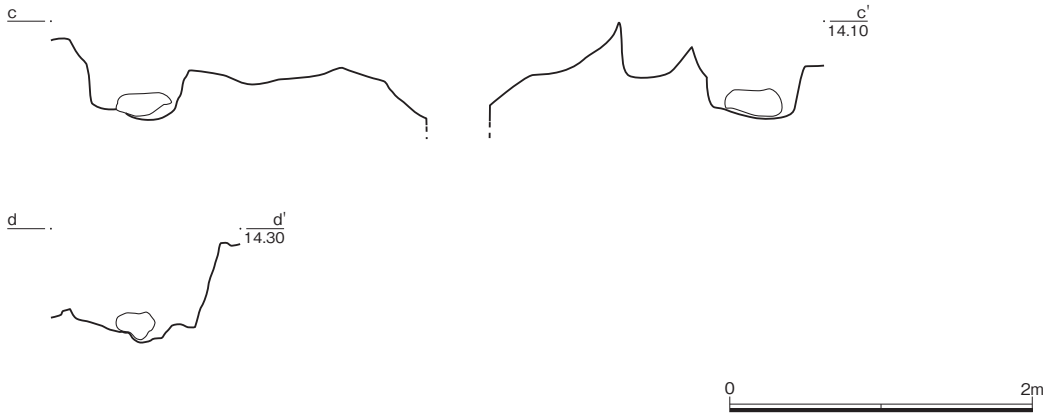

1　黄褐色土　（ローム主体、炭化物粒・焼土粒少含、粘性やや弱、しまりやや弱）

Ⅳ-6図　SA68

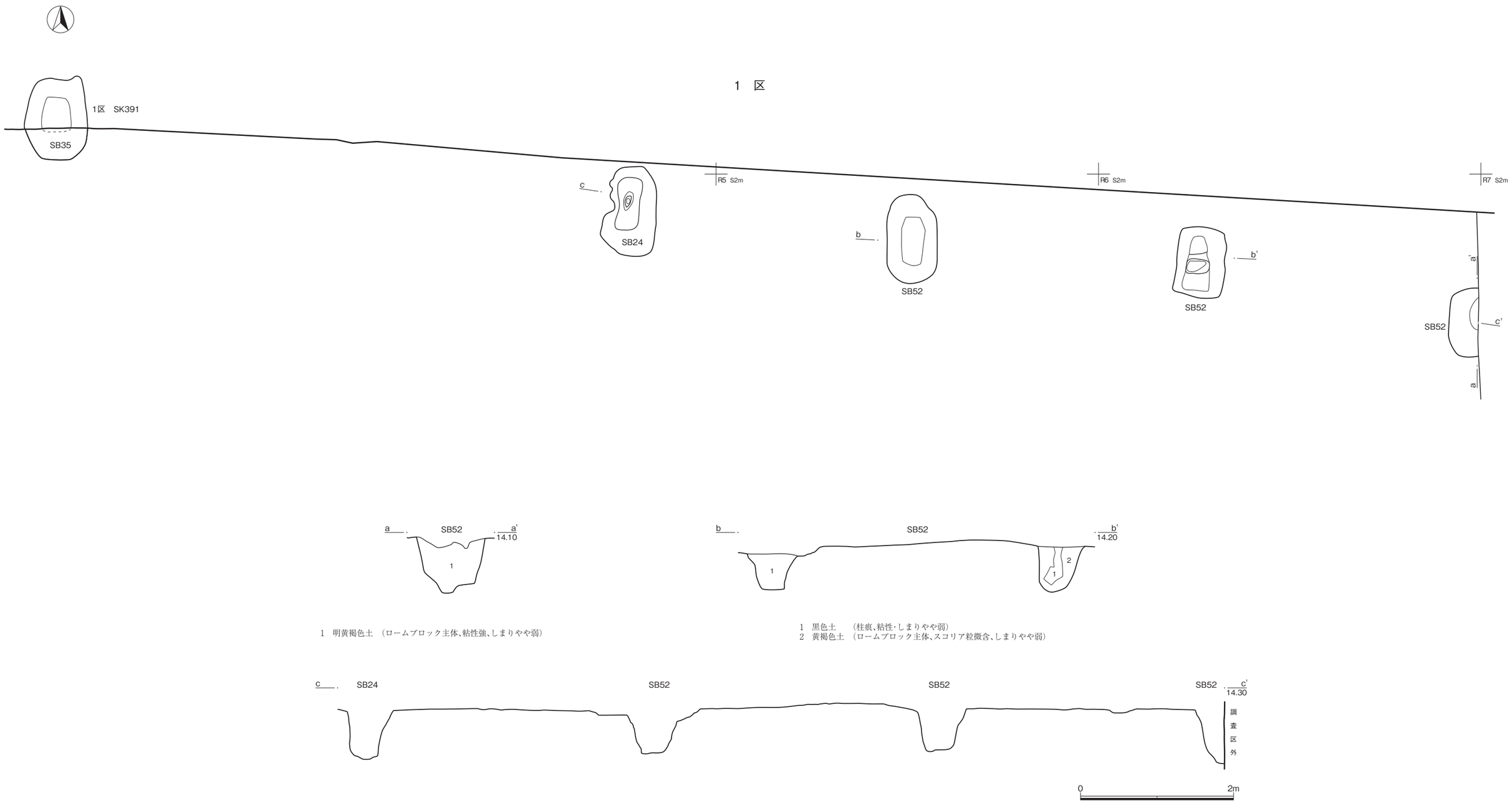



Ⅳ-7図　SB38

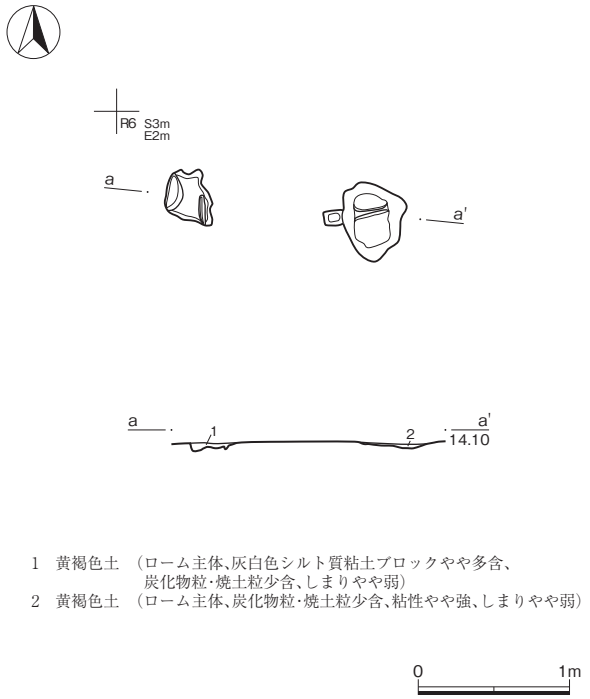



Ⅳ-8図　SB41

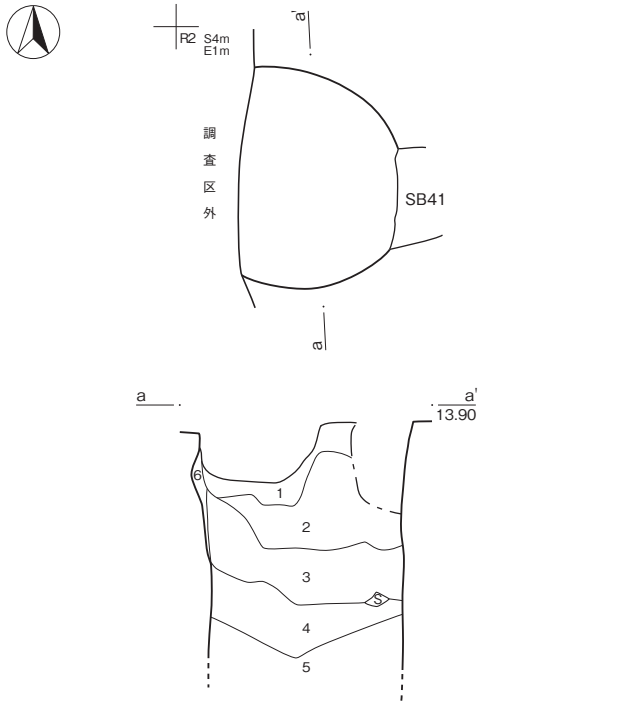



Ⅳ-9図 SB24、SB35、SB52



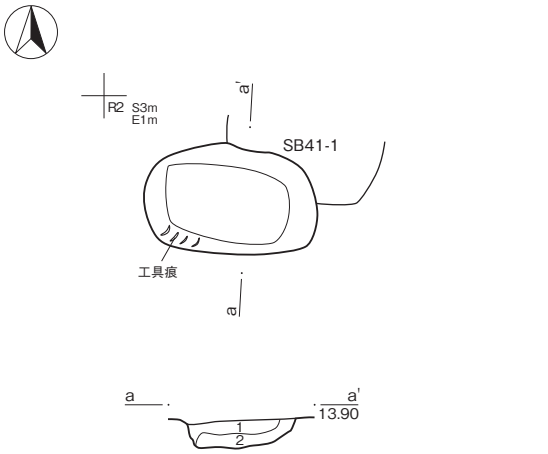

1　黄褐色土　（ローム主体、灰白色シルト質粘土ブロックやや多含、炭化物粒・焼土粒少含、しまりやや弱）
2　黄褐色土　（ローム主体、炭化物粒・焼土粒少含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅳ-10図　SB55



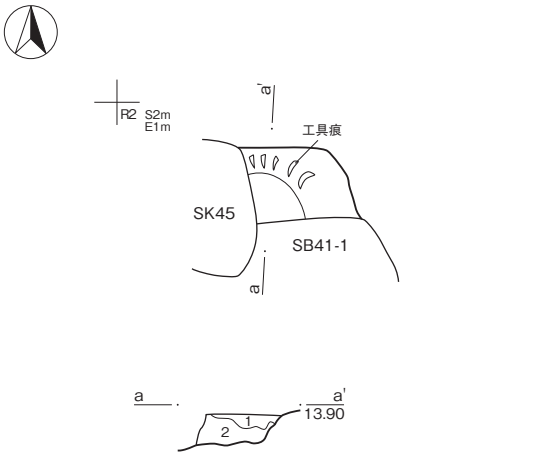

1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒・礫少含、炭化物粒・ロームブロック微含、粘性・しまりやや弱）
2　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒・焼土ブロックやや多含、炭化物粒・炭化物ブロック少含、明灰色砂ブロック微含、粘性やや強）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物粒・炭化物ブロック・焼土粒・焼土ブロック・礫少含、粘性弱、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック・炭化物粒・炭化物ブロック少含、焼土粒・焼土ブロック・礫微含）
5　暗褐色土　（炭化物粒・炭化物ブロック・焼土粒・焼土ブロック少含、ローム粒微含、粘性やや弱）
6　暗褐色土　（炭化物粒・焼土粒微含、粘性やや弱）

Ⅳ-11図　SE46



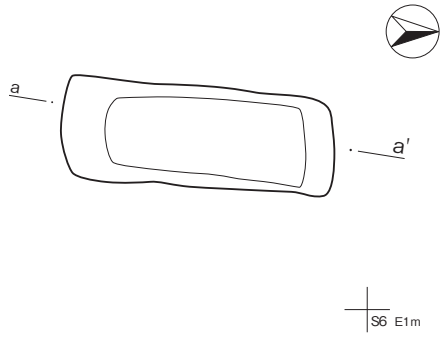

1　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒微含、粘性弱、しまりやや弱）
2　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、炭化物粒・炭化物ブロック・焼土粒・焼土ブロック微含、粘性やや強）

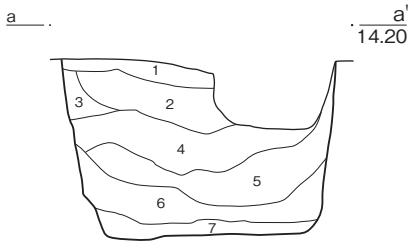
Ⅳ-12図　SK40




1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、炭化物粒・明灰色粘土・シルト少含、粘性弱、しまりやや弱）
2　明黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含、スコリア微含、粘性やや強、しまりやや弱）

Ⅳ-13図　SK42

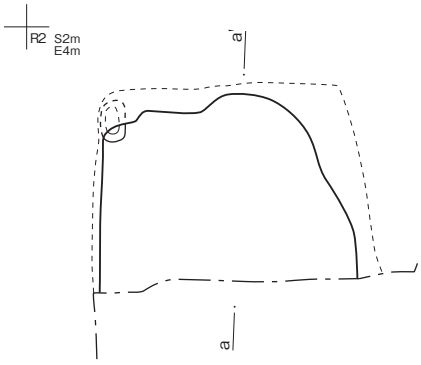


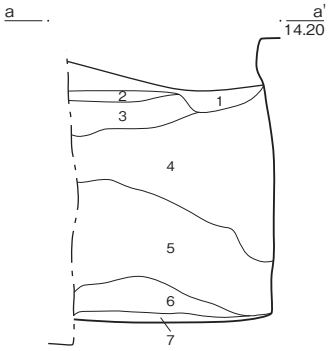




1　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック極多含、焼土粒・焼土ブロックやや多含、炭化物小含、粘性強）
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒少含、粘性やや弱、しまりやや弱）
3　黄褐色土　（ローム主体、粘性やや弱、しまりやや弱）
4　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロック多含、黒色土ブロックやや多含、炭化物微含、粘性やや弱、しまりやや弱）
5　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロックやや多含、しまりやや弱）
6　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黄白色粘土ブロックやや多含、瓦片含、しまり弱）
7　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック・黄白色粘土ブロックやや多含、しまり弱）

0　1m

Ⅳ-14図　SK59

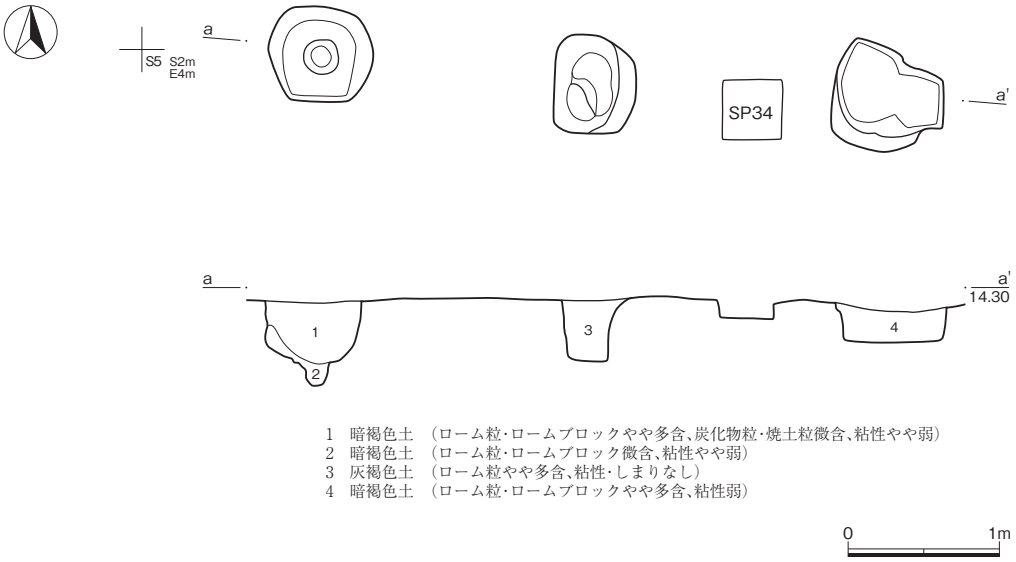



1　暗褐色土　（小円礫やや多含、ローム粒・ロームブロック・焼土粒少含、焼土ブロック微含、粘性やや強、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（小円礫やや多含、ローム粒・焼土粒微含、粘性強、しまり極強）
3　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロック極多含、炭化物粒・焼土粒・焼土ブロック・黒ボク土粒少含、スコリア微含、粘性やや強、しまり強）
4　明黄褐色土（ローム主体、北側下部に焼土粒・焼土ブロックやや多含、粘性やや強、しまりやや弱）
5　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロック・炭化物粒・炭化物ブロック・灰色シルト・細砂粒やや多含、粘性弱、しまりやや弱）
6　黒色土　（黒ボク土主体、ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性やや強、しまりやや弱）
7　暗黄褐色土（ローム主体、炭化物粒微含、粘性やや強、しまりなし、天井崩落土か？）

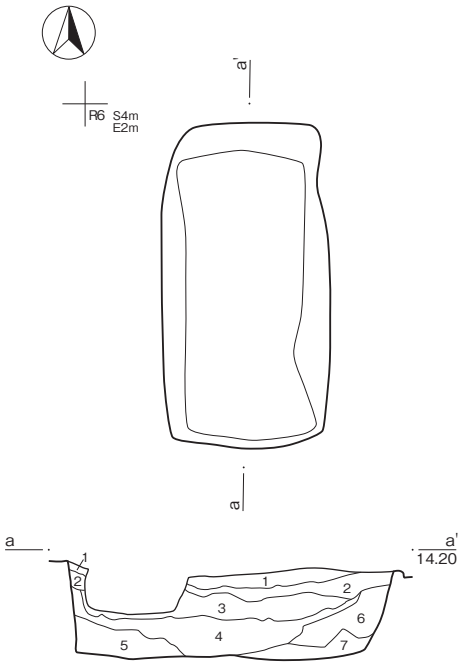
0　2m

Ⅳ-15図　SU17




1　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物粒・焼土粒微含、粘性やや弱）
2　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロック微含、粘性やや弱）
3　灰褐色土　（ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性弱）

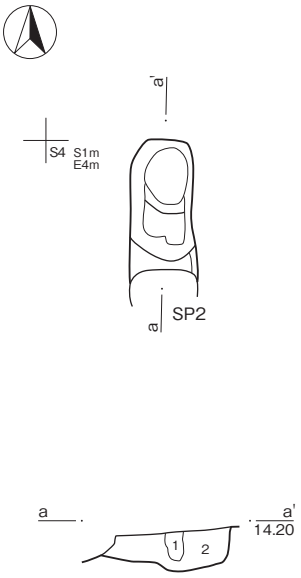
Ⅳ-16図　SB27




1　暗褐色土　（南側に焼土粒やや多含、小円礫少含、ローム粒・ロームブロック・炭化物粒・灰色粘土粒微含、粘性やや弱、しまり強）
2　明黄褐色土　（ローム主体、北側に炭化物粒多含、灰色粘土粒・南側に焼土粒微含、粘性やや弱、しまり強）
3　褐色土　（炭化物粒多含、灰色粘土粒・ローム粒・ロームブロック少含、焼土粒微含、粘性強）
4　灰暗褐色土　（炭化物粒多含、焼土粒・灰色粘土粒少含、ローム粒・ロームブロック・小円礫微含、白色粘土が集中しているところあり、粘性やや弱）
5　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、炭化物粒・小円礫・灰色粘土粒少含、粘性強）
6　灰褐色土　（炭化物粒・貝※・上部に焼土・灰色粘土粒多含、ローム粒・ロームブロック・小円礫微含、粘性やや弱）
※上部にアサリ（二枚貝）、下部に巻き貝を含む
7　灰褐色土　（灰色粘土粒多含、小円礫少含、ローム粒・炭化物粒微含、粘性強、しまり弱）

0　2m

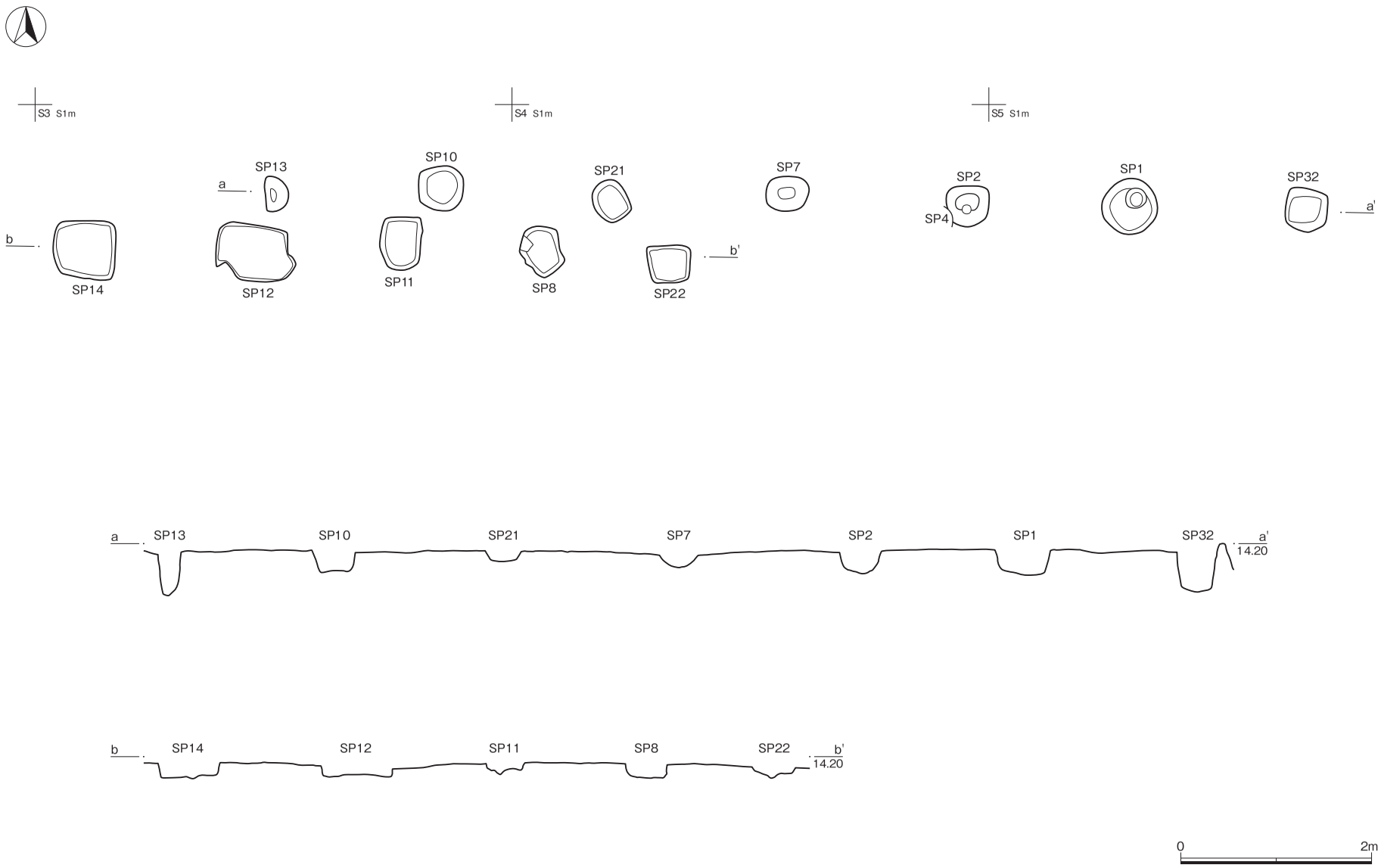
Ⅳ-17図　SK43



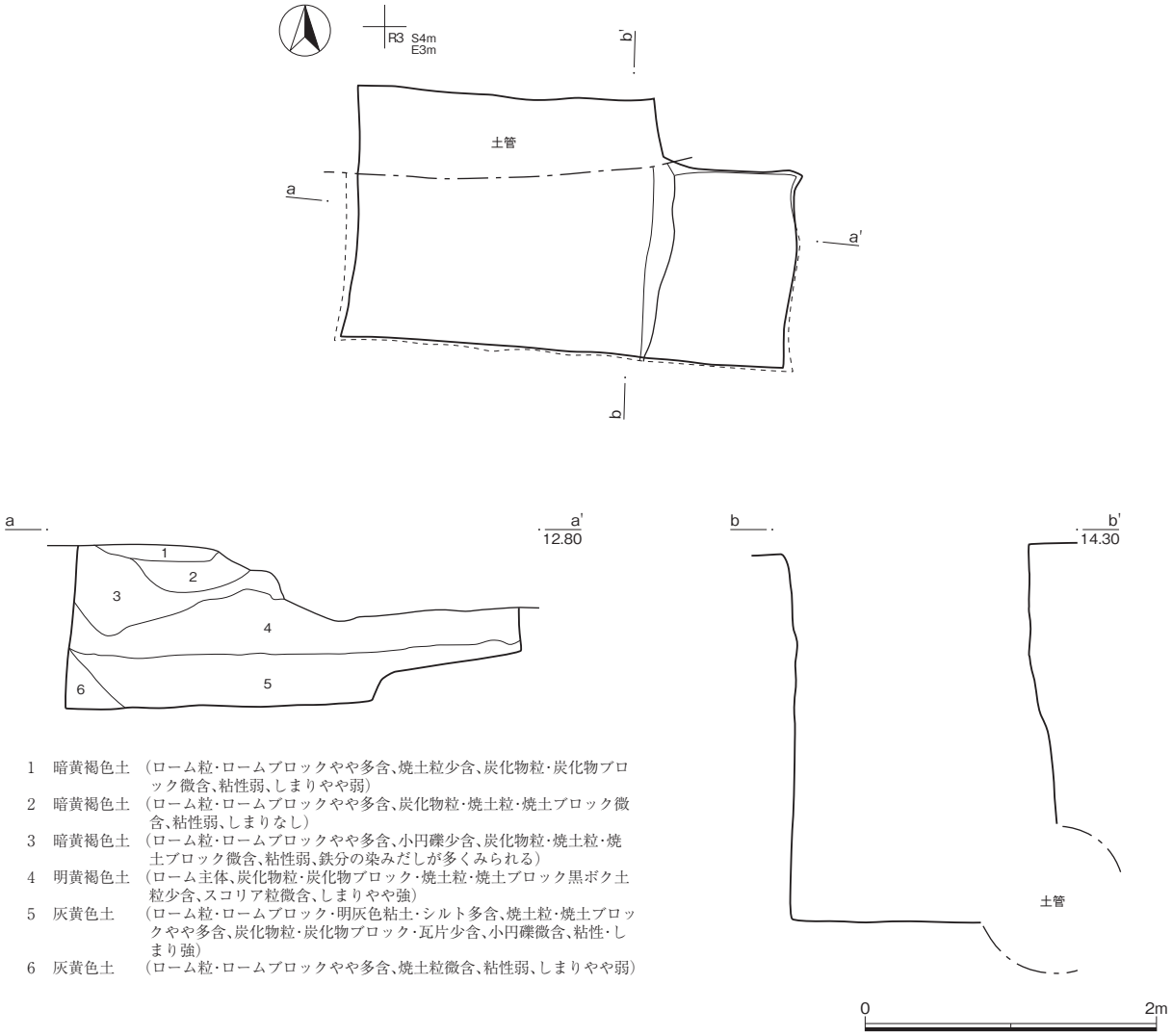

1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック・小円礫やや多含、炭化物粒微含）
2　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、炭化物粒・炭化物ブロックやや多含、粘土粒・小円礫・褐色粗砂少含、炭化物粒微含、粘性弱）

0　1m

Ⅳ-18図　SP3

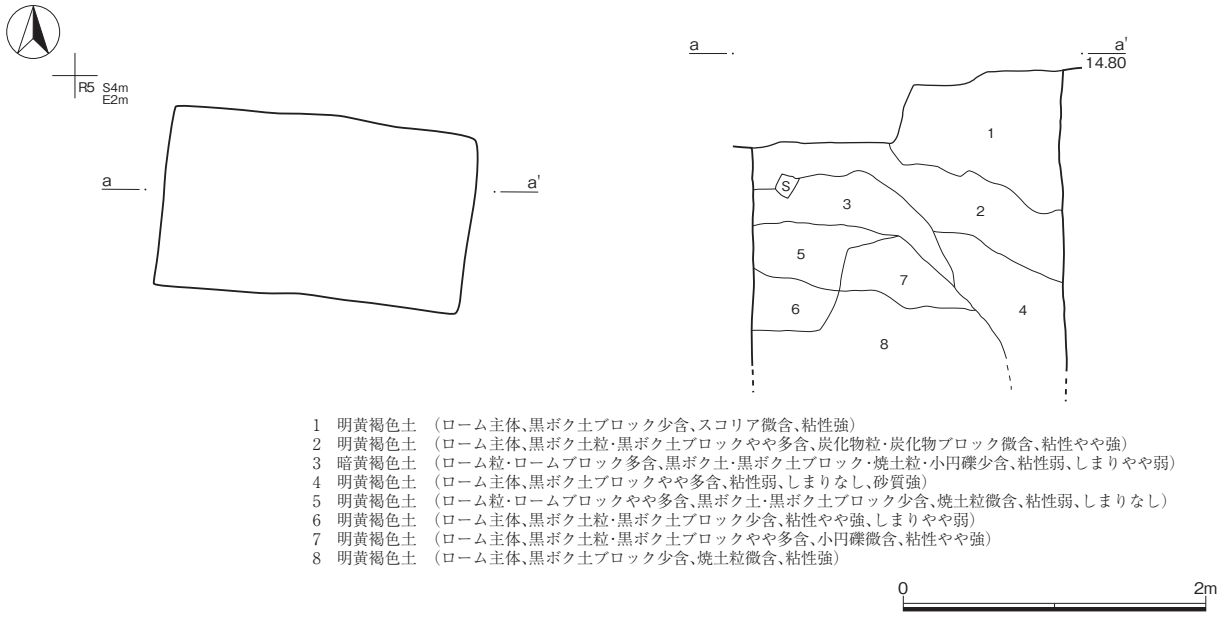



Ⅳ-19図　SP1、SP2、SP7、SP8、SP10、SP11、SP12、SP13、SP14、SP21、SP22、SP32




1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒少含、炭化物粒・炭化物ブロック微含、粘性弱、しまりやや弱）
2　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、炭化物粒・焼土粒・焼土ブロック微含、粘性弱、しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、小円礫少含、炭化物粒・焼土粒・焼土ブロック微含、粘性弱、鉄分の染みだしが多くみられる）
4　明黄褐色土　（ローム主体、炭化物粒・炭化物ブロック・焼土粒・焼土ブロック黒ボク土粒少含、スコリア粒微含、しまりやや強）
5　灰黄色土　（ローム粒・ロームブロック・明灰色粘土・シルト多含、焼土粒・焼土ブロックやや多含、炭化物粒・炭化物ブロック・瓦片少含、小円礫微含、粘性・しまり強）
6　灰黄色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、焼土粒微含、粘性弱、しまりやや弱）

Ⅳ-20図　SU16




1　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土ブロック少含、スコリア微含、粘性強）
2　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土粒・黒ボク土ブロックやや多含、炭化物粒・炭化物ブロック微含、粘性やや強）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、黒ボク土・黒ボク土ブロック・焼土粒・小円礫少含、粘性弱、しまりやや弱）
4　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土ブロックやや多含、粘性弱、しまりなし、砂質強）
5　明黄褐色土　（ローム粒・ロームブロックやや多含、黒ボク土・黒ボク土ブロック少含、焼土粒微含、粘性弱、しまりなし）
6　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土粒・黒ボク土ブロック少含、粘性やや強、しまりやや弱）
7　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土粒・黒ボク土ブロックやや多含、小円礫微含、粘性やや強）
8　明黄褐色土　（ローム主体、黒ボク土ブロック少含、焼土粒微含、粘性強）

Ⅳ-21図　SX26

## 第３節　遺物

本地点出土遺物は、調査地点の位置関係から、天和２年までは黒多門邸、天和３年以降は、大聖寺藩邸に関する資料と考えられる。

本文中に示した、磁器・陶器・土器の分類基準は、本報告書第３分冊を参照されたい。

### 磁器・陶器・土器（Ⅳ－22、23図）

SU17（Ⅳ－22図）

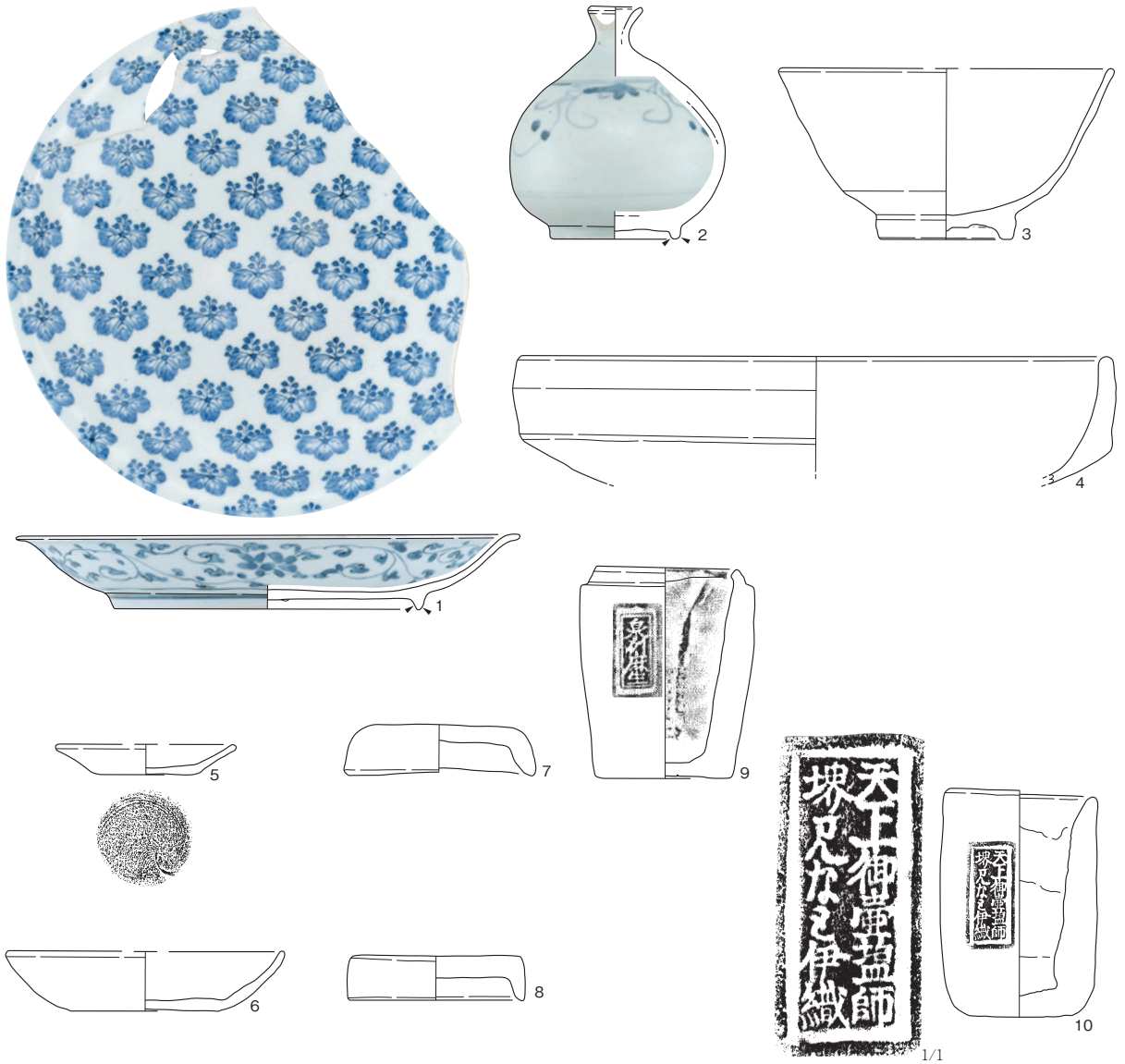
１、２は肥前系染付磁器である。１は高台の断面形が三角形を呈す皿・平鉢でJB-2-c。染付は手描きによるものである。高台内にはハリ支え痕が５箇所認められる。２は油壺でJB-12。畳付には白色砂粒が熔着する。３は陶器碗でTZ-1。高台内は「の」の字状に削り込まれ、畳付幅は一定ではない。見込みの釉の剥落が著しいが、畳付まで含めて内外面が白化粧され、透明釉が施釉されている。４～10は土器である。４は土師質の底部丸底のほうろくでDZ-47-a。５、６はかわらけでDZ-2-a。６の口縁部には灯心痕が認められる。７、８は塩壺蓋で、７は断面形がドーム形を呈す無印のものでDZ-00-a、８は断面形が凹形を呈す無印のものでDZ-00-cに分類される。８は９の蓋の可能性がある。９、10は塩壺で、９は板作成形、小枠に「泉州麻生」の刻印のあるものでDZ-51-h、10は輪積成形、「天下一御壺塩師堺見なと伊織」の刻印のあるものでDZ-51-dに分類される。９は内面２箇所に繋ぎ目が認められる。

SK43（Ⅳ－22、23図）

１～５は肥前系磁器で、２は青磁、他は染付が施される。１～３は碗で、１、３は高台断面が三角形を呈す碗でJB-1-cに分類される。１は高台内に「宣徳年製」銘が書かれている。３は腰部がやや大きく張り出し、体部がほぼ垂直に立ち上がる筒形碗である。口銹が施される。高台内には「宣明年製」銘が書かれている。２はいわゆる初期伊万里碗でJB-1-a。高台部は畳付も含め鉄釉が施釉される。４、５はいわゆる初期伊万里の皿・平鉢でJB-2-aに分類される。４は鍔状の口縁部を有し、口唇部は輪花にされる。裏文様には圏線が１本巡らされる。５の胎土は灰色味を帯び、呉須の発色はにぶい。６は肥前系陶器青緑釉輪剥皿でTB-2-a。口縁部は外反し、畳付には砂目痕が認められる。７はかわらけでDZ-2-a。胎土はにぶい橙色を呈す。

### 瓦（Ⅳ－24図）

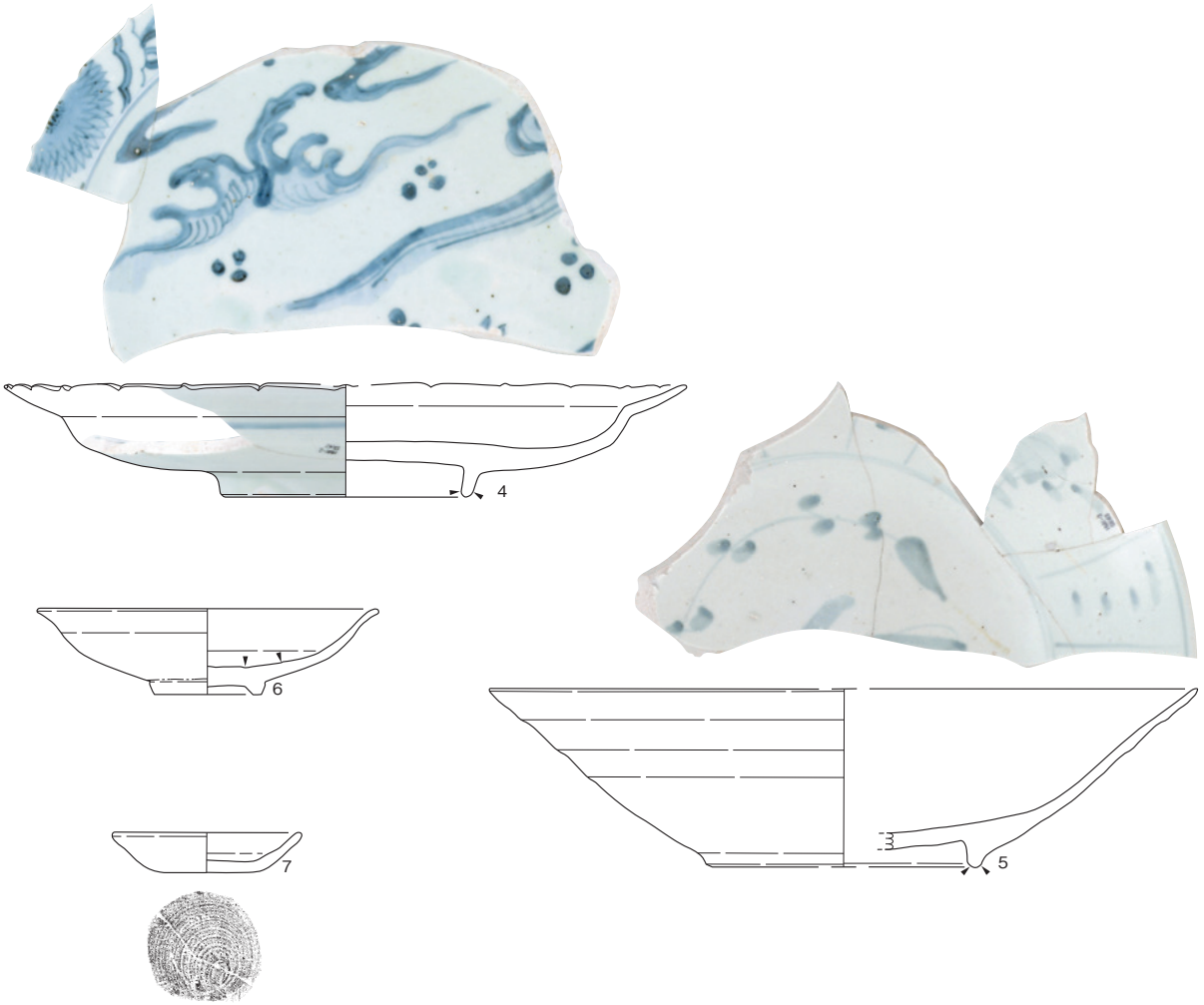
１はSU17出土の鬼瓦である。切据鬼。文様無し。背面は鬼瓦を銅線で屋根に固定させるための把手（龍頭）が付けられている。大棟の端に使う、下部は直線。



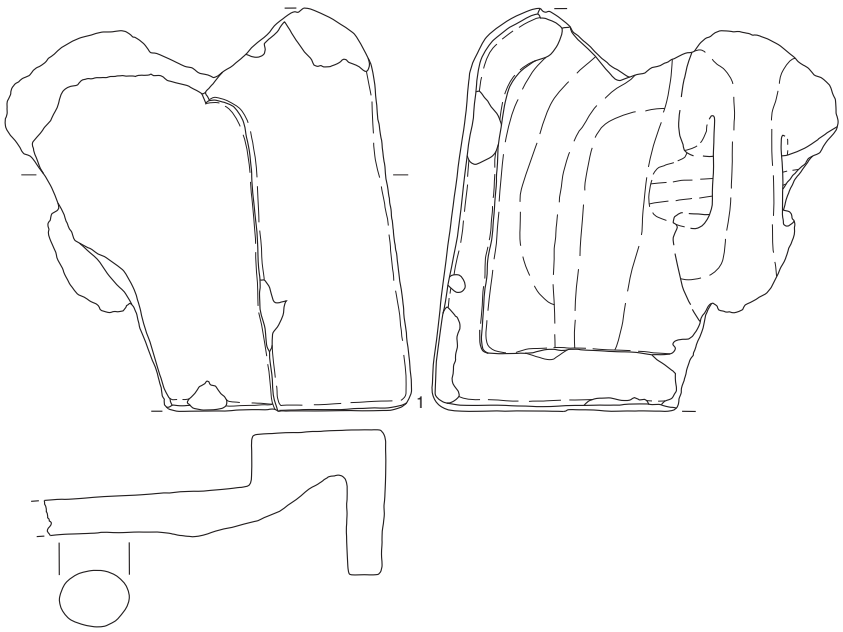

SU17

SK43（1）

Ⅳ-22図　SU17、SK43（1）　磁器・陶器・土器




Ⅳ-23図　SK43　磁器・陶器・土器(2)




Ⅳ-24図　瓦

## まとめ

基本層序や遺構検出状況などは入院棟 A 地点 1 区南側と同じ様相であり、本調査地点から 1 区まで続く建物跡なども確認されている。大聖寺藩江戸上屋敷内部を描いた唯一の絵図面とされる『江戸藩邸上屋敷絵図』（文化年間、詳細は研究編宮崎参照）をみると、藩邸の東から北側に御殿などの建物、西側に長屋建物が描かれているが、無縁坂に面する藩邸南東側には建物はごく少なく、塀や通路、門などの施設のみである。文化年間のような屋敷内の状況にいつ頃からなったのかは不明であるが、1 区や本調査地点で検出される天和 3（1683）年の屋敷割り変更に伴う整地層を上限とする C 面でも遺構密度はかなり希薄であり、屋敷割り変更直後から藩邸南東側の利用頻度はあまり高くなかったと推定される。外部の通り（無縁坂）に近接した場所はあまり使用しない（あるいは使用は避ける）という意識が働いているのだろうか。

7 層にパックされている D 面（地山）で確認される遺構は、検出状況や出土遺物の年代観などから多くが黒多門邸あるいは加賀藩拝領以前の遺構と考えられる。1 区では SD422 という加賀藩と大聖寺藩の地境溝が検出されており、本調査区の西側延長線上にもその地境溝が伸びていた可能性が高いが、調査区外であり、それに付随するような遺構も検出されなかった。ただし SD422 と平行する遺構主軸を有する SB41 という遺構が確認されており、その形態などから地境に沿って構築された塀や門などの可能性もある。

# 第Ⅴ章　HWK－4 地点の調査

## 第１節　調査の概要

HWK－4 は K～L・17 グリッドに位置する。調査面積は 4.9㎡。調査は 1996 年 6 月 24 日から 6 月 28 日まで行った。調査地点は講安寺の墓域に位置し、小穴、土坑、墓坑を検出した。医学部附属病院入院棟 A 地点 2 区では A ～ C3 枚の生活面を確認している。当地点で確認した生活面は 2 区の B 面に該当する。

| 遺構 | | 遺構図 | 確認面 | グリッド | 遺物図版（V-@） | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | No. | V-@ | | | 陶磁器<br>土器 | 瓦 | 木 | 金属 | 銭 | 石 | ｶﾞﾗｽ | 動物<br>製品 |
| ST | 1 | 1 | ローム面 | L17 | 2 | | | | | | | |
| SK | 2 | 1 | ローム面 | L17 | | | | | | | | |
| SK | 3 | 1 | ローム面 | L17 | | | | | | | | |
| SP | 4 | 1 | ローム面 | K17 | | | | | | | | |
| SP | 5 | 1 | ローム面 | L17 | | | | | | | | |
| ST | 6 | 1 | ローム面 | K17 | 3 | | | | | | | |
| ST | 7 | 1 | ローム面 | K17 | | | | | | | | |
| ST | 8 | 1 | ローム面 | K17 | | | | | | | | |

HWK－4　遺構一覧表

## 第２節　遺構

ST1（Ⅴ－1 図）

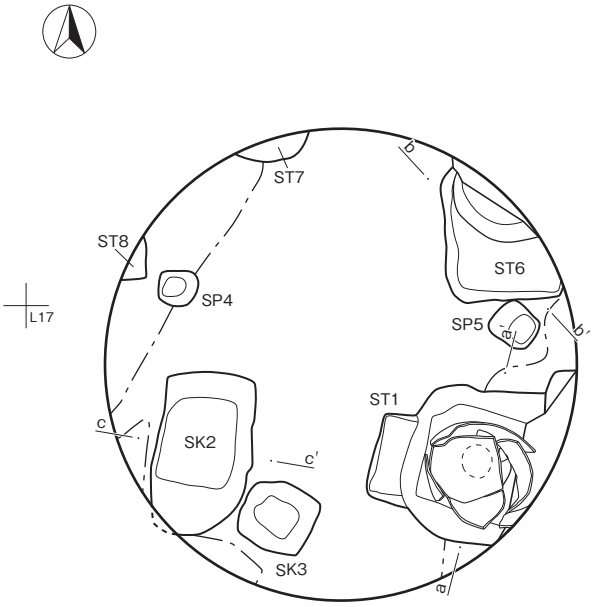
L17 グリッドに位置する。甕棺墓で東側は調査区外に拡がる。平面形は長方形。確認された範囲で長軸 89cm、短軸 86cm、深さ 120cm を測る。甕棺は底部を残して上部が失われ人骨は出土していないことから改葬が行われたと考えられる。

SK2（Ⅴ－1 図）

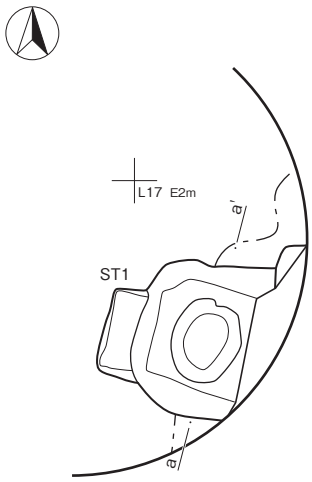
L17 グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形、長軸 90cm、短軸 53cm、深さ 53cm を測る。

ST6（Ⅴ－1 図）

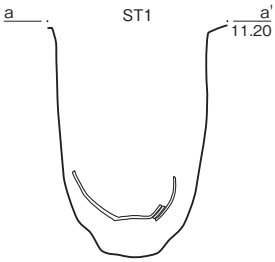
K17 グリッドに位置する。墓壙で北東側は調査区外に拡がる。平面形は長方形、確認された範囲で東西 66cm、南北 72cm、深さ 58cm を測る。人骨は確認されていないことから改葬が行われたと考えられる。

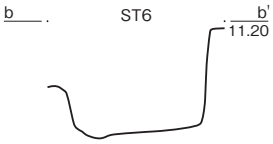


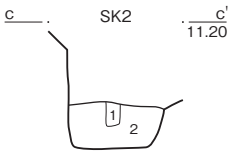

全体図




ST1　掘方




SK2
1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　明褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含）

Ⅴ-1図　HWK-4全体図･ST1･ST6･SK2

## 第３節　遺物

本地点出土遺物は、調査地点の位置関係および出土遺構の様相から、全て講安寺に関する資料と考えられる。

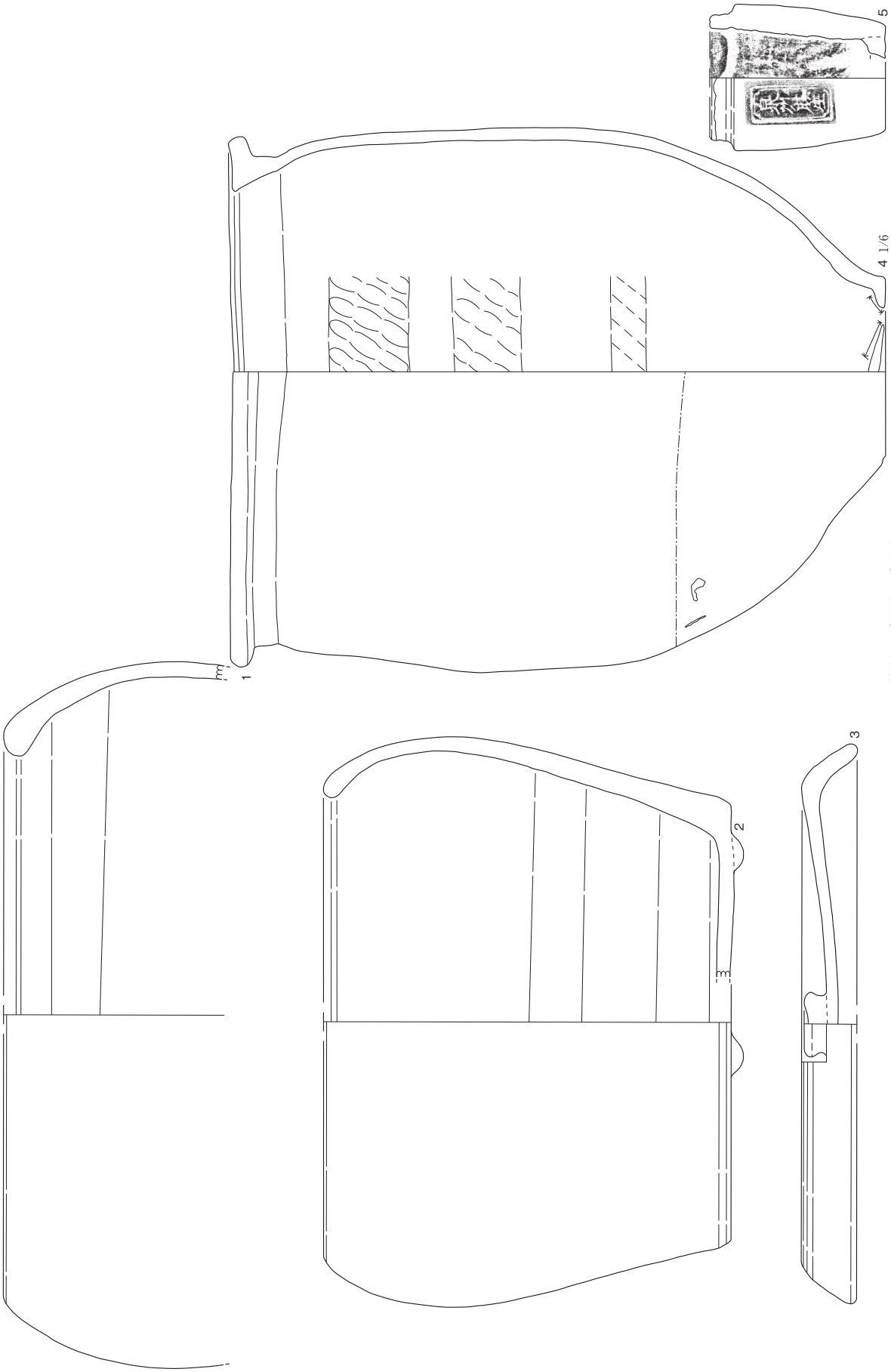
本文中に示した、磁器・陶器・土器の分類基準は、本報告書第３分冊を参照されたい。

ST1（Ⅴ－２図）

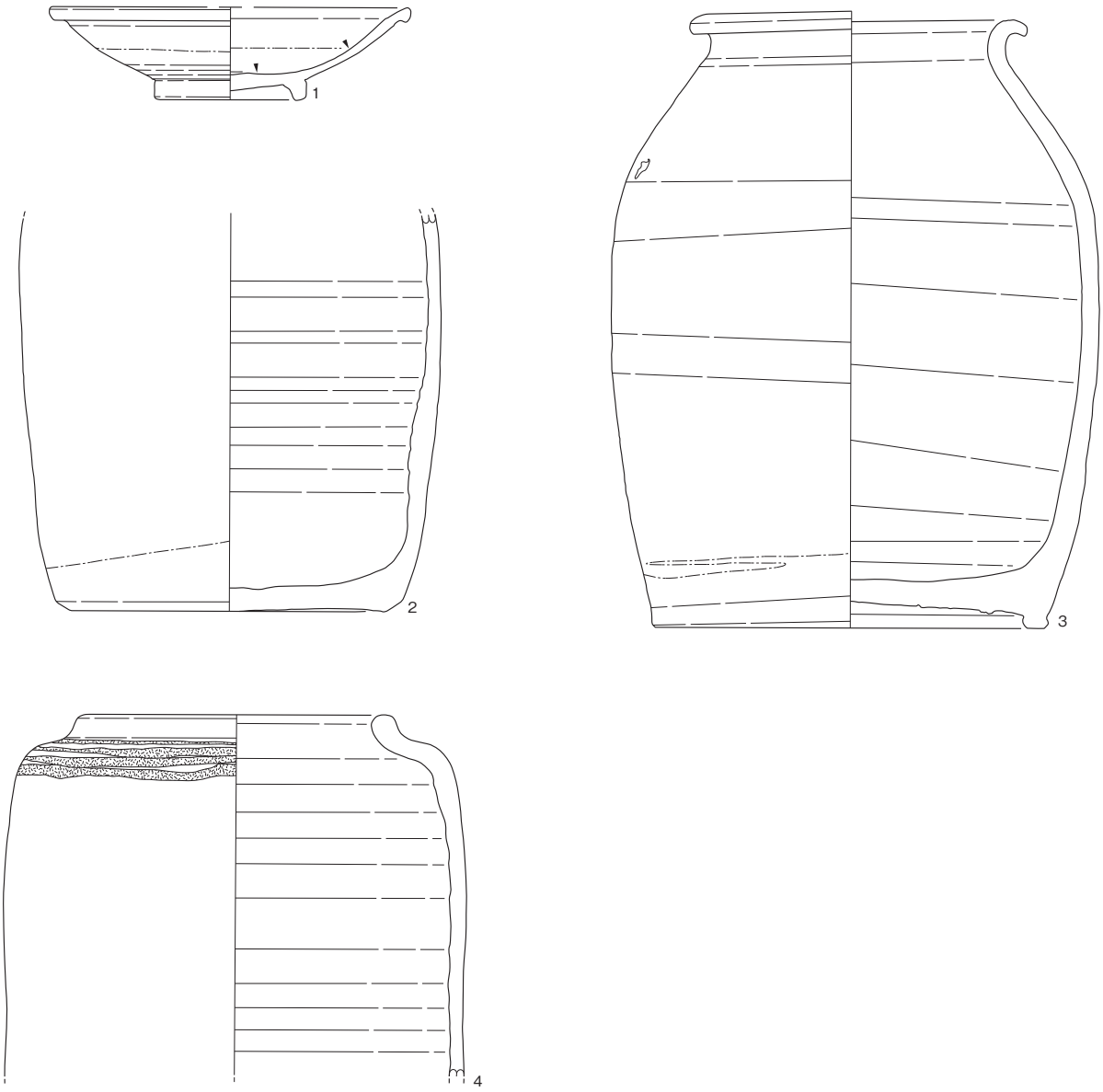
１、２は土師質火消壺でDZ-31-i。胎土はともに橙色を呈すが、２の内側下半分は被熱のためか白色化している。２の底部脇には小さな面取りが施され、底部には丸脚が１箇所残る。３は土師質火消壺の蓋である。肩付近は強く削られ、磨かれている。４は甕棺に利用された常滑系陶器壺・甕でTG-15。ほぼ完形で、鍔状の口縁部の張り出しは小さいものである。内面には粘土の繋ぎ目が帯状に３箇所確認され、その部分には指圧痕が多数認められる。口縁部あたりから胴部下までは泥漿が塗布されるが、その切れる辺りに不整方形の熔着痕が４箇所認められる。胴部と底部の境目あたりに窯印のようなヘラ書きがある。底部１箇所が２次的に穿孔されている。５は板作成形、大枠に「泉州麻生」の刻印のあるものでDZ-51-i。３ピースで成形され、内面にはやや粗い布目が認められる。胎土は白色に近い橙色を呈す。

ST6（Ⅴ－３図）

１は瀬戸・美濃系陶器輪禿皿・平鉢でTC-2-m。見込みと底部付近は大きく釉が拭き取られている。２、３は瀬戸・美濃系陶器壺・甕である。２はベタ底のものでTC-15-e。畳付脇が面取りされ、外面にのみ鉄釉が付け掛けされる。底部には輪状の熔着痕が認められる。３は肩衝で、高台を有すものでTC-15-f。底部が削り込まれ、輪高台状にされる。口唇部には目跡が４箇所、輪高台のすぐ内側にも砂目が４箇所ある。内外面に鉄釉が施釉され、底部付近のみ拭き取られている。４は硬質瓦質蓋付壺・甕でDZ-15-a。外面は口縁から肩部までは横方向に、肩部から下は縦方向に磨かれている。特に肩部付近は幅1cm弱ほどで削られた上が強く磨かれ、その部分が顕著な輪状の痕跡として認められる。




Ⅴ-2図　ST1　磁器・陶器・土器




V-3図　ST6　磁器・陶器・土器

## まとめ

HWK－4 は K～L17 グリッドに位置する。調査面積は 4.9㎡で講安寺の墓域に位置する。小穴、土坑、墓壙 8 基を検出している。土坑、墓壙は、南北の遺構軸の遺構群と南北の軸から東へ約 11° 振れる遺構軸の遺構群、その他に分かれる。南北の軸から東へ約 11° 振れる遺構は ST1、SK2、SK3 である。南北の遺構軸の遺構は SP4、ST6、ST8 である。SP4 は小穴で、東西 22cm、南北 20cm を測る。その他の軸の遺構は SP5。小穴で東へ 38° 振れる。「諸宗作事帳」所収講安寺境内図、「講安寺境内図」（講安寺蔵史料）によれば、講安寺敷地の北側は墓域、南側は本堂と門前町屋、門前裏屋で HWK－4 の調査で墓域は G16 ～ 17 グリッドから K～L17 グリッドまで拡がっていることが確認できた。同じ講安寺敷地を調査した医学部附属病院入院棟 A 地点 2 区では A ～ C3 枚の生活面を確認しているが当地点では、2 区の B 面に該当する墓域のみを確認した。A 面は後世の撹乱によって削平されたと考えられ、C 面の遺構、遺物を確認できなかったのは、2 区との土地利用状況の差によると考えられる。

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点
報告編《第 6 分冊》

2016 年 3 月 25 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　　能登印刷株式会社